『うむ、どうしても明日、緊急な用があるんだ、それにあなたの身の落着き場所も一日も早くねさうでせう？』と男は言つて、立ち上りながら丹前を脱いだ。

かづ子はしほれた樣子で彼れに洋服を着更へさせたが、不意に彼れに縋りついて、

『あなた、私を捨てないでね』と言つて、あとは男の體にしみ入るやうに涙を流した。

『馬鹿な、何を言ふんです』と言つて、村井も彼女を抱いた。がその接吻は冷たさうであつた。

村井は女中にトランクを持たせて急いで去つた。

かづ子は後を見送らなかつた。窓からも椽からも自働車を覗いて見ようともしなかつた。ひとりぼつねんと取り殘されたやうに、寂しさうに、座敷のまん中にすはつて、ぼんやりしてゐた。自働車の音は次第に微になつて消え去つた。

（十二）

彼女は二三日の間であつたが、溫泉宿に一人、寂しい退屈な日をうつら〳〵として過した。彼女は一日に二度ばかりも、別れた良人廣川の手紙を出して讀むでもなく、讀まぬでもなく、眺めては考へてゐた。神經衰弱にかゝつた大學生とかゞ隣の部屋に來てゐたが、

『あなた、如何です』といふやうなことを言つて、彼女に近づかうかと試みるのを、彼女は不卽不離な態度であしらつてゐたのが、

『あなた、如何です、散歩は？　お供いたしませう』と例の青年が此時入つて來たので、彼女はにこりと笑つて、

『あら、いらつしやい』と迎へて、座布團を彼れを勸めたけれど、青年はそれに腰を下さうともせず、

『如何です、散歩は？』と再び言つた。

『さうですね、あたし近頃歩きたくないわ、それよかお話しませうよ、あなた、學校の話でも聞かして頂戴』と彼女は男が誘惑されるやうな樣子をして見せた。

『さうですか、そんなら散歩は斷念しませう』と青年は言つて、座布團の上へあぐらをかき、

『學校の話ですか』と言つて、撫でつけた長い髪の毛の上に手をあげて、

『つまりませんよ、しかし折角のことですから、僕が神經衰弱にかゝつた抑もの原因を物語ることに致しませうよ』と辯じた。

『ほゝゝ面白さうね、失戀物語ですか、若きエルテルの悲しみつてんでせう？　たゞでは聞かれ

ませんね、なにか、お菓子でも……』と彼女は蓮つ葉になつて華かにしやべつた。

『じよ、じよ、じようだんぢやないですよ、そんな洒落れた原因なんか、僕のやうな頑迷な奴にあるもんですか、しかしですな、お菓子を買ふくらゐのことは致しますよ。』

『いゝことよ、此處にあるわ』と彼女は菓子器の蓋をとつて突き出した。

青年は頭をぴよこりと下げて、指を蟹の指のやうに曲げて菓子をとつて口の中へ投げ入れた。

『あなた、僕の神經衰弱は地理の先生のお蔭ですよ』

『さう、あなた、科は何に?』

『商科ですがね、まだ豫科の内は地理なんてものがあるんですよ、その地理の先生がね、試驗問題に、あの世界地圖を見ると、南洋邊に大きな島の側に黑胡麻のやうになつた小さな島が何百となくありませう、あんな黑胡麻のやうな奴の中から出たら目に撰定して、その面積人口を上げよなんかと言ふんです、ところが、それは自分は何年前だかの、世界の各國や島々の人口を調査した大著書があるので、それを見させたさにそんな問題を出すのですぜ、學生は仕方がないから、圖書館へ行つてその著書を塵を拂つて調べねばならんのですよ』

『まあ、面白いこと、面積は變ならいかも知りませんが、人口なんてものは毎年變るもんでせう

何年も前の、黑胡麻のやうな島の人口を……、ほゝゝゝ、おゝ、おかしい』

『あなた、あなたはおかしいか知りませんが、僕達の身になつて御覽なさい、泣きたいやうですよ、それを覺えてゐなけりや落第ですからね』

『まあ、お氣の毒ね、餘程も頭のからつぽの人間でもなけりや覺えてはゐられませんわね』

『さう言はれちや、僕達の頭は頗る充實してゐるやうですけれどもね、はゝゝゝ』

かづ子は番茶を大きな茶碗に一ぱいついで出し、自分ものび〳〵と氣持よけにして呑んだ。

『この夏の學期試驗にも、あのあなた御存じですか、歐洲には有名な運河が二十もあるさうですが?』

『いゝえ、あたしの知つてゐるのは、スエズとパナマだけよ。さうですかね、歐洲に二十もあるの』

『え、さうですよ、その二十もある運河の幅さ、長さ、深さなどが試驗問題に出たのです』

『あら、まあ、船長さんにでもなるの?』

『こりや皮肉だ、はゝゝゝ』

『だつて、運河ですもの、廣さが廣くなることも、深くなることも、淺くなることもありませういまでも、少し淺いからもつと深くしようつて、掘鑿してゐるかも知れませんわ、三年も五年も

前のそんなす法を知つて何んになるの』

『あなた、なにも僕が知つたこつちやありませんよ、僕をそんなに責めたつて……』

『まあ、失禮、隨分くだらないことしてゐたものですね』

『だから、この通りの神經衰弱ですよ、失戀の結果なら有りがたいが、はゝゝゝ』

『ほゝゝ、失戀なんてよりは、戀でもなさりや神經衰弱なんかなほりますよ』

『さうですかな、なにか其邊にありませんかね』

『虎穴に入らずんば、虎兒を得ずよ』

『こりや、かなはん、退却々々』と青年は兩腕で頭を抱へて隣座敷へ逃げ去つた。

四日目の朝になつて、待つてゐた彼女のところへ村井のかはりに、彼れからの手紙が來た。彼れは直ぐには開かず、暫く封筒を眺めてゐたが、遂に封を切つて讀んだ。

拜啓、前略御免被下度候、一日も早く參りたしと存じ、取り急ぎ申候へ共、目下の景氣に充分活動せざれは、せざる時機無之候間、心ならずも商用のため失禮仕候、家の方もそんなやうな次第にてゞだ取り定めず、何んとも申譯無之候、本日小生、貴女にお目にかゝることを心嬉しく待ち居り候へしに、突然本社より至急上京の旨電報にて申し越し來り候ため、誠に殘念至極のことな

がら、即刻上京の途に上るべく、寸暇を得て、此狀相認め申し候次第に候、歸神は一週間後となるべくと存じられ候故、貴女にお目にかゝるのは今日より十日目と相成るべしと思はれ候、甚だお氣の毒に候のみならず、小生は一層戀しく、焦るゝ思ひに候へ共、これも職務とあれは、萬腔の憾みを忍んで、その運命に從ふよりほかに道なくと諦め居り候、何卒ぞ惡しからず思召し候てお待ち下され度、小生必ず參るべく候、先づは用のみ、匆々頓首

彼女は讀み了つて力無く、その手紙を放した、手紙は膝から辷り落ちて、風のために捲かれて二三間さきの火鉢の側に押しつけれた。彼女は全身を長くのばして疊の上に伏して動かなかつた。溫泉宿は靜かであつた。夏と冬との間の最も活動し易い時季なので、溫泉に來る者も少いと見えて彼女の宿つてゐる溫泉宿も、隣に例の青年が居り、階下の離れに御隱居さんらしい老人がゐるのみであり、女中も數が減じられて、勝手の方も廊下も人の聲も足音もしなかつた。彼女はいつの間にか眠つてゐたが、手拭を持つて湯殿へ下りて行つて、ほうと顏色を染めて歸つて來た。

彼女は机に寄りかゝつて何事かを考へてゐたが、思案にあまつたやうなあくびをして、村井が貸して行つた有島武郎の「或女」のしをりの入れてあるところを開いて讀み始めたが、だん〳〵其中に引き入れらたと見えて、熱心に讀み耽るやうになつた。一時間も讀んで行く内に彼れは本を伏せ

て、ぐた〳〵と疊の上に横に寢て膝を崩し、體を蛇のごとくにうねらした。久しく閉ぢてゐた情慾の窓が村井によつて開かれ、奔放なる官能の血に耽溺して狂ひ出した肉體を今になつて制馭しかねるらしい樣子に見えた。彼女はふら〳〵と立ち上つて部屋を一ぺん廻つて椽に出た。それから隣の部屋の方をとろけるやうな眼をして見てゐたが、そうと障子戸のところへ近づいて、

『山崎さん』と呼んで見た。

聲がないので、彼女は戸の隙間から覗かうとして、兩袖を兩手で押へて顏の近くへ持つて來て上體を前の方へ傾けたが、ぶるつと身慄へして、撥ね返されたやうに飛び離れた、彼女の眼は凹走つてゐるのではないかと思はれるほどに變つてゐた。彼女は暫く身を悶えてごろ〳〵してゐたが、やがて狂つたやうにして、手廻りの品々をバスケットの中へ詰め込んで、それが爲し終らぬなかばで、女中を呼んだ。

『あたし急に用ができて歸りますから……』と彼女は女中が用を伺ひに來た時に言つた。

(十三)

かづ子は神戸に行かず、大阪、京都を過ぎて、大津驛で汽車から下りた。それから石山行の電車

に乘つて、琵琶湖の沿岸を通り、狹まつて河となつてゐる水の上を船で渡つて、石山寺の麓にある旅館兼料理屋に身を落ちつけ、水上に突き出た座敷に血の燃えたつた肉體を横たへた。夜に入つて彼女は外に出て、靄白く光つた水上を見つめて思ひに耽つた。空を仰ぐと、雲の絕え間から十三夜ほどの月が姿を現して、彼女の白く靑ざめた顏を照らした。

隣の部屋からは京都あたりから藝者を四五人連れて來た男が騷いで浮かれてゐる音が聞えて來る。彼女のしよんぼりして途方に暮れたやうな姿が、蟲取りに欄干から外に突き出された大きな電燈の光に映されて座敷の奥に長い影を引いてゐる。彼女は廣川から來た手紙を、幾度か開いては捲きして皺になつたのをまたもや取り出して讀み、目に一ぱい涙をためて、懷に自分の顎を埋めて眠つてゐるかと思はれるほどに動かないでゐた。女中は獨身の彼女の樣子を怪しむかの如き顏をして、寢床をのべて去つた。しかし彼女はいつ迄も寢ないで、時々思ひ出したやうに深い溜息をついては、再び靜に思案に耽つた。

翌日は午前の十時頃まで眠つてゐた。それから起き上つて、顏も洗はずに、欄干にもたれて水上を眺めながらなまあくびを續けた。そして朝飯ともつかず、晝飯と　かぬ御飯をすましてからぶらりと散歩に出た。石の多い石山寺の境内に登つて、紫式部の居たといふ部屋の前を行つたり來たり

して、一目で琵琶湖や近江の平原、山々が見渡される臺の上に上つて、ぼんやりと四邊を眺めてゐた。小一時間も其處にゐたが、それにも飽いたと見えて、そろ〳〵と下向の道に差しかゝると向ふの方から男は歐米人で、女は日本人でゐる夫婦者らしいのが近づいて來た。男の方は歐米人としては案外貧弱な體格をしてゐるが、それにもまして日本人の女の方は小さく、顏は丸くて黃色である。けれども何處となく歐米人の好きさうな樣子のある女であつた。しかしかゞ子が熱心に注目したのは男に抱かれた三歲ばかりの混血兒である。彼女は脚をとめて、その子供に精神を傾倒して眺めてゐた。彼等夫婦は平な敷石のところへ來ると、小さな靴をはいてゐるその子供を下に下して立たして見た。子供は大地を踏んで、不思議と驚嘆と狂喜を感じたやうに大きな目をくる〳〵させた。その樣子を見てゐたかゞ子の濃艶な黑い眼には涙が眼瞼の緣からしみ出して來て、中に一ぱいに湛え、下を向けたら溢れ落ちさうに見えた。左右から夫婦が子供の手をとつて、右の足からそろり、左の足からそろりと歩かせて、嬉しさうにほゝ笑んでゐる姿にも、彼女はしみ〴〵と涙の眼を向けた。其内に彼女は小走りに走り出して、物に追はれて逃げ込むごとくに旅館に入つて、自分の部屋に隱れるやうにして倒れ臥した。

それから彼女は晝飯を食ふと、その旅館を出て大津行の電車に乘つた。大津驛に行くと、二時間

ばかり待合室にゐて、下り急行を待つて汽車に乘り、神戸を通過して、彼女の姿は嚴島の宮島に現れた。旅館の寢具の上に寢ようとすると、白い敷布の中央が汚れてゐたので、女中にそれと言はずに取り替へさせたが、その取り替へさせた敷布にも同じ箇所が汚れてゐた。彼女は女中を呼ばずにそれを剝ぎとり、丸めて部屋の隅へ投げつけてしまつた。それから寢ながらまたもや廣川の手紙を讀み出して、「……あなたは母として、自分の子の家が私のところにあることを忘れないで、いつでも行き詰つた時には來ることが出來る、……」といふところを、いつまでも〳〵見つめて泣いてゐた。翌朝彼女は宮島の境內を散歩して、寄りたかつて來る鳩に盛んに豆を與へた。

そしてまたぶいと其處を去つて、どん〳〵下り汽車に身を運はせて門司の驛に彫さびしく立つた彼女の顏は次第に痩れて來た。頰と鼻との間には深い皺が出來、兩眼の下の皮膚には紫色の疊が現はれ瞳は神經的に光るやうになつた。彼女はふら〳〵とプラットホームを歩き、關門連絡船の棧橋に來た。浪が少しく荒いために、浮き棧橋は上下に動いてゐた。彼女はその連絡船に乘つて關門海峽の人となつた。汽船、和船の中を連絡船は縫ふて、眞白にあたりを染めた淺野セメントの工場を右に見て船は門司に着いた。彼女は乘越賃を支拂つて、門司驛の前に出た。うろ〳〵と周圍を見渡し、階上の食堂の案內揭示を見ると、その階段を登つた。食堂には七八組の西洋人と十組ほどのサラリ

ーマンらしい人々がゐた。彼女が入つて行くと、それらの人々はみんな目をそばだてゝ彼女を見た。彼女は孔雀のやうな態度をして、誰れもゐないテーブルに就いた。

ボーイが注文を聞いて引下つて、皿を持つて來る間を、彼女は前の席の方を見た。そこには一人の露西亞人らしい男がアスパラカスを一切れも殘さず、全部きれいにむしやゝと食ひ盡してしまつてけろりとしてゐた。彼女は食事をすましてから勘定を支拂はうとて財布を出した。その財布は神戸の旅館に於て、村井が渡した財布であつた。彼女は十圓紙幣一枚を抜きとつてボーイに渡した後を調べた。十圓紙幣が二枚に五圓紙幣が一枚しか殘つてゐなかつた。彼女は財布をテーブルの上に置いたまゝ、ボーイがお釣りを持つて來たのにも氣がつかず、暫くの間は額に手を當て、肱をテーブルに突いて當惑してゐるらしく考へ沈んだ。

やがて彼女は五十錢紙幣を一枚テーブルの上に置いて、そこを立ち去り、時計と時間表とを見て神戸行までの三等切符を買つた。どてらを來てゐる男が彼女をじろゝと見てゐた。

（十四）

廣川忠次は時折り乳母に代つて子供を守りするのほかは二階の書齋に閉ぢ籠つて、讀書と思索とに耽つてゐた。午後四時頃のことである、彼れはあくびをしながら二階から下りて來て、乳母から子供を受取り玩弄物などを箱から出して子供を遊ばせて悅ばしてゐた。乳母は縫物をしながら其樣子を見て、

『旦那樣、お坊ちやまをお抱きになつて、少し外へでもお散歩にお出かけになつては如何です、さう内にばかりお閉ぢ籠りではお體にさはりますよ』と勸めた。

『うむ、私もさう思ふけれども……』と言つて、其事に關聯して、樣々なことを考へてゐるらしかつたが、子供は自分が閑却されたと感じたものか、顏に皺を寄せて「わあゝゝ」と泣き出したので。彼れは、

『おう、おう』と言つて抱き上げ、高く差上げて搖つた。

すると子供は忽ちに泣き止んで、反對にきやとつゝゝ言つて笑ひ出した。

『あゝお、子供は罪はないなあ』と彼れは言つた。

其時にちりんと前の格子戸の開く音がして、誰かゞ玄關に入つて來たので、彼れは子供をあやす手を止めて聞き耳を立てた。乳母も縫物の手を休めて、其方へ顏を向けた。そして暫くは家の中も、

玄關も何んの物音かしなかつたが、子供が再び泣き聲を立てると、それと同時に、

『御免ください』といふ女の聲が玄關で聞えた。

彼れは子供をあやしながら、乳母と顔を見合せた。二人の顔は緊縮して來た。彼れは子供を乳母の方へ差出して、奥の間へ引込んだ。乳母は子供を受取りながら、

『はい』と返事をして立ち上つた。

乳母はすはつて取次の障子をすつと開いて、玄關に立つてゐる女と顔を合せた。その女はかづ子であつた。乳母はかづ子を見ると、何んにも言はず、下を向いて涙をほろ〳〵流した。子供は母親の顔を見ると「あゝ、あゝ、」と言つて、悦びの聲を擧げて兩手を差出して抱かれようとしてゐる。かづ子は直ぐ乳母の手から子供を抱きとり、しつかりと抱きしめて、

『おゝ、坊や』と言つたきり、忍び聲で泣き出したが、直ぐと氣がついて、

『お里や、勘忍しておくれ、私は戻つて來ました』と恥しさうに言つた。

『奥樣』と乳母のお里は後は言ふことが出來ず、たゞ泣いた。

『お里や、ゐらしつて?』と彼女は問ふた。

『はい』とお里は答へた。

そして女主人に上るやうに身を開いた。子供を抱きしめてゐるかづ子は首を振つて、

『お聞き申しておくれ、歸つて參りましたが、上らして頂かれますかと……』と言つた。

乳母はだまつて、子供を母親に渡して置いたまゝ自分は奥の間へ引込んだ。廣川は座布團の上にすはつて、悲喜、憤怒、焦燥の複雜な表情をして落ちつかずにゐた。

『旦那さま、奥樣が、……歸つて參りましたが、上らして頂かれますかと……』乳母は手を突いて言つて、彼れの顔色を伺をつた。

廣川は乳母の涙の目と、その手には子供が無いのとを見てゐたが、

『うむ』と不得要領の返事をした。

乳母は委細呑み込み顔で玄關の方へ急いで立つて行つた。彼れが腕をこまねいて下を向いてゐると、疊ざはりのしとやかな音や裾さばきの衣摺れの音がして、其處へすはつた者がある。二人は向ひ合つたまゝ、互の顔を見ずに沈默を續け、體も動かさなかつた。乳母も子供も姿を見せず、部屋の中の空氣は緊張してゐた。

『あなた、どうぞ宥してください』とかづ子は押出すやうな聲で言つて、上體の全部を前に投げ倒し、背には浪を打たせた。

廣川は靜に答へた。

『宥すも宥さぬもありません、私が種を蒔いたのです、故に刈り入れも私がしなければなりませんのでした。私こそ宥して頂かねばなりませんのですが、もう取り返しがつきません』

この言葉を聞いた彼女は眼を赤くした面を上げて、

『では、あたし、あのこちらへ歸らして頂くことは出來ないのでございますか』と言つた。

『いや、此處にはあなたの子供がゐます、子供が存在してゐる權利があるならば、母も存在してゐる權利があります、あなたは當然こゝに居らねばならぬものと存じます』と彼れは答へた。

彼女は歡喜に胸が躍るやうな樣子で、彼れに身を投げかけようと前へ身を進めかけたが、廣川が肅然として端座してゐる有樣に、撥ね返された如く感じたと見えて、崩しかけた膝を愼ましくすはり直した。けれども歡びあまる叫びの忍び泣きの聲を立てた。

『お坊ちやまがお母樣のところへ行く〳〵と仰しやいますので……』と乳母は出て來て、子供を彼女に渡して、また去つた。

彼女は兩手で子供を抱きしめ、頰を摺りつけ、接吻を幾度かした。子供は狂喜の叫びを上げて笑つた。やがて夕飯のちやぶ臺が持出されて、久し振りで夫婦らしい形に於て此家に食事が行はれたが、

二人の間には一語の會話も試みられず、會話はかづ子と乳母との間か、また子供と彼女等との間にのみ樂しく取りかはされた。夕飯が濟むと、廣川は一人で二階の書齋に入つて机の前にすはつたが、別に何もせずに考へ込んだ。其處へ靜かに階段を上る音がして、彼れの後にかづ子が立つて、彼れに倚り添はうとして、彼れの傍に荒い息を鼻から吐き、嬌態を現はしてすはりかけた。すると廣川はつと立ち上つて去らうとした。

『あなた、どちらへ』と狂はしい、懸念と腹立だしい眼を以て彼女は問ふた。

風呂へ行つてくる』と彼れは内に熱情を押し隱した冷然さで答へて去つた。

彼れは長い間かゝつて湯から出て、明い電燈のある町を少しぶらつき、芝居の繪看板などを見てから家に歸つた。門口からは一二年振りで、子供と女との喜びの聲が漏れて來た。彼れが玄關に入ると、

『お歸りなさいまし』と綺麗な丸髷に結ふたかづ子の頭が下げられた。

彼女が手を差出したので、彼れは手拭とシャボンとを渡して、つうとまた二階の書齋に通つた。書齋はきちんと取りかたづけられ、掃除もされたらしく、總てが整理され、床の間には新しい花が生けられて、電燈の笠の塵も拭はれ、電燈も殊更に明るいやうに輝いてゐた。彼れは次の寢室に定めら

れた部屋の間の襖を開いて見た。そこには昨夜まで只一つしか敷かれてなかつた寢具が今度は二つ並べて敷かれた。彼れは一つの寢具の白い敷布の上に載せられてある赤い箱枕に燃えるやうな目を注いだ。そして暫くは身を戰かして立ち竦んでゐたが、ぴしやりと襖を締めて、机の前にすはつて其上に置かれた洋書の一冊を、前から彼れが讀みかけてゐ　書であるので、注意を注がれて机の上に其まゝ置かれた、ものであるらしいのを手に取つて、たゞ無意識にページを繰つてゐた。間もなく彼れは立ち上つて、階段の口元まで行つて、下の方へ首をのばし、

「おいお里』と呼んだ。

勝手の方から、

『はい』と答へるお里の聲が聞えて、此方へ急いで來る足音がした。

とん〳〵と階段を上つて來る時には、廣川はもう以前の机の前にすはつてゐた。

『旦那様、奥様はお湯に行らつしやいました』と言つて、用を待つた。

『お里や、あの氣の毒でも、その片方の布團を下へやつてくれないか』と廣川が言つた。

その聲は乳母が怪しんで問ひ返す餘地もないほどに凜然たるものが内に潜んでゐた。彼女はだまつて赤い枕と共に一つの寢具を下へ運ぶとて二三度往復した。彼れは机にもたれて只ぢつと洋書に目

を注いでゐたが、何んにも讀んでゐなかつたらしいのである。乳母が去ると、彼れは後へ仰向けにごろりと寢ころんだ。そして眠つてゐるやうにして暫くは動かなかつた。

やがて靜にことり、ことりと階段を上つて來る音がして、白粉と香水とのまじつた女の匂、男を惱殺するやうな湯上り姿の妖艶、憂ひを含んだ少しくしほれた樣子のかづ子が現はれた。その時はもう廣川は再び机に向つて讀書してゐるやうな形をとつてゐた。

『あなた』と言つて彼女は廣川の身邊にすはつた。

果實の熟し腐つた匂のやうな女の匂が一室にこもつた。廣川は返事をせず、髓を堅くしてゐた。かづ子は燃える體の血の狂ひ廻るのに耐へ兼ねるやうな樣子で、

『あなたは、あの、なぜ寢床を下に……』と男の胸を突き刺すやうな怨み聲で言つた。

廣川は正しく彼女の方へ向き直つて、暫く沈默の後に言つた。

「夫婦の關係はあの時、既に斷たれたものです、もう取返すことは出來ません。しかし母子の關係は子供がある以上は斷たれるものではありません、子供の生長にとつては母はなくてはならぬものであります。あなたが此家に歸つて來たこと、私があなたを迎へ入れたことは、あなたを私の妻としてゞはないのです。只あの子の母としてあなたは此家にゐる權利があるだけなのです』と

言つて首を垂れて端座してゐた。

かづ子は默つて首をだん〳〵に下へ下げて、居すくんでゐるやうにすはつてゐたが、二三十分間も過ぎてから、靜に一禮をして階段の方へ去り、下り口に來てどつと溢れ出た涙を兩袖で押へて下りて行つた。廣川はその後姿を惱ましさうに眺めてゐたが、やがて一つになつて寂しさうに歎かれてある布團の中に飛び込んで寢てしまつた。

(十五)

廣川は翌日から何事かを忙しげに動作し、書齋の中、室の外と出入り繁しく立ち廻つてゐた。四五日過ぎた後のことであるが、かづ子が子供と乳母と一しよに洗湯へ行つて來ると、留守居をしてゐる筈の廣川の姿が見えない。ふと氣がついて調べて見れば、帽子、インバネス、下駄などが無いので、彼女等は互に顏を見合せて、

『お出かけになつたんだわ』とかづ子が言ふと、

『まあ、お留守になさるとは？』と乳母は言つた。

二人の顏には何んとなく不安の樣子が見えた。かづ子は子供を乳母に預けて、二階の書齋に行つて

見ると、机の上に一通の書面が載せてあるので、彼女はそれに走り寄つて飛びついた。上封には「遺書」としてあるので、彼女は暫くは棒のやうになつて、その書を見つめてゐたが、やがて指を戰かしてそれを開封して讀んだ。

かづ子樣、私は遺書を書かゝねばならなくなつたことを悲しむ、しかし死ぬのではない、人間が死ぬことが出來れば、人生の悲劇の大部分は滅ずるだらうけれど。人間は如何なる苦しみに遭ふても死ぬべきものではないのである、私も決して死にはしない、どこまでも人生の悲劇に堪へ忍んで鬪つて出るつもりである、私はあなたを殘して廣川の家を去りました、それはあなたと私とは夫婦ではないのですから、それが同居してゐるといふことは總ての點にとつて不都合でありますから、子供に對しては父よりも母體がより自然に關係の深いものです、父無き子も不幸でせう、しかし母の無い子は一層不幸であります、私は母なくして育つた者でありますから、その悲しみその不幸、そして子供の運命を如何に內面的に支配するものかといふことを能く知つてゐます、あなたと私とが同居することが出來ない場合に當つて、子供が此家に存在してゐるものとすれば、二人の內の誰か去つて、誰が居殘つて子供の生長を助けるかと言へば、それは言はずして、私が

去つてあなたが殘ることは至當のことでありませう、故に悲しいけれども私は子供に別れて此家を去つたのであります、この家の財産は子供のものです、また子供の生長を助くるために生活するあなたの者です、財産は總て整理して現金として銀行に預け、その預金通帳は机の引出しに實印と共に納めてあります、私は今後收入を得るまでの用意として、その三分の一を持つて參りました、私は舊殼を脱して新生活に入るつもりです、私はまだ四十三歳です、活氣も精力もありますし、また學識も才能も人並には持つてゐる筈ですから、生活に窮するやうなことは無いと思ひます、只々私の願ふところは、あなたが自重自愛して能く子供の生長を助けてくださることを切に願ふ次第です、これが私の最後のお願ひです、どうぞ必ず聞き屆けてください、さらば永遠にさよならであります、終りに臨んで乳母のお里に尊敬と感謝とを贈ります。

これを讀んだ彼女は氣絶したかの如く、去つた男の座布團の上に身を伏せて動かなかつた。やがて彼女はがばと撥ね起きて、狂人のごとく下に下りて行つて、默つて、廣川の遺書を乳母の前に差出し、子供を抱きとつて聲を上げて泣いた。子供も驚いてわつと泣き出した。乳母は投げ出された遺書とかづ子とを見くらべた後に、遺書をとつて讀み始めた。かづ子は泣き〳〵再び二階へ上つて行つて、座布團に獅嚙みついて泣いた。それから彼女は片手で子供を抱き片手で机の引出を拔いて見

ると、そこには銀行の預金通帳と實印とがあつた。それを取出して胸にひしと押しつけて、またさめ〴〵と泣いた。

彼女は何事かを決行すべく、迷つてゐるやうであつたが、やがて決心した如く立ち上つて下に下りて、廣川の遺書を依然として手に持つて見つめてゐた乳母のところへ近づき、だまつて子供を渡した。子供は乳母に抱かれるのを拒んで、その周圍を危い足取りで歩き廻ることを悅んだ。かづ子に旅行の身支度をし、バスケットに手廻り物を詰め込んだりしてから、再び乳母の近くに來てきちんとすはり、

『お里や』と靜に呼んだ。

乳母は只ならぬ顏をして彼女の姿をぢろ〳〵と見て、無言で『何用か』と言ふやうにして待つた。

『お前は私から聞かなくとも、總てのことを承知のことだらうね、斯うなつたのも私が馬鹿だつたんです、廣川はもう取り返しがつかぬと言つて去りました。けれど私はどうしても取り返しません　私は、數夜雪中に立ち、遂には腕を切つて、許しを乞ふた支那の高僧のやうに、廣川の宥しを得るまでは、如何なる苦行をもつみます。私は、石童丸が高野に父を尋ね求めたやうに、

日本全國を廣川の跡追ふて探し求めます。私は無論のこと、廣川もです、私共二人が元の仲に結びつかなければ、生きる道がございません、廣川は子供のためには母體は必要だが、父は必要でないかの如くに言つてゐます。けれども子供は父と母との二人の完全な愛によらなければ圓滿に生長は出來ないものと思ひます。でも私は、それよりかも私自身が到底廣川なくしては生きてゐられません。私の心は、私の體は廣川に、廣川に戀ひ焦れてゐます、もうもう一日でも一時でも離れてはゐられないほどに廣川を求めてゐます。私はこれから廣川の宥しを得、廣川の胸にこの胸を……、私は行きます、探しに行きます。お里や、どうか後は坊やを頼みます。是れは銀行の預金と實印です、入用に從つて引出しておくれ。そしてね、直ぐ五百圓ほどを引出して、東京の芝の秋月の宅へ私の名前で電報爲替で送くてね、私は明日を待つてゐられないのです、これから直ぐ立ちますからね、どうか、坊やを頼みます、どうか、お里や、聞き屆けておくれ』と言つて彼女はお里の兩手をしつかと握つて泣き伏した。

この樣子を不思議さうに眺めてゐた子供は此時母にとりついて、聲を上げて泣いた。乳母のお里もほろ〳〵と涙を流してゐたが、

『奥さま、ようくわかりました、御尤でございます、私はお二人の仲が元どほりになるものと信

じます。お二人ともお正しい心の眞直のお方だから、こんな歎きがお有りになるものと存じます。私は、こんなに立派なお方々がこんな苦しみを、お二人ともなさるのを見まして、三十五のこの年になつて、やつと世の中のことがわかつたやうに、ほんとうのことがわかつたやうに思はれます、お坊ちやまのことは私が身に引受けて、この家のことも、私が大丈夫引受けましてございます、一年でも二年でもお待ちしてをります、どうぞ旦那樣と御一しよにお歸りになることをお祈り申してゐます。このまゝに過ぎ行くやうでは、世の中に神も佛も無いも同然でございます、そんなことがあらう道理がございません』ど常に無口のお里は雄辯になつて述べた。

『有りがたうよ、ほんに有りがたうよ、私はすぐ行きます、きつと廣川を尋ね當てます、でなければ死んで歸ります、後はそんなら頼みます』

彼女の言葉にお里は答へず、沈默を以てしつかりと答へた。停車場のプラットホームに乳母のお里は子供を抱いて立つた。かづ子は二等室の窓から上體を出して、

『坊や、さよなら』と言ふと、子供は兩手をさしのばして、母に抱かれようとして乳母の胸から身をもがいた。

彼れは乳母が自分を自由にしてくれないので、怒つてわつと泣き出した。乳母はかづ子に默禮して

急いで開札口から外に消えた。かづ子は列車内に體を引入れて、兩袖で顏を覆ふと、身を二つに折り曲げて泣き聲を漏らした。室内の乘客は驚いてゐる者、氣の毒さうに眺めてゐる者などで、靜かにしてゐた。その内に汽笛が鳴つて列車は上りに向つて動き出した。子供の泣く聲は驛の前から微に聞えてゐた。

第十六篇　最後の一つの罪

（二）

越後柏崎の區裁判所の判事に柴野政直といふ老人があつた。宴會の席に於て直ぐ謠曲をうなり出すので人々を閉口させ、中學校の卒業式に臨んで祝詞を述べる時「……卒業すれば判任官たることを得……」と言つて、人々の物笑ひになつた有名な男である。七人の子供を殘して、妻は七人目の子を產んだ後產が惡くて死んでしまつたが、彼れもまた或疑獄に頭を惱ました結果、發狂して一年ばかり狂つた後に死んだ。彼れが發狂してゐる時、一番の姉娘は嫁いだ。下の幼い三人の子供はそれ〳〵親戚へ分配して養はれた。彼れが死んだ後に家に殘された者は、二十一歲の次女と十九歲の長男と十七歲の三女とであつた。從つて一家の責任は十九歲の青年たる直正の双肩にかゝつた。

直正は仙臺の高等學校にゐたが、父の發狂以後は退學して家にゐなければならぬ身の上になつた。無論遺產とては無い、たゞ僅かの恩給によつて三人の兄弟が生活せねばならなかつた。長女は私立裁縫女學校の裁縫の教師となり、次女は幼稚園の保姆となり、直正は登記所の雇となつた。彼れは書記の試驗を受けるために準備をした。

三人共稼の家庭であるから、生活に窮することは無かつたが、男の直正は兎に角として、年頃の

娘である二人の姉妹は無意識ではあるが、異性に對する渇望の性的影響を受けて、多少感情が病的になつた爲に、三人の兄弟の仲が圓滿を缺き勝ちであつた。最もそれが爭ひとなつて形に現れたものには、各自の收入と一定の支出との均衡上に就てもあつた。斯ういふことにとつては、其場に於ては多くの感情を亢奮せしめるものは女であつたが、平常に於てはけろりとして、そのことには拘泥しなかつた。けれども男の直正は、その爭ひの時には割合に平靜ではあるが、常にはその爭ひに拘泥し、その事が自分の心を益々すさませるもの、姉や妹の容貌を次第に醜くするものとして、苦慮したのである。

それから彼れは登記所内の空氣に倦怠を來して、若い血は自由の天地に飛翔したくなつて、青い空に向つて憧憬の眼を注ぐやうなことが絶えずあるので、あれや是れやで、現狀打破の必要を切實に感じて來た。彼れの同僚に青年文壇や文章倶樂部などに和歌や詩を投書して悅んでゐる男があつた。その男は彼れが高等學校へも入つたといふので、智識上の先輩として敬仰してゐたので、雅號の選定を依賴した。直正は快く承諾して「尾昇」といふ名を與へた。その脫明には、

『尾上柴舟よりも上に昇るといふ意味で、尾昇としたのですよ』と言ふと、

その男は後頭部の突き出てゐる頭を二つ三つ下げて、

『さうですか、そりや有りがたう、尾上よりも昇るで尾昇ですかな、うまいもんですな、こりや有りがたう』と言つて感謝した。

ところが他の同僚が四五日すると、その男に言ふには、

『君、その尾昇つてのは何んだか知つてゐるかね、その意味を……』と問ふと、

『そりや知つてるさ、さすがは柴野君だね、尾上柴舟よりも上に昇るといふので、尾昇だよ、僕が柴舟を好んでゐるのをちやんと身拔いて考へてつけた名だね』と嬉しさうに答へた。

同僚はおかしさを耐へるやにして、

『それは或はさうもとれるかは知らぬが、柴野君が君に尾昇の名をつけたのは、この意味さ』と言つて、赤い罫紙の端に何かを書いて渡した。

それには「尾昇——おのぼれ——己惚れ」としてあつた。これを見た例の男は呵々大笑するかと思へば、案に相違して、眞赤な顏となり、それから苦蟲を嚙み潰したやうな顏と能く人が言ふ、そのやうな顏をして、筆を罫紙の上へ無暗と動かした。

彼れは柴野直正の先輩で上級であつた。それからと言ふものは、婦女子的の遣り口を以て柴野をいぢめ出した。柴野はその原因を同僚から聞かされ、つまらぬいたづらをしたと思つて、ほと〳〵

困却仕つてしまつたのである。彼れはそこで考へて、朋友の渡邊に手紙を書いた。

この渡邊といふのは、中學校時代の同窓生であつて、彼れとは親友であり、其時は直江津の漁業組合の漁區改正出願のために測量師が入り込んでゐる、その測量師の助手をしてゐるのである。彼れがこの渡邊に書き送つた手紙は次の如くだ。

僕は家庭の紛擾と役所の腐つた空氣とのために閉口垂れてしまつた。僕は毎日々々倦怠して、だれ切つてゐる、どうしても現狀を打破しなくてはどうも斯うもやりきれない、僕は役所に勤めてゐるのが、いやになつたよ、試驗を受けて書記になつたところが詰らんと考へて來た、何んだか斯う僕の前途にはもつと廣い生々とした天地があるやうに感じられる、兎に角この現狀を打破するには家庭から離れるのが先づ第一歩かと思ふ、姉も妹も獨立自活の出來るくらゐの力はある、いや、少し力があり過ぎるので、僕は惱まされてゐるのだ、けれども足手まとひになるよりは良いと悅んでゐる、そんなやうな譯だから僕がゐなくても彼女等は充分にやつて行けるのだ、寧ろ僕のゐない方が彼女等にとつてもうるさくなくつていゝのかも知れぬ、どうだらう、どこかに僕の身の落ちつく所はないだらうか、そして其處にゐて、ゆる〳〵と自分の前途のことを考へて見たい、まだ徵兵檢査には三年の日月があるから、それ迄の内に方針を定めて置かねばならぬと思ふ、どう

うか、賴む、君はいゝよ、さうして家庭なんてことを顧みずに、自由に飛び廻つてゐられるから、でも僕だつてさうすることが出來たのを、たゞほんやり柴野の家には僕がゐなけりやならぬもんだと今まで思ひ込んでゐたのは滑稽だつたよ、

彼れは渡邊からの返事を心待ちに待ちながら、鞄當箱を下げて登記所へ通つてゐた。

(二)

早速直江津にゐる渡邊のところから手紙が來た。それは、君の擧を大いに贊成する、一日も早くそんな役所から逃げ出てしまひたまへ、役所は若い青年をみんな駄目にしてしまふからと書いてあつた。それから、時に君は僕達のところへ來て見ないか、實は一人、助手が必要なのだ、この世界はまた君等の世界とはまるで違つた自由な面白い世界だよ、來て見たいと思ふなら直ぐ來たまへ、大將にも話したら、是非來るやうに言つてくれと言つたよ、とも書いてあつた。

彼れの胸は躍つた。もう自由な天地が自分の前に開かれたやうな氣がした。さう思ふとあの陰氣くさい役所へ行くのがいやになつてしまつた。尾昇先生なんか糞でも喰へといふ氣になつて、其日は遲刻した。彼れは常に自分を愛してくれてゐる書記長の前へ出て、

『私は三週間ばかりの休暇を頂きたいのです、一つ或志したところの試驗を受けたいと思ふので、うまく行くか、どうか知りませんが、一つ受けて見ようと思ひますので……』と申上げると、脚が短くて上體だけ立派で大きな、長い八字髯を海老のやうにぴんとさせた書記長は眼尻に皺を寄せて、諧曲で錬つた底力のある聲で、

『ふん、さうか、よろしい、何んの試驗か知らないけれど、君なら大丈夫だ、ゆつくり行つて來たまへ、後は心配せんでもいゝ』と快く承諾を與へた。

彼れは姉妹に對してもほんたうのことを言ふことの出來る間柄ではなかつた。いや、他人に言はれることでも、姉妹には言はれないことが澤山あつた。直江津行も勿論打明けて言ふことが出來なかつたので、書記長に言つたと同じことを言つた。それでも兄弟である、直正が門出の祝だと稱して、早朝から姉妹は起きて、お赤飯をたいて彼れを祝つてやつた。その時だけは彼れも兄弟の情を久し振りに味ふたのである。

彼れはボンブのホースのやうな布地で造られたトランクを一つ携えて、一番列車に乘つて直江津をさして行つた。彼れは野に放たれた鳥のごとくのびゝ〳〵と翅をのばした。窓を開いて日本海から吹いて來る潮風を思ふ存分に吸ふた。遠く水と空との間には佐渡ヶ島が薄藍色に横はつて、白い帆

が二つ三つ、黑い煙を上げてゐる沿岸航路の汽船が一つ見えてゐる。漁區測量と云へば、きつと船に乘つて沖に出ることが出來るだらうと思ふた彼れは嬉しくて嬉しくて、汽車が御叮寧に停車場毎に立ち寄るのがもどかしかつた。

その内に彼れは眠氣を催して來たので、窓框に後頭部をつけて、うつ〳〵と眠つたが、時々眼をさまして、よだれを拭ふた。彼れの朦朧たる頭の中には昨夜のことが、輕い悔恨となつて浮かんで來た。昨夜は少數の同僚が寄つて、彼れの成功を祈る意味に於て送別の宴が高橋屋といふ料理屋と貸座敷とを兼ねた家で開かれた。藝者も來た、遲くなつてから各自の娼妓も出た。

彼れは高等學校を一年しか出なかつたが、その一年の倫理の先生が或時に『男といへども操を守らねばならぬ』と言つた。それ、彼れの胸にぴんと響いたが、それはまだ彼れの思想や性行にまで侵入して、それを一變する迄には行かなかつたが、暑中休暇になる少し前のことであつた、彼れがフォックスと仇名をつけられた小野といふ男と、歸省の途中で或怪しい家を襲ふ相談をしてゐると、清廉と剛毅とを以て同窓から尊敬を受けてゐた近藤といふ男が、

『柴野君　君はそんなことをもくろんでゐるのか、男子の恥づべきことだ』と言つた。彼れはこの一言が心の底に突き刺され、首まで眞赤になつて恥ち入つたことがあつた。それからと言

ふものは、彼れの倫理觀の根底が出來上つた。男子は一人の婦人より他に關係してはならぬといふこと、若し一婦人と關係したならば、その女と結婚すること、この二つが彼れの魂の底に喰ひ込んでしまつた。

斯ふいふ品性のもとにある彼れでも、血の煮えたつてゐる青年であるから若い女は好きであるので、昨夜の送別會にいろ〳〵の女、しかも或慾望を遂げさせる可能性を持ち、その場合を與へられる彼女等に對しては愉快で胸がどき〳〵しないではゐられなかつた。しかしながら引け時間に切迫して來ると、彼れの別な貞操心が頭をもたげ出して來て、彼れは座に居堪えなくなつて來た。送別會でも歡迎會でもその會の主旨の存するのは、盃の最初の一杯だけの内で、後は何んのための會合かといふことは沒却されて、たゞ各自隔々の快樂に耽けり、いつ散會ともつかずに、翌朝ほんやりした脂ぎつた顏を家族に見せるのがお定りであつたから、柴野直正といふ主客が歸るのを氣のつく者とて一人も無かつた。その中で只一人、彼れの歸り去るのに注目したのは、彼れのために與へられた忠實なる「犧牲者」であつた彼女が跡を追ふて來て、

『もう、お歸りになるの、そんなことしては惡いわ、みんな一しよに來たんだもの、一しよに歸らなくては……』と言つた。

『一しよに產れて來ても、死ぬ時は別々だよ、さいなら』と彼れは言つて立ち去つた。

汽車の中でとろ〳〵してゐる彼れは、昨夜のあの可憐な「犧牲者」を思ふて、何んとなく悔恨を覺えたのであるが、彼女に對してもまた自分に對しても罪を犯さなかつたことを悅んだ。

それから「あゝ、あんなことをしないでよかつた』と恐ろしいものから逃げ得た時の怖れと悅びとを感ずるのである。それは彼れの傍に來た女に對して、彼れは自分の持つてゐた盃を、

『さあ、どうだね、一杯』と言つて彼女に差出したい心が起きたので、彼れは「おれは平常、彼女等にそんなことをするだらうか、いや、決してそんなことはしない、してみると、今おれがこんなことをしたいと思ふ心が起きたのは酒に醉つたせいなんだ』と考察して、盃を急いで下に置いたことである。彼れは汽車の窓にもたれて、松林の動き廻るのを眺めながら「いま少しで耻づべきことをしようとした』と心の中で思つた。

(三)

柴野直正はトランクを肩に擔いで、直江津町の雁木を歩いた。直江津の町は家々の庇が無く往來に突き出てゐて、それがみんな隣から隣へと續き、その下が所謂「歩道」になつてゐるので、雨が

降つても、雪が降つても傘なしで歩かれるやうになつてゐる頃のことであつて、その「歩道」を「雁木」と稱するのである。

彼れは渡邊の手紙に案内が書かれてあるので、それをたよつて、遊廓内にある一軒のしもた屋に入つた。そこが漁業組合事務所で、その二階に測量師と渡邊とが事務をとつてゐたのである。彼等は柴野を歡迎した。その日から彼れは渡邊と机を向ひ合せて並び、渡邊の指圖に從つて仕事をした。測量師は裏二階にゐるし、彼等は表二階にゐた。時々熊襲か蝦夷かと思はれるやうな漁師が『旦那、どうですか』なんかと言つて、不思議さうな顏をして出來上りつゝある地圖を眺めてゐるのを、柴野は面白く感じてゐた。彼れは歡びに充たされて、全精力を集注して仕事をした。

先づ最初に最も彼れを悅ばしたのは、朝晝夕の三度の食事が魚づくしのことであつた。今まで老嬢根性から粗末な食事のみを與へた姉妹に比して、この家の女將の大變な御馳走に對して、彼れは面喰つてしまつた。その内で彼れが「實にうまいな」と感じたのは生きた海賊の刺身であつた。次に嬉しく思つたのは、この家の娘の子供が彼れと仲好しになつたことである。姉は十四、妹は十一であつた。仕事をしてゐる彼れの首つ玉に二人の姉妹は競爭で嚙りついた。それを彼れは邪魔に思ふたが　また有りがたくもあつた。しかしその時間が長くなると、祖母が上つて來て、白い眼をし

て睨んで彼女等を下へ連れて行つた。彼女は『糞婆々の死にそこなひ』と心の中で罵つた。そして十四歳の姉が殘して行つた一種の匂を彼れはいつまでも味つてゐた。

夜の或時のことである、彼れがふと測量師の部屋へ用があつて行くと、廣い布團が敷かれて、其上には男のくゝり枕と女の箱枕とがあつたので、怪しみながら大急ぎで自分達の部屋に歸つて來て渡邊はおかしさうにほゝ笑んで、

『不思議かね、いま初めて知つたと見えるね、あれは毎晩だよ、桃花樓の桃子といふのが大將のレコさ、桃花樓の親爺はね、漁業組合長で、斯う言つてゐるさうだよ、なあに野郎共に幾ら金を拂つたつて構ふものか、歸る時にはみんな裸にしてやるつて……野郎共とは大將以下吾れ／＼のことだよ、はゝゝゝ。それでね、桃子も主人の意を體して毎夜々々お通ひになるんだ』と言つて、再び面白さうに笑つて、

『おい、君のところへも一人やつて來るぞ』と何か傳染病でも襲ふて來るやうな口調で言つたので、柴野は吾れ知らず、

『なあに太丈夫だよ』と言つた。

『それを忘れるな、うはゝゝゝ』と渡邊はまたも喉の突起まで見せて大口で笑つた。

二人は連れ立つて遊廓内の洗湯へ行つた。入口で二人の女に會つた。すると年増の方が渡邊と立話を始めた。年若の方は媚を含んだ眼で柴野をちよい〳〵見た。彼れは姉や妹の意地悪るさうな眼しか知らぬので、初めて『あゝ、女の眼つてはいゝもんだなあ』と感心した。

彼れの擔當の仕事は、渡邊がノートの實地測量のいろ〳〵の記入を紙の上に地圖として骨組だけを造つたのを、肉をつけたり、彩色を施したりするのだ。彼れは繪を描くことが好きで、その手腕が相當にあるので、渡邊が彼れを測量師に推薦したのである。どうしても明日の朝まで、或漁區の地圖を五枚つくらねばならぬことが出來たので、測量師は眼が奥へ引込んで、今度は反對に鼻と口とが突出してゐる、眞黒な猿のやうな顏をして、ばく〳〵と口を開け閉ぢしながら、

『君達、一つ馬力をかけてやつてくれたまへ、そのかはり酒と女をよこすから……』と言つたが、一寸と首を傾け、

『いや、仕事の後にするかな、仕事の時に在つては却て邪魔になるかな』と言つた。

渡邊がそれに對して、まだ何んとも言はぬ内に、柴野が口を出して、

『なあに、ゐた方が却て仕事が出來ますよ』と言つたので、

『よし』とさういふことに定めた。

二人が夜明しのつもりで仕事をしてゐると、

『今晩は』と言つて、夜の十一時ごろ桃花樓の太郎といふ藝者がビールを二本と果物とを持つて來た。その藝者は甲州の霜降の串柿のやうな顏をしてゐた。

『いや、いらつしやい』と彼等は急に陽氣になつて、酒を呑み、果物を食ひ、藝者と馬鹿話をしながら仕事をした。

夜の白々と明ける頃に仕事は漸く出來上り、藝者は疲れたやうな顏をして歸り去つた。柴野の手に或物が殘つた。それは藝者が『大きく引きのばして彩色をしてくれ』と言つて賴んで行つた、財布の底から出して預けた秘密畫の小さいのであつた。

彼れが、仕事のひま〳〵に描いて稍々完成に近づいた秘密畫に彩色を施しつゝあつた時に、彼れは氣がつかなかつたが、その家の十四歳の小娘が學校から歸つて來て、祖母の目を忍んで、こつそり二階へ上つて彼れの背後から近づいたのだ。彼女は彼れの目を手で隱してやらうとすると、彼れが彩色してゐる繪に目がとまつた。彼女は熱心にそれを見て、だん〳〵赤い顏をし、息をはづませて來たが、矢庭に彼れの首に獅嚙みついて熱い唇を彼れの頸にしつかとつけた。彼れは驚いてそれ

を振り放つて、繪をくる〳〵と捲いた。

「柴野さん、見せてよ、なあに、よう、よう、見せて頂戴よう』と彼女は海藻のごとくに彼れの體に纏ひついた。

「いゝえ、いけません、こんなものを見ては』と彼れは彼女の縋りつく不自由な體を立ち上つて、時事新報の附錄である「こだま」といふ女の繪が入れてある額の裏へ押し込んでしまつた。けれども少女の體は自分から放れないで、彼れは彼女の肩に兩手をかけてゐると、祖母が『おつる、おつる』と呼んだので、彼女は『はあい』と言つて、彼れの顏を見上げてから離れた。彼れは彼女が去つてから『あゝ よかつた、婆さんも必要だわい』と口の中で言つた。測量師と渡邊とは實地測量に出て事務室にはゐなかつたのである。

(四)

季節は初夏の頃であつた。小蒸汽船に乘つて沖に出た。陸の山の立木や峰の關係からして、海上の漁區を調べるとて、彼等は多くの漁師と共に甲板の上に出て陸を眺めた。どんな時でも水平をたもつことの出來るコンパスをデッキに立てゝ、漁師が『此處だ』と言ふと、船長はちゝんと信號して

汽船を止める、渡邊は遠い紫色の山の峰を見當にして角度を見てノートに記入した。測量師は船に酔つたと言つて、二等船室で桃花樓の桃子に看病をさせて寢てゐた。仕事を濟ますと、汽船は陸に向つて進路を變へ、今まで薪木をたいてゐたのが、景氣を添へるとて石炭を投じて黑い煙をもうもうと煙突から吐かした。

彼等が新鮮な魚をうんと食つて、疲れた體をごろ〳〵と疊の上にころがしてゐる夕方、一人の女が侵入して來た。彼女は渡邊と馴々しく物語つたので、柴野は『これが渡邊のゝだな、おれんのは一たい何時選定してくれるのかしら』と思つた。壁には渡邊と彼れとの着替への浴衣が衣紋竿に通して掛けられてあつた。

『この浴衣はいゝことあたしに頂戴よ』と女が言つたので、柴野は自分の浴衣のことを言つたのかと思つて、嬉しく感じたが、直ぐ『よし』と言はれなかつた。

『どれをと?』彼れは言つて、浴衣を見上げた。

すると女は體をもじつて、

『ほんとにいゝわ』と言ひながら、渡邊の方の浴衣を手をのばして觸れて見た。

柴野は密かに『ぎやふん』と參つて、顏を赤くして下を向いて、長い定木で疊をとん〳〵と叩いた。

『清潔法はもう濟んでよ』と女は言つた。

彼れは再び「ぎやふん」と參つた。夜に入つてから、寢床がのべられた。女は渡邊の寢床を敷く手傳をして、渡邊と二人して入つて、ひそ〳〵何か親しさうに話をした。柴野にはそれが何んだか少しも聞えなかつた。その内に、

『參りませうよ』と女の聲、

『よし』と渡邊の聲がした。

柴野は眠つたふりをして、それを耳にとめたが、心の中で『はてな、奴共は何處へ行のかな、きつと桃花樓へ行つて寢やがるんだぞ、おれも誘つてくれゝばいゝな』と言つた。彼れが斯う思つたのには彼れ相當の理由があつたのだ。彼れは貞操を固持する心に危げはないと考へてゐるけれども、さういふ境遇に當面した場合にも能くその誘惑に抵抗し得るや否やに就ては自らを疑ふ心があつた。といふのは先日、秘密畫を描いてゐた時に十四歳の少女が彼れの身に熱い體を摺り寄せた場合に、もし老婆が彼女を呼び立てなかつたなら、どんな事を自分がしたか知れやしないと氣がついてゐたからである。そこで彼れは、如何なる場合に遭遇しても、その過失に陷らないだけの抵抗力を養成する必要があると考へたので、いま渡邊が行くといふところへ一しよに行つて、自分の情慾に對して

奮闘し、立派に勝利の関の聲を擧げたいと思ふのが、彼れの誘れんことを望んだ理由である。しかし其處には一つの好奇心も手傳ひ、また異性に罪を犯さない程度に於て接觸する遊戯的興味もあつたのである。

『おい、柴野君、行かう』と渡邊は言つた。

『うむ』と柴野は答へて起き上つた。

彼れは『何處へ?』といふことは言はないほどに、それが明瞭に彼等の間には知れてゐる場合であつたのだ。二人は女に連れられて桃花樓の二階へ上つた。どの部屋からも物音や人聲がしなかつた。廣い座敷に二人は陣を取つた、連れて來た女はビールと生卵を十ばかり持つて來た。渡邊と彼女とは何か親しさうに話をしてゐた。柴野はそれを聞かうともせず、所在なさに、卵を割つては呑みして十の卵をみんな呑んでしまつた。その内に渡邊と女とは隣の部屋に移轉して、どんなに澤山の話があるのか、べちやくちやと話をしてゐる。柴野はだん〳〵低氣壓が來るやうに感じられたので、どう自分の身を處置すればよいかわからなくなつたので、眠つた振りをしてゐるに限ると考へて、後の方へどたりと引つくり返り、大の字なりになつて眼を塞いだ。隣の部屋の男女のひそ〳〵話が次第に遠くなつて、遂には聞えなくなつた。彼れはほんたうに眠つてしまつたのである。どのくら

るの時間がたつたか知らないが、彼れは人の足音と裾が足に觸れて動く音とがして自分の枕元に立つた女のあることに氣がついた。

『さあ、寢ませうよ』と女が言つて起したので、彼れは初めて知つたといふやうな風をして起き上り、便所に行つてから、彼女の部屋に入つた。

彼れは『さあ、いよ〳〵戰場へ向つたな』と思ふと、動悸が高まり、武者慄へがした。そして女の長面を見て『粉屋の馬のやうだ』と思つた。彼れは遂に女に抱擁されて寢たが、意外にも心は平靜になり、獨で寢てゐると同じことでしかなかつた。少しも焦燥もせず、忍耐の苦痛もなく、また肉體上の變化もなく『なあんだ、ちつとも困難のことではないぢやないか』と思つて、目を閉ぢて眠つた眞似をしてゐる内に再び眠つてしまつた。夜が明けかゝつたので、彼れは起き上つたが、女はぐう〳〵眠つてゐた。彼れは身を汚さず、勝利の鬨の聲を擧げた氣になつて意氣陽々として宿に歸つた。宿では戸を開けてゐたので、彼れは聊か耻しく感じて二階へ駈け上つた。老婆が彼れの全身をぢろ〳〵と見てゐた樣子を、彼れは『糞婆々め』と口の中に罵りながら横目で睨みつけた。

(五)

測量事務の一段落がついて、明日からはまた別な方面の仕事が始まる時になつたが、柴野の三週間の休暇は今日で切れたので、明日は柏崎に歸らねばならなかつた。それで測量師は彼等二人に、『どこへでも行つて遊んで來い、費用は後で支拂へばいゝのだから……』と言つたので、彼等二人は雁木通りを肩を並べて歩き、吉田屋といふ家に上り込み、藝者を二人呼んでビールを呑んだ。柴野は一杯か二杯しか呑めなかつたので、者を二人前みんな食つた。話は渡邊と二人の藝者との間にのみあつて、彼れはたゞそれを傍でにや〳〵笑つて聞いてゐるだけであつた。藝者は愛助と六助と呼んだ。六助の方はふとつてゐて、柴野は『うまさうな體だ』と思つた。容貌も悪い方ではなかつたが、彼れは愛助の方を好んだ。何んとなく互の心が觸れ合ふやうな快感を絶えず覺えさせられた。みんなの間に藝事が始まつた。藝者と渡邊とは順番に唄を謠つたが、柴野は御免を蒙つて頭ばかりを下げて宥しを乞ふた。けれども愛助が親愛の眼を向けて勸めるので、彼れは感激して、猿股を能くしめて「逆立」をやつた。藝者共は つだまげて腹を痛くし、眼に涙をためて笑つて悅んだ。彼れもそれを見て、光榮に存ずる旨を述べた。それがまた可笑しいとて女共はきやつ〳〵と笑ひころげた。

彼等は、いま劇場に市川姉藏がかゝつてゐるといふので、芝居見物をすることに相談一決した。

渡邊と六助とが先に下に下りた。後れた愛助が柴野に向つて、

『いま一ぺん逆立をして頂戴な』と言つたので、お易き御用とばかりに、彼れは逆立をして二三間歩いて見せて、顔を赤くして起き上ると、愛助は、

『書生さんはいゝわ、活潑で……』と言つて、彼れを牝鷄のごとくに抱きしめた。

彼等四人は平土間の前から三番目の一坪を占領し、毛布を敷き、ビールと果物とが運ばれた。藝題は「笹野權三」であつたが、近松物ではなく、講談にあるのを其まゝ芝居にしたらしいのである。芝居には愛助といふ仲間が出て滑稽なことをして、ふざけてゐるので、柴野は「愛助が、愛助が」と言つて笑つた。その度に藝者の愛助が柔い溫い膝を彼れの股に押し當てた。

彼れはふと何氣なしに後を振り向いて見た。その土間はまだ客が無かつたが、そこには一人の藝者が立つて、振り向いた柴野の顏をぢいつと見下した。彼れはその女の目を見た時に、眼から與へられた快い激動を產れて初めて感じた。妖艶な光り輝く、電光の如く燒き焦すやうな女の眼が彼を興奮させ、壓倒してしまつた。彼れは狼狽して正面に向きなほつた。その藝者は彼れに隣接した右の穴の中に只一人して入つて芝居を見た。彼れが右の肱を仕切りの細い板の上に突くと、その藝者は彼れの肩に自分の左の肩を密接した。彼れはビールのコップを持つて、

『どうです、一杯』と言つて、彼女にそのコップをさしたいやうな心が起つた。

彼れは考へた『おれは平常そんなことをするか、どうか、いや〳〵平常そんなことをする筈がない、そんなら是れは酒に醉つたせいだ、愼め、愼め』と氣がついて、コップを下に置いた。

愛助と六助との二人の藝者は渡邊と何か言ひ合つては笑つた。柴野は心の中で『奴共は何を笑つてゐやがるのか』と言つて、芝居を熱心に見てゐた。隣の怪しい美しい藝者はいつの間にか姿を消してしまつた。彼等はばねるまで見て、これから四人はまた雁木下を歩き、大弓場の前へ來ると、柴野が障子の穴から覗いたので、

『あなた、大弓おすき?』と藝者の愛助が彼れに言つて、再び背中から手を廻した。

渡邊と柴野とは中途で藝者と別れて宿に歸つた。柴野は愛助と別れともない情が起きた。宿へは渡邊の女と、たゞ一夜柴野と共に褥を同じうしたといふだけの因緣しかない女とが女房然と待つてゐた。渡邊は女に『今晚は疲れたし、醉つてゐるから、明晚にしてくれろ』といふやうなことをくど〳〵と彼女等に言ひ聞かせて、彼女等を歸した。柴野は『折角、美しいローマンスを描いて來た快い氣持を濁されるやうな氣がする』と思つてゐたのに、娼妓どもを渡邊が追ひ返したので『あゝ、いゝ鹽梅であつた』と悅んだ。

二人は並べて敷いてあつた布團の中に並んで寢た。柴野は愛助の體の接觸した快味と怪しい美しい藝者のとろ〳〵した眼とを思出して樂しんでゐると、

『柴野君』と渡邊が呼んだ。

『何んだぇ』と彼れは問ふた。

『君、おごりたまへ』

『うむ、おごる理由があればおごるさ、兎に角その理由を話したまへ』

そこで渡邊が語り出した。

『あの、君の隣にゐた藝者を知つてゐる?』

『うむ、知つてゐる、馬鹿にいゝ目をしてゐたぜ、あれがどうかしたのか』

『どうかしたのかの段ぢやないよ、僕等が「別れが辛いとて、締める博多の帶が泣く」と唄を謠ひながら笑つたらう?』

『なんだか知らんが、やたらに内所で君達が笑つてゐるので、聊か癪に障つたね』

『はゝゝゝ、そのね、唄が彼女のことをさしてゐるのさ。實はね、あの女が君に惚れて、一晩でいゝから君と……と言ふんだ。……』

渡邊が語ることをつまんで紹介すれば次の如くである。

彼等が一日仕事をしてゐると、一日の内に一二度は惓怠を來すので、柴野は『器械もたまには油をくれなければ運轉に故障を生ずべく候』と紙切れに書いて、裏二階の大將のところへやると、大將の方から五十錢玉が一つ來るので、柴野はつんつる天の飛白の着物を着、足駄をかろころ言はせて雁木を通り、遊廓内の菓子屋へ金鍔を買ひに行くので、一日に二回は必ずあつたのを、格子戸の内からその姿を見染めたのが例の藝者なので、彼れが劇場へ行つたといふことを聞いて、駈けつけて來たのだといふのだ。

『明日、君が歸るんだからね、それで締める博多の帶が泣くつてのさ、どうだな、日延をやつては? 明日彼女はきつと來るぜ、此處へ』と渡邊は言つて、

『あの愛助つて藝者ね、あれがこんなことを言つたよ。菊野さんは……菊野つてのが例の女の名さ、菊野さんは、あの男は芝居へ藝者を連れて來たり、酒を呑んだりするやうな人ぢや無いと思つてゐたのに……と驚きましたでせうよつて……』と付け足した。

『さうか』と言つたきり、柴野はだまつて考へた。

彼れは胸のときめくのを覺えた、あの眼の光を戀しく思ふた、まだ暗の中にはつきりとその眼が浮

かんで見える、それを見詰めてゐると、心も體もほうとして來ることを感じた。明日歸るのは、さうかと思ふたが、いや〳〵そんなことをして、深みへ嵌り込んで、おれの運命がとんでもない方へ向つて、とり返しのつかぬ羽目に陷るかも知れない、兎に角自然の成り行きにまかす方がよい、自然の成り行きは「明日歸る」ことだ、明日歸ることにして、それに努力してゐるのに、何かの突發事件が起つて歸られないやうになるのは、これは仕方のないことだ、とにかく明日は歸らうと、

『明日は歸るよ』と彼れは渡邊に言つた。

そして彼れは、明日停車場へ行くと彼女が追ひ駈けて來て『歸つてはいや』と縋りつけば……などゝ空想してゐる内に眠つてしまつた。

(六)

柴野直正は心も體も汚さず、綺麗な童貞を守り得たと思ふて、去り難い直江津の町を去つて、再び柏崎の登記所へ毎日出勤する身となつた。二三日は直江津の花やかな浮々した嬌かしい生活の思出に心も張りきつて、元氣も出てゐたが、再び單調で倦怠で、そして家庭内の心の葛藤、紛擾など

に身心を腐らされつゝある生活が再び戻つて來た。彼れは現狀を打破するには、また姉妹の心の荒みを女らしい心に返らしめるには、彼女等をして嫁かしめるにありと思ふたけれども、彼女等は自ら戀を求め、男を求め、そのためには現在の位置も拋つほどの人間らしい血を持つてゐる者ではないと見てゐるので、他からして良人を探索して與へてやらねばならぬのだが、まさか彼れ自身が『嫁入口はありませんか』と姉妹のために尋ね歩くことはいやであり、また親類に對して『姉妹の嫁入口を世話してくれ』と賴むほどの熱心さも無いので、どうしても自分の方からして局面を展開せねばならぬと考へた。それからいま一つは登記所の同僚達へ『東京へ試驗受けに行つて來た』といふ口實を言つて置いた前に對しても、それを適當に表面よく繕はねばならぬのだ。彼れはいろ〳〵思案の結果、長岡に辯護士をしてゐる叔父のところへ出かけて行つた。

『叔父さん、私は裁判所の書記なんかはいやです、さう言つては何んですけれども、私は一たい法律事務に關係することは嫌ひです、それで私は考へました、私は文學を研究したいのが目的なんでした、それには外國語を修めねばなりません。それで一つ英語をうんと勉强したいのですが、勿論飯も食はねばなりませんから、英語の中等教員の免狀をとつて、中學校の英語の先生になりたいのです。ところで其方法を調査して見ましたが、此際どうしても東京へ出て、外國語學校へ

入らねばならぬのです。そこでお願があるんです、叔父さんの知合の人が東京にでもゐましたら
そこへ學僕に住はせてもらひ、私の學費や其他の費用として、月に十圓づゝ叔父さんから送つて
頂きたいのです。無論あの恩給證書を叔父さんに質としてお預け申して置きますから……』
これが彼れが叔父の辯護士に願つたところの言葉であつた。叔父は悉く贊成した。彼れが法律事務
に關することが嫌ひだといふのには不快を感じたらしいけれども、それに對する意見がましいこと
は言はず、彼れの自由意志にまかした。
『こゝの地方裁判所へ來てゐたことのある竹内といふ判事がいま東京で有名な辯護士になつてゐ
る。その男が大に吾輩と懇意であるから、その男に貴樣のことを依賴しよう』と叔父は言つて、
その晩は自分の家に彼れを引止めて、次女の秋子といふのに給仕をさせなどして歡待した。
斯して柴野は十九歳の秋、初めて東京に遊學のできる身となり、芝區四國町の統一教會の附近に
ある武内といふ辯護士の書生となつて、外國語學校へ通ふやうになつた。彼れは英語練習の關係上、
近くの統一教會に出入するやうになり、基督教信者と交際する内に親しい一人の友が出來て、彼れ
と精神上のことを語るに到つた。けれども基督教は蟲が好かぬので信じる氣は起らなかつた。
或時、親しくなつた基督教信者といろ〳〵のことを物語つてゐるついでに、直江津に於ける桃花

樓の一夜の冒險談をその男に語り聞かせると、その男は彼れに向つて嚴肅な態度で、
『それは神を試みるといふものだ、基督が四十日四十夜荒野に在つて惡魔に試みられた時、惡魔
は彼れを高塔の上に連れて行き、汝もし神の子ならば此處より落ちよ、然らば汝が地につがざる
内に天の使は汝の手をとり、足をとつて救ふであらうと言つた。すると基督は「汝の神を試みる
勿れ」と言つて、それを退けた。君は、もし負けないといふ確信があつたら、そんなことを試み
る必要はないし、もし疑はしかつたなら、萬一それに負けた時には罪を犯さねばならなかつたぢ
やないか』と言つた。
柴野はこれを聞いて、心に『なるほど左樣かなあ』と思つて、基督教といふものはなか〳〵面白い
もんだなと感心じた。其後になつて、彼れは基督教的の言葉を眞似て、
『惡魔よ、吾れを試みて見よ、吾れは汝に負けるものか　吾れは鐵石の如き貞操あり』と口の中
で傲語した。

(七)

武内辯護士の妻は精神病者で、一室に監禁の身となつてゐる。子供は十八歳の娘と、十六歳の息子とであつた。書生は柴野のほかにいま一人ゐるし、其ほかにおさんどんが一人、女中が一人、車夫が一人、これだけの家族で、事務員は毎日他から通つて來た。

女中のお絹は二十四五歳で、その樣子は令嬢のやうに見えて、女中らしくはなかつた。彼女は父と自分との二人つきりの家族であつたのが、父が村長をしてゐた時に瀆職事件があつて、そのために三年間の懲役を受ける身となつたので、お絹はそのあひだ武内辯護士の宅へ女中役として預けられたのだ。武内はその事件の辯護を親切に取扱つてくれたから、お絹の父は彼れを信じて娘を托したのである。

武内辯護士はまだ四十五歳の壯年であつた。妻が癈人となつたので、家庭は寂しいものであつたが、それでも其處には娘のふじ子と女中のお絹とがゐて、灰色の空氣に二つの赤い彩色を施してゐたので、左程に寂しくはないやうに見えた。柴野は翌年の春、藤が散る頃のこと、藤棚の下で落ち散つた花を掃いて、離れ座敷の窓の下で暫く休んでゐると、男女の密語が聞えたので、思はず聞き耳を立て、靜に窓の障子の隙間から覗き込んで見た。その座敷の中には主人と女中のお絹とがゐたので、彼れはびつくりして『惡いものを見た』と思つた。中でも覗かれたことを知つて逃げ去つた。

やがてお絹は覗いた者が誰であるかを見るためか、庭を遶廻りして、遠くの方から窓下を見て柴野であることを知つたらしいのを、柴野は依然として窓下に在つて、それを認めた。

それからと云ふものは、武内からもお絹からも柴野は親切に取扱はれたので、彼れは心苦しく思つた。彼れは或日の天氣の好い時、主人の二階の書齋を掃除してゐると、お絹は布團を持つて來て、欄干に掛けひろげ、日光に當てゝ干した。柴野は殊更に大きな音をたてゝ采配を障子に叩きつけてゐると、お絹の聲で、

『柴野さん』と呼んだ。

『なんだね』と彼れは采配を持つたまゝ縁に出て來て、お絹と並んだ。

お絹は干してある布團を指して、

『こゝを嗅いで御覽なさい、へんな匂がしますから……』と言つた。

彼れは、さうかと思つて首をのばして、鼻を布團に近く寄せて、小鼻を動かして嗅いで見たら、藍の匂がするだけであつた。彼れが布團に顔を寄せてゐると、

『さうでせう』とお絹は言つて、彼女も亦ふつくりとふくれた頰を近づけ、體を柴野の方へ密接もて來たが。柴野はそれだけ離れて、

『なんにも匂はしない』と言つた。

『さう』とお絹は言つて、部屋を下りて行つてしまつた。

柴野はお絹の動作を直ぐ『それ』と察して『淫亂女め』と口の中で罵たが『あゝ、惜しいことをした』といふ悔恨とその誘惑に負けなかつた悅びとがあつた。其後はお絹の態度が今迄の親切の上に、彼れに對して尊敬の念を起したやうに變つた。

柴野のゐる玄關の六疊には彼れといま一人の書生とがゐた。主人の息子は彼れのところへ英語を習ひに來た。その内に娘のふじ子も英語を習ふやうになり、毎日その六疊へ來て、香水の匂や白粉の匂や赤い振袖姿の印象を殘して去つた。彼女が書生部屋へ來てゐる時間が次第に長びくやうになつた。いま一人の書生は柴野の机の上へノートの切れ端に「令孃の心を汲んでやりたまへ」と書いて出した。柴野はそれを見て、赤い顏をし、

『失敬なことを言ふなよ』と言つたが、心の中では『さうのやうだ』と思つて、嬉しく感じた。

或る日の夕方、柴野は奥の座敷から順に雨戸を締めて來て、令孃ふじ子のゐる四疊半の茶室に到る廊下に達し、中の部屋を覗いたが、令孃がゐたので、もつと後に雨戸を締めようと考へて、引返さうとすると、それを彼女はちやんと知つてゐたと見えて、

『柴野さん、よくつてよ、締めても』と聲を高めて言つた。

『さうですか』と彼れは言つて、令孃がゐるのも構はず、茶室の小窓や雨戸を締めたので、部屋の中は眞暗になつた。

彼れが足探りで廊下に出ようとして歩いてゐると、

『柴野さん』と耳元に呼んで、彼れの袖を引いた者がある。

彼れはぞうつとして、體が硬直し、

『何んでございますか』と鹿爪らしく問ふた。

『お手を重ねてお出しよ』

『はい』と彼れは兩手を重ねて出した。

がさ〳〵と何か袂の中から出すやうな音がして、彼れの手を柔い熱い手がしつかと握つて、手の上に載せたのは煎餅であつた。

『はつ、有り難うございます』と言つて出ようとすると、再び耳元に熱い息がかゝつて、

『人に見せてはいやよ』と囁いた者がある。

彼れは暗いけれども、うなづいて見せて、その部屋を出て自分の部屋に下り、机の上に煎餅を置い

て両腕を組んで考へた。それを見た他の書生は吹き出して、

『君、煎餅を飾つて何を考へてゐるのだ』と問ふた。

『これか、謎の煎餅さ、これには如何なる味ひがついてゐるのか考へてゐるのさ』

『食つて見ればいゝぢやないか』

『エホバ禁斷の木の果だよ』と柴野は言つて、ごろりと寢ころんだ。

それを見た他書生は、

『はゝゝあ、戀の蟲が君の胸に巣をくひ出したな』と言つた

(八)

柴野は戀に悶えるやうになつた。隣に軍人の未亡人があつて、そこに十四五歳の美少年がゐる。この美少年は毎日武内家へ遊び來たか、令嬢ふじ子と仲がよく、いつも長い間、彼女と話をしたり、戯れたりする。そのことが柴野に嫉妬の蛇となつて、胸の中に食ひ込んだ、彼れは次第に神經が高ぶり、鋭くなり、病的になつて來た。彼れは曾て、

『惡魔よ、吾れを試みて見よ、吾れは汝に負けるものか、吾れには鐵石の如き貞操あり』と傲語

したことを思出して『これは惡魔にやられたな』と氣がついた。

そして彼れは狼狽し、驚いた。彼れは惡魔が眞正面から外部的に襲ふて來るものと思ふてゐたのに、搦手から心の内部から反逆的に突發したので、不用意の油斷してゐるところから伏兵が起つたやうに、自分がめちゃ〳〵に敗亡させられてしまつたことを悟つて、惡魔に全く降參したのである。彼れは令嬢と結婚などできるとは夢にも思はなかつたので、よろしく退却するにしくはないと決心して、早朝、家人のまだ起きない内に竹行李一つを擔いで逃げ出した。

そして先づ差しあたり行き所が無いので、本所にゐる遠縁の間接な叔母の家に逃げ込んだ。叔母は良人と三歳ばかりの子供との三人暮しで、お店から支那輸出の洋傘を持つて來て、それに赤い房をつけ、硝子玉の飾りをつける手内職をして辛じて生計を立てゝゐたので、部屋は仕事部屋の六疊のほかに三疊があるだけだから、いつ迄もそこに厄介になつてゐるわけには行かなかつた。それでその洋傘屋の周旋で、亭主は古俵屋、おかみさんは荒物屋をしてゐる家の二階を借りて住んだ。同じ越後の者だといふので、荒物屋のおかみさんが心よく彼れを迎へた。

彼れは早速、令嬢に對する戀愛問題は拔きにして、どうしても武内の家にゐることの出來ない事情があるので其處を去つて斯々の所に部屋借りの身となつた、就ては賄料として其家へ二十圓づゝ

一ヶ月毎に支拂はねばならぬから、どうか送つてもらひたいと、長岡の叔父のところへ手紙を出した。叔父のところからは承諾の旨を言つてよこし、武内の方へは叔父から、無斷家出のお詫びをしたといふことを付け加へてあつた。

氣候は夏に向つて次第に暑くなつたので、單衣の必要を感じて來た。柴野は武内家のお絹に飛白の單衣を頼んで置いたことゝ、夜具布團を武内家から持つて來ねばならぬことゝの必要を感じた。彼れは武内家で寢しづまる時間を見計つて、夜の十時に出かけて行つた。門はもう堅く鎖されてあつたので、塀を乘り越え、裏に廻つてお絹の寢てゐる部屋の窓の戸をこつ〳〵と叩いた、内から戸を開いて、白い顏が現られ、

『どなた?』とお絹の優しい聲がした。

『僕よ、柴野よ、一寸と入れてくれたまへ』

『まあ、柴野さん』と女は驚きと懷しさとの情の籠つた聲で囁いて、兩手を差し出した。

彼れはその手を握つて、それを力にして窓から掻き上つて部屋の中に入つた。

『どうしたのでございます』とお絹はぴつたりと柴野に寄り添ふて囁いた。

『僕ね、夜具と、それからあのそれ、單衣を取りに來たのさ』

『さうでございますか、ぢや一寸と待つてくださいな、襟を少し、あの友禪をつけますから』と彼女は言つて、先づ夜具を持て來、それから出て行つて暫く來なかつた。

その内に精神病の夫人の叫ぶ聲が聞え、

『あゝゝあ、柴野はどうしたいなあ』と欠呻をしながら言つた武内の聲がした。

やがてお絹は單衣を持つて來て、

『お嬢樣と二人で縫つて來ました、あの、そこへお嬢樣が來てゐらつしやいます』と囁いた。

彼れは五十錢銀貨を一枚お絹に握らせると、お絹はそれを突きもどし、彼れはそれをまた押しやる、二人は體をつけて揉み合つた。そこへ令嬢が入り込んで來る樣子が見えたので、柴野は銀貨を投げ出し、夜具と單衣とを引つ攜いで、窓からそれを外に落して、自分も窓から飛び下りた。

荒物屋は下は店と居間との二つしか部屋は無くて、その店は一ぱいの商品で寢る餘地は無かつたし、奥の六疊の居間は主人夫婦が寢るので、下女は二階に寢ねばならなかつたが、その二階は八疊で廣いけれども一室しかないので、柴野と下女とはその一室で寢るよりほかに仕方がなかつた。下女は彼れと同鄕の越後柏崎町の左官の娘であつて、赤くふとつた、うま味はないが、整つた顏をしてゐる十八歳の女であつた。彼等は表の方の窓の下と裏手の方の窓の下と、互に出來得るかぎり遠

くに離れて寢た。

宿の人達は、柴野が武内家を逃げ出して來た事情を彼れの口裏から薄々察して、當世の若い者に似せない石部金吉だと信じ込み、決して過失はないものと、下女を彼れの側に寢せることを危險とも思はなかつたのである。彼れは彼女の寢床に近づく夢を見て驚いて目を醒したり、彼女が彼れに倒れかゝる妄想を描いたりしたが、表面の行爲は方正なもので、少しも怪しい樣子を下女に見せなかつた。下女もまた體を堅くして、少しも彼れに隙を示さなかつた。

(九)

柴野は或新規の店の開業祝にシャツを一枚買つたら、抽籤で白粉下が二袋きた。彼れは復習に倦きた時に鏡を出して、その白粉下を顏に塗りつけて見ると、粉屋の鼠のやうに白くなつた。そして彼れは『おれは美男子だな』と思つてその顏のまゝで表に面した窓格子から往來を眺め、向ひの紙屋の二階に目を注ぐと、その二階の格子から紙屋の娘や女中が頻に彼れを覗き見してゐた。それで彼れは得意になつて、再び机の前にすはつて鏡を見、自分で自分の顏を惚れ〳〵と眺めてゐると、とん〳〵と誰かゞ上つて來る足音に、彼れは驚いて鏡を隱したが、顏の白いのを消し取る時間がな

かつた、と言つて顏を机の引出へ入れることも出來なかつたので、兩手で曖昧な格好をして顏を覆ふた。

机を隔てゝ彼れの前にすはつたのは、此家のおかみさんであつた。彼女は三十五六歳であつたが、丸顏の美人であるのみか、したゝるほどの愛嬌を持つてゐた。彼女は越後出雲崎の者で、亭主は同じ町の漁師であつたが、毎日漁にも出ないで、だん〳〵痩せ衰えて來るので、人が驚いて聞くと、彼れは涙を流して、實は丁字屋の娘に惚れたので、どうか思ひが叶ふやうにと、斷食をして神に願をかけてゐるのだと言ふことだ。丁字屋といふのは郵便局長の家の名である。丁字屋の娘はそのことを漏れ聞いて、自ら進んでその漁師の妻となり、二人相談の上東京は本所に家を持ち、漁師は古俵屋を始め、女は荒物屋を出した。いま柴野の眼前へ現れたのが、その丁字屋の娘で、出雲崎小町と呼ばれた女である。

彼女は柴野に向つて何か頻に話かけてゐるが、彼れは白粉下の一件があるので、いろ〳〵に顏や體を曲げて、それを胡麻かさうとし、出來ることなら、首だけを廻轉して後頭部を前の方へ向けたかつた。そんなことに苦心慘憺してゐるものだから、彼女の云ふことが何んにも耳に入らなかつた。とんちんかんの返事に呆れ返つたのか、彼女は笑つて下へ下りて行つたので、彼れはほつと安心め

吐息を漏らした。

蚊が出るやうになつて、下女と柴野とは六八の大蚊帳を釣つて、まん中を三尺も疊を出して兩側に別れて寢た。そこへ一人の女が舞ひ込んで來た。その女は背の高い三十五六歳の色の黒い女だが、どこかに仇つぽいところがあつた。彼女は下のおかみさんと遠縁の者で、四谷で士官學校の士官達を相手の下宿屋をしてゐたが、一人の軍人と怪しい中になつたのが亂脈の原因となり、食ひ逃け、呑み倒しで、忽ちの内に下宿屋は落城し、彼女は風呂敷一つを兩手で胸へ抱き込んで、悄然としてこの荒物屋へのめり込んだのである。

…………………………。……………………。……

……………。……『…………………………』……。……

………………。………………。…………(……)…………

…………………。…………………。……………。……………。

………………。……………………。……………

…………………………………。…………………。……

……。…………………………………………。

翌朝になると、彼女は、

『あたし、士官さんと寢た夢をみたわ』と言つて、けろりとして居た。

柴野は彼女をどうしても氣が變だと思ふて、薄氣味わるかつたが、兎に角一しよに寢てゐた。しかし彼れは決して童貞を破られなかつた。

隣の家との間が路次になつてゐて、そこから子供を抱いた丸髷の奥樣が出て來て、往來に立つて涼を納れることが每夕つゞいた。柴野は二階の窓からそれを見下して、その美しい姿に見とれてゐることが、彼女に感知されたのか、彼女の方からも必ずちよい〳〵と二階を見上げた。後にはにつこと笑ひ合ふやうな間柄になつた。或夕方のことであるが、彼女は例によつて子供を抱いて出て來て、例によつて窓を見上げて柴野と默笑し、目で何かを言ひ合つた。そこへ一人の紳士が出て來て、彼女に抱かれてゐる子供をあやした後に散歩らしく歩いて行つた。その後頭部には一錢銅貨大の禿が光つてゐた。すると彼女は指でその丸さくらゐの丸を造つて、二階の窓の柴野に示して見せてから、その手を胸に押し當てゝ、誘惑的のほゝ笑みを漏らした。彼れもまた白い齒を出して笑つたが、あの男があの女の良人かと思ふと、妬ましさを感じて苦しくなつた。

(十)

路次でない方の反對の隣の家は呉服屋で、そこにはお政、お富の二人の娘があつた。お政は常に高島田に結ふた丸ぼちやの愛らしい女で、お富はちゞれ毛の色の黒い女であつたから、柴野の注意は姉のお政に向つた。お政は少し斜視であつたが、それが却て愛嬌を添ひ、男を引つける力となつたので、柴野はトルストイの「復活」の中のカチユシヤのやうだと考へた。

彼女もまた裏二階の窓の下から見上げ、そこに柴野の首が見えると、斜視の目で出來得るかぎりの愛嬌を注いだ。そしてまた彼れが外國語學校から歸つて來て、彼女の店の前を通る頃はいつも彼女が店番をしてゐるので、互に挨拶した上に何事かを表情で示し合つた。それから日曜日などには隣の二階から三味線の音が聞えて來るので、柴野はお政が彈くのだと知つて、屋根傳ひで襲撃しようと思ふたが、思ふたゞけで何んにも爲し得なかつた。そして夏が來た。

兩國の川開には、古俵屋仲間で一艘の船を大川に出して見物することになり、お客樣は柴野と隣のお政とであつた。本所の一つ目、二つ目、四つ目などといふ小橋のかゝつてゐる川に船がつながれて、蘆緣や七輪や重詰や一升徳利などが運び込まれ、古俵屋主人公が五六人來た、柴野の宿の亭主が大將株で指揮をした。お政が例の高島田で盛裝してやつて來て、柴野と並んで船の中にすはつた。川は水が見えないほどに船が一ぱいに浮いて居るのみか、それがみんな大川へと下つてゐるのである。しかし中には後から來た船が前の船に突つかゝる とがある。古俵屋の船にも一つの船が後から來て突き當らうとすると、後の船の船頭が竿で古俵屋の船を一寸と當つたところが古俵屋の連中は一齊に後の船に飛び込み、船緣に立つてゐた船頭 組みついて川の中へ落さうとし、犬の如くに吠え合つた。船頭は船緣に突つ立つてなか〳〵落ちないでゐる。柴野は初めて江戸つ子の氣の荒さを見たと思つた。

五色の雲を臺として燦然たる夕日が鏡の如くに乘つかつて輝いてゐるのを見た柴野は、斜視を以て彼れの顏を見てゐたお政に、

『あれ、綺麗ぢやないか』と夕日を指して言つた。

『さうね』と女は振り返つて言つたが、それには餘り興味がある風では無かつたので、彼れは聊か失望してしまつた。

船は大川に出た、廣い川もみんな船で埋まり、船の上を渡つて何處までも行かれるやうであつた。

日が暮れるとほん〳〵花火が上つた。花火が開く毎に顔が見えるので、柴野とお政とは顔を見合せた。古俵屋の先生方は酒を船首の方で呑んだ。お客様たる柴野とお政とは船尾で向ひ合つておすしを食つて花火を見たが、實は花火などに氣はなく互　身の上に心を注いでゐたらしかつた。時間は夢の間に過ぎて、二人の間には如何なる事件の發展も無くして歸る時が來た。たゞお政が柴野の肩におづ〳〵と手を掛けたことが一度あつたぎりであつた。歸りにも他の船が當つたとかで古俵屋の連中は柴野の宿の亭主を先頭として、義經八艘飛びのごとく他の船に轉戰して、矢叫びの聲、婦女子の泣き叫ぶ聲、水上警察が四方に走る、物々しい光景を呈した。柴野が歸宅しておかみさんに花火の模樣を出たら目に物語つて一時間ばかりもゐたけれど、喧嘩しつゝ遠征を試みた亭主は歸つて來なかつた。

柴野は暑中休暇が來たけれど、國に歸つて姉妹と共に二ヶ月のあひだを暮らすよりも、古俵屋の二階にゐる方が面白いので、歸省をしないでゐた。路次裏の空地に土俵が築かれて、町内の若い者が角力を取りだした。柴野が二階にゐて、會話の稽古を一人で氣違ひのごとくやつてゐると、觀音樣のやうに光つたお政が上つて來た。水の垂れるやうな高島田に白粉と香水との匂をぷん〳〵とさせ、斜視の愛嬌を大安賣りにして、

『柴野さん、すみませんが、これに「壽」つて字を書いて頂戴よ』と言つて金一封を差出した。

『なんにするんですか』

『町内の若衆にお角力のお祝儀をやるの』

『さうですか』と柴野は言つたが、顔からは火が出るやう、胸はわく〳〵し、頭はぼうつとして「壽」といふ字がどうしても思ひ出せないので、仕方なく

『忘れました』と眞赤な顔をして降參した。

『じや、なんでもいゝわ』とお政は言つた。

そして長い袖で口を覆ふて、斜視で柴野の顔を見とれてゐるやうに見た。彼れは「御祝儀」と書いたが、手が慄へて字が曲りくねつた。

柴野は、心がゝりの事が出來た。それは毎日夕方になると、角力の行司の卵のやうな男が隣のお政の家の前を通つて、しかも毎度お政の店に立ち寄つて、三十分ばかりづゝ話をして行くのを彼れが知つたからである。或夕方柴野は湯に行くとて裏口から出しなに、隣の裏の木戸の隙間から隣の裏庭をちらつと見ると、眞白い女の肌が見えた。彼れはお政お富の姉妹が行水を使つてゐるのだと推した。彼れは洗湯から上つて脱衣場で裸のまゝ團扇で風を入れてゐると、塀の外を若い女が二人

と若い男一人と並んでいそ〳〵と歩いてゐることを、塀の下の隙間から足だけを見て知つたので、伸び上つて塀の上から覗いて見ると、それはお政にお富が首を白く塗つたくつて、行司の卵のやうな男と歩いてゐるのだ。彼れは全身の血がみんな頭に登つたかと思ふほど逆上してしまつた。彼れは裸のまゝ風呂屋の柱に蟬のやうにつかまつて暫くの間は動かれなかつた。

（十一）

翌年の夏になつた。徴兵檢査があり、また其上に、柴野の嫌ひな姉妹がみんな長岡の叔父の世話で嫁に行つて、留守宅は避暑かた〳〵叔父の母と娘の秋子とが來てゐるといふので、彼れは暑中休暇には歸省することにした。三年目に彼れは歸省してみると、柏崎は夏の避暑にはいゝ所だと思つた。暑い日中は北から海軟風のアイヌ風が吹いて涼しく、夜は米山から陸軟風の嵐が吹き下して涼しいのだ。叔祖母と姪の秋子とは下に寢て、柴野は二階の奥の部屋で寢た。ところがどういふ相談が叔祖母と姪との間にあつたものか、姪の秋子は二階の取つ付きの部屋へ寢床を移した。柴野は怪しからぬことゝ思つたが、三年前に長岡へ行つた時、叔父がわざ〳〵秋子を選定して御飯のお給仕をさせ、いま又彼女を避暑と稱して柏崎へよこし、殊に叔父が彼れの要求を悉く寛大に聞き入れる

ことなどを綜合して、長岡の叔父一家の柴野に對する意嚮が讀めたやうな氣がしたので、秋子が二階の取つ付きの部屋に寢ることに方針を變へたのは、方針を變へたのではなく、既定のプログラムの進行であるのだと彼れは解した。

しかしながら彼れは秋子の眼が氣に入らなかつた。その眼は鋼の眼のやうな感じがして、常に良人の擧動を看視するが如き妻になる女のやうな氣がするのである。徴兵檢査には何處か悪いのか不合格であつた。彼れは夜遅くまで外に出歩いてゐる癖があつて、家に歸るのはいつも夜の十一時頃であつた。その時にはもう秋子は取つ付きの部屋で税關か關守かの如き位置に寢てゐた。彼れが自分の寢室へ行くにはどうしても彼女の枕元を通らねばならなかつたのだ。

秋子が二階に寢るやうになつてから三日目の晩のことである。柴野は夜の十一時ごろに歸つて來たが、下に寢ることになつてゐる叔祖母はもう能く眠つてゐるやうであるので、彼れはだまつて二階に上つて、姪の秋子の枕元を通つて自分の寢床、それは秋子が敷いて置くらしい寢床の中に入つて寢た。そして考へた。あそこに秋子が寢てゐる、それはおれの行くことを待つて寢てゐるのだ、抑も二階に來て寢るといふのが、明瞭な意志表示である。おれが彼女の所へ行くことに就て、どこにそれを妨ぐる理由があるか。彼女自身は無論のこと、彼女の祖母、長岡にゐる叔父叔母も默諾ど

ころか、むしろ希望してゐることだ。そしておれの肉體にそれを要求してゐるし、おれの行爲に就ては倫理道德も社會も敢てそれを咎めない。そんならおれはなぜ彼女のもとに突進できないのか、それはおれの貞操觀一つである。おれがもし彼女の傍へ行けば、もう彼女を一生涯の妻とせねばならぬ。おれが彼女の傍に行くときには既に彼女を吾妻として認めた後である。然らばおれは今彼女のもとに行くとして、彼女を吾妻と認めるか、といふにおれは到底彼女を妻とする心は起きない。そこで出した首を引込ませようと、彼れは上半身を夜具の外に出して彼女の方向に向けて置いた體をまた夜具の中に龜のごとくに埋めて目を閉ぢて眠つた。

翌晩、彼れは再び夜の十一時頃歸つて來た。そして彼女の寢てゐる枕元を通つて一旦自分の寢床へ入つたが、ふと氣がつくと、いつの間にか彼女の傍に來てゐた。彼れは驚いて退き、彼れ自身の布團の中へむぐり込んで布團にしつかりとつかまつた。そして自分が布團から離れないやうに其處に膠着するかの如く體を動かさぬやうに努めた。三日目の晩、三度彼れは夜の十一時ごろ歸つて來た。例によつて彼女の傍を通りかゝつたが、今度は自分の寢床へまでは行かずにすぐ彼女の……。……。すると彼女は殺してゐた息をほつと吐いた。その臭い寢息を嗅いだ彼れは初めて吾れに歸り、急いで自分の寢床に入つた。そして自分の身を汚さなかつたこと、處女を傷けなかつたことを悦ん

だ。

彼れは寢ながら默考した。第一日目は首をもたげた、第二日目は起き出て彼女の傍に行つた、第三日目は直ぐ彼女のところで止つた、もし彼女が臭い寢息を吐かなかつたなら、とんでも無い罪を犯さねばならなかつたと思ふた彼れは、この調子で進んで行つたら、明日の晩は何をするかわからぬと考へたので、偖そんなら如何なる手段を以てこの難關を切り抜けるかと思案にくれた。そして「逃亡」これが最上の策といふことを知つた。

彼れは翌朝起き上るや、叔祖母と姪の秋子とに、暫く一人でゐたいからと述べるや、机と本箱と夜具とを俥に載せて　直に寡眞館の隣の寡婦が住んでゐる家の二階に引越した。その寡婦は父が生きてゐたころ女中をしてゐたことのある善良な女であるのだ。

叔祖母と姪の秋子は直ぐ其處を引上げることは何んとなく角目立つので、柴野の家にゐる存在の理由が無くなつたけれども、九月の中ば頃まで滯在して、避暑といふ名目を全うして長岡に歸つた。柴野は他の人に自分の家を貸して、彼れは再び東京に歸つた。そして例の荒物屋の二階にゐて、九月の新學期からまたも外國語學校へ通學した。

（十二）

柴野が東京の荒物屋へ歸つて來ると、長岡の叔父から手紙が來た。それは極く簡單なもので、だゞ恩給だけでは毎月彼れのところへ十五圓しか送れない、今まで三十圓づゝ送つてゐたのは、彼れに好意を持つてゐたから、たし前をしてゐたのだが、今後は彼れに好意を持つことが出來ない、從つて十五圓のたし前も無論でき兼ねるから、來月からは十五圓しか送らない、この手數もうるさいことであるけれど、叔父甥の間柄だから親切を盡すのだといふ意味であつた。彼れには叔父が急に冷淡なのは秋子の問題からであることを知るので、現金のことだと苦笑した。恩給の割當てを考へて見ると、なるほど自分の取り前は十五圓でしかなかつた。

この恩給の割當といふのは、姉の發議で、姉が勝手に割當てたのだ、彼女は長男ばかりが父の恩給を受けるのは不道理だ、同じ子である以上は他の子もみんなその分け前を得ねばならぬと主張して、彼れをして無理に同意せしめたが、それを割り當てる量の點に到つては、分け前を主張する時の理由ほどの明白な理由が無かつた、彼女は歳の多い者は多くといふ標準をたゞ自分の都合上から立て、歳の割合から恩給を按分比例によつて割當てたから、姉が一ばん多く、次には直正で、最も少

ないのが妹であつた。そんなやうな次第で、彼れの割當ては一ヶ月十五圓と定つたのである。彼れは來月からどうしようかと途方にくれた。

遂に彼れは苦學をすることに決した。新聞廣告によつて、苦學生に職を與へるといふ「青年同氣社」が神田三崎町にあるを知り、そこへ出かけて行つて、どんなことをするのかを聞いた、すると綺麗に白粉を塗つた五角形の顏を持つた十八九歳の娘がゐて、新聞の相場表を出して、

『その値段で新聞を差上げますから、それを賣り歩くのです、そして此處へ泊るには一日五錢を前金で支拂ふのです。新聞代も勿論前金でございます、新聞の種類と枚數は前日に申込んで置くのです』と顏面筋肉を少しも動かさずにしやべつた。

『では此處へ道具や荷物を持込んで來てもいゝのですか』と彼れは問ふた。

『よろしうございます』と娘は答へた

『そんなら今夜からお願ひします』と彼れは言つて、五錢の白銅を一つ出し、それから出たら目に新聞の種類と枚數とを請求して本所に歸り、一切の物を俥に載せ、其日の内に青年同氣社へ引越した。樣々な女に思ひを殘して去つたのだ。

同寮は十人ばかりゐた。各個人の荷物はみんな名札をつけて押込にしまひ、もし自分の品物を出

すにしても、その押込の襖を開く時には五角形の娘の許可を得てから開くのである。彼れは市中に出て、編笠、ゴム底の足袋、鈴、印半纏などの服裝を買ひ集めた。彼れは十人の同輩の眞似さへしてゐればよいと考へて、彼等の一巢手一投足に注意を拂つて、その眞似をした。夕方になると、狐のやうな親爺が來て、五角形の娘と交代したので、柴野はがつかりした。

翌朝は四時頃みんなが起きたので、彼れも起きたが、誰れも顏を洗ふ者がないから、彼れも顏を洗はなかつた。狐のやうな親爺が帳面を見て、姓名と新聞の枚數とを言ふと、一人の男がその通りに新聞を數へて、各自の姓名を記した紙札のはられてある所の部分にその新聞を置き並べた。それを各自が自分の名の所にあるのを取つて、出來得るかぎり迅速に折り疊んで、先頭第一に外へ飛出さうとするのだ。そこで柴野もそのとほりにやつて、五十枚ばかりの新聞を小脇に抱へて街上に出て見たが、偖どこへ行つて賣ればよいのか見當がつかなかつた。

何んでも電車の停留場に、前へ大きな紙に「大賊捕はる」とか「大珍事何々」とか書いて下げ、鈴をちん〳〵と鳴らしてゐることを思ひ出し、先づ神保町の停留場へ行つて見た。もう二人ばかり好い位置に陣取つて、大きな紙の掲示を並べてゐた。彼れも何か紙に書いてはり出さうかと思ふたけれども、紙も無ければ、また今日の新聞に何が出てゐるやらもわからぬので、掲示することは止

めにして、適當なところに立つて、ちん〳〵と鈴を鳴らした。すると下駄屋の前の電柱へ倚り掛かつた背の高い新聞賣が、

『おい〳〵』と彼れを呼んだので、その男に彼れが近づくと、

『君は今日初めて出たのだな、知らないで來たのだからよいが、こゝは僕達の場所だから、君はほかへ行つて賣りたまへ』と言葉柔かに言ひ聞かせた。

これを聞いた彼れは大に恐縮して、

『いや、何んにも知らなかつたのです。さうですか、甚だ失敬しました』と言つて、そこを去り、今度は九段下へ行つて、久保濱の前へ立つて、ちん〳〵の音を立てた。

暫くすると、左のこめかみをがあんと殴られたかと思ふや、目が眩んで倒れたが、直ぐ起き上つて殴つた者を見た。血がたら〳〵と流れたのを感じた。

『この野郎、ふてい野郎だ、人の場所へ來て、平氣な面してけつかる、さあ承知できねいぞ』と彼れを殴つた小男が拳を擧げながらどなつて、またもや殴り飛ばさうといふ劍幕である。

柴野は『こゝも縄張りが定つてゐたのか』と氣がついたので、大地に手をついて、

『新米で何んにも知らんのでしたから、どうぞお宥しください』とあやまつた。

周圍の群衆は『宥してやれ、やれ』と言つた。彼れを毆つた小男は、

『今度から氣をつけろ、間抜め』と罵つた。

彼れは耻辱と憤恨とを感じて其場を去つた。彼れは歩きながら考へた。この分だと、どこの停留場もみんな繩張が定つてゐるに違ひない、さて何處か適當な、澤山賣れる所はなからうか』と、あれかこれかと頭の中へいろ〳〵の場所を思ひ浮べてゐる内に、上野停車場を思出して『さうだ、あそこには賣店はあるけれども、新聞賣はゐなかつたやうだ、あそこがいゝ、どうしてあんな良い所を人は氣づかなかつたのだらうか』と、彼れは悅び勇んで、鈴をちん〳〵鳴らしながら上野停車場へ行つた。彼れは驛の建物の入口に立つて賣つてゐると、老人の驛夫がそれを見つけて、

『おい、お前こゝにゐちや大變だよ、規則に觸れてとんでもない目に遭はんけりやならん、早く何處かへ行きな』と親切に注意した。

彼れは驚いて、あわてゝ其處を去つた。彼れは十時から學校へ行かねばならなかつたので、今日はそれで切り上げることにした。明日からは何處かまた他の人が繩張りを作らない處を發見して、自分の繩張を作らうと思つた。彼れは多少の餘金もあつたけれど、それは萬一の用意にして、その日の生活費はその日の稼ぎで出さうと定めて置いたので、彼れは歸り途を歩きながら收入を調べて見

たら、元手を差引いて二十五錢しか儲らなかつた。五錢は今日の宿料に殘し、十五錢は晩飯のに當て、あとの五錢で芋を買つて食ひ、朝飯と晝飯とをそれで濟ました。

彼れは學校から歸つて來て、十五錢で牛めし屋で牛めしを食つたが、とてもそれでは腹を充たすことが出來ないけれど、それで我慢した。車夫が懷勘定もせずに酒を呑み、牛めしを何杯も重ねて食ふのを見て、彼れは車夫が羨ましくなつた。青年同氣社に歸つて見れば、夕刊賣を濟まして歸つて來たのが、腕角力、すはり角力、本角力、腕押し、淫猥な高話などをやる。彼等にあてがはれた部屋は八疊の只一室であるから、柴野は學科の復修など出來つこはない。夜遲くみんなが寢しづまつた頃になつて、始めるのだけれど、朝が早くて勞働をした後なので、眠くつて到底目をあけてなどゐられないのである。

翌日から適當な繩張選定に出たが、二三日中に芝山内の山門前に陣を取つた。增上寺參詣のため電車に乘り下りする者がぼつ〳〵買つてくれた。けれども彼れは學校へ行かねばならぬから、夕刊までも賣るわけには行かなかつたので。收入が少ないのは止むを得ないことであつた。たゞ彼れが最も閉口するのは勉强の出來ないことだ。十時ごろは商賣の最中なので、他の者は誰れも歸つて來てゐなかつた。たゞ五角形の娘が左官から白壁でも塗つてもらつたやうな顏をして往來を窓から眺

めてゐるだけであつた。

『どうでございます』と五角形の顏を崩さずに娘は、歸つて來た疲れて元氣のない樣子の柴野に、顏に似せない優しい情をこめて問ふた。

柴野は他の者には『どうだね』といふやうな口調で言ふ娘が、彼れに對しては特別に『どうでございますね』と言ふのを有りがたいことだと悅んだ。

『え、どうにか斯うにか、やつて行けませうが、學科の復習が出來ないのは閉口ですよ』と彼れは娘の傍で、學校へ行く用意をしながら言つた。

『それは同情しますわ、入らつしやる人も初めは大てい學問のためになさるのですが、新聞賣の方が收入があつて、のんきなものだから、いつの間にか、新聞の方が本業になり、本は繩でくゝつてその押込へ閉門させてしまひますわ、ほゝゝゝ、失禮ですけれど、あなたのやうなお方のゐらつしやる所ではございません』と娘は氣の毒さうな眼をして言つた。

『さうですかね、有りがう、私も考へませう、行つて參ります』

『行つていらつしやい』

彼れは書物を小脇に抱えて出て行つた。

(十三)

柴野が例のとく、增上寺前にゐると、山門から出て來た若い女と五十歲に近い男とがあつた。彼れはそれを何氣なしに見ると、女の方はこの直ぐ近くの四國町の武內家のお絹であつたが、男の方は見たことのない人物である。年の割合に痩せ衰えて、顏色は病みあげくのやうに靑ざめてゐたが、どうやら眉の間と唇の樣子とがお絹に似てゐるので、父親ではないだらうかと思ふた。彼れは自分の姿をお絹に見られるのがいやなので橫を向いた。けれどもいま一度見たい氣がしたので、そうと彼女の方へ振り向くと、最前から彼れの方を見てゐたらしいお絹の眼と眼がぴたりと合つた。彼れは狼狽してまた橫を向いたが、其時はもう傍で、

『新聞屋さん、朝日を下さいな』と言ふお絹の聲がした。

彼れはだまつて顏を下に向け、編笠で彼女の目を遮つた。そして朝日を差出すと、お絹が五錢の穴あき白銅を彼れの手へ渡したので、彼れは受取つて籠の中へ落した時に、下の方から見上げるお絹の目と再び合つた。

『まあ、矢張り柴野さんだつたわ』と言ふや、ぼんやり立つてゐる男の傍へ行き、何か物事をよ

く呑み込ますやうに言ひ聞かせて、日比谷の方から來た電車に男が乘るのを見屆けてから、再び彼れの側へ走つて來た。彼女は息をはづませて、

『柴野さん、どうしてこんなになつたんでございます、あれからあなたをどんなに探したことか、まあ、いろ〳〵お話がありますから、どこかで、あの山の上へ行つてお話しませうよ』と彼れの手を引かぬばかりにして、山の方へ足を運んだ。彼れは彼女から離れて、彼女に從つて歩いた。

彼等は山の上のお茶屋の簀の子に腰を下した。他の人々は綺麗な女と新聞賣子との一對を不思議さうに見た。彼等は低い聲で語り合つた。柴野はこんな身になつたことを一通り物語つて聞かせたので、今度はお絹が物語つた。いま一しよに居た男は柴野の推量どほり、彼女の父であるが、滿期放免になつて出獄して武内家へ一先づ引上げたので、一週間ばかり靜養かた〳〵東京見物をしてから、お絹を連れて國へ歸るとのことである。武内の精神病の夫人は死に、息子は金澤の高等學校へ行つた。是等を語つた後に彼女は、

『あの是非お伺ひしなければ、國へ歸るにも氣がゝりでございますから、どうかあなたが武内家をお出ましになつた譯をお聞かせなすつてくださいまし』と眞劍になつて彼れに乞ふた。

『いや、それは申されません、あなたには關係のないことで、お聞きになつたつて、あなたがど

うにもならぬ問題ですから……』

『いえ、いえ、お話しくださらなければ、私に關したことだと思つて、いつまでもあなたをお怨み致します。……あんなことからして、あなたは私と一しよに武内家にゐることを汚らはしいこと〻してお出ましになつたものと、私は信じてゐますわ、でも、もう私はゐないのでございますし、そして、あの、お嬢樣がお可哀さうで……』とお絹が言つたので、彼れは二つの事に驚き、猶ほお嬢樣云々のことに胸がどき〳〵と高く打つやうになつた。

『それは何を言ふんです、それはあなたの邪推ですよ、私は決してそんな事で……、實は私は自分の心に誓つたことがあるので、それを武内にゐると、破られさうなんで、それで逃げ出したのですよ』

お絹には略ほその意味がわかつたらしいので、

『誤解してゐるかは存じませんけれど、どうやらぼんやりわかつたやうな氣が致します、あゝ、人間の心つてものは……』と言つて、彼女は深い溜息をついて、

『……でも、やつと安心しましたわ、私のためでなくつて……。有りがたうございます、私はあなたから賤しめられることが身を斬られるよりも辛いことでしたのです、ありがたうございま

す、どうぞ私を賤しめないでくださいませ。私は、私は身は一度汚れたものですけれど、今はもう、心は元のやうな心と丸で違つて參りました、これもあなたのお側に少しでも居させて頂いた德でございます。あなたのことは一生……、私は國へ歸りましても、私は一度輝いた心の光は決して、大事にして消すやうなことは致しません』と、後は涙でつかへてしまつた。

『お絹さん、あなたからそんなことを言はれゝば、私は恐縮のほかはございません、私はあなたに何を與へたか存じませんが、私は心の汚い、汚い男です、そのために武内にもゐられず、斯うして苦しんでゐるのでございます』と柴野もしめやかに言つた。

お絹はつと首を上げ、力をこめて、

『もし、柴野さん、あなたはも一度、武内へお歸りになる氣はございません?』と問ふた。

彼れは強く首を振つて、

『そんなことは出來ません』と言つた。

『でも、私、お嬢さまがお可哀さうで……』とお絹は令嬢に代つて怨むがごとく彼れを見上げた。

『お絹さん、私はまだあなたに私の心持を話しませんでしたが、一應お話しますからお聞き下さい、その上で御判斷を願ひます。いま私はあなたからお嬢さまのことをそれとなく悟らせて貰ひま

した。……が、私は三四年前から男も貞操を守らねばならぬといふことを知りましたので、自分の妻か、或は將來自分の妻にする女でなくては關係しないことに定めてゐます。それだのに、私はお恥しい次第ですが、お嬢さまに戀をするやうになりました、そして私の肉體は汚された血が狂ひ廻ります、私の如き者は到底お嬢様を妻にすることは、先生も亦お嬢様もお許しにならぬことゝ信じますので、この戀は道ならぬ戀なのですから逃亡したのです。然るにいまお嬢様の方でものやうに察しられますが、お嬢さまは私と結婚するところまでお進みになるお心持であるとは決して信じられませんので、お嬢様と私との戀は不義な戀であります。お嬢様の處女性を汚し、私は私の童貞を汚すだけのことなのです。そんなことは斷じて出來ません、出來ないことにくよくよ惱み、愚痴を言ふのは人間のなすべきことではありません、罪惡です』と彼れは斷乎とした態度で言ひ放つた。

『柴野さん、よくわかりました……あなたからお言葉では承りませんでしたけれども、私は無言の間にそれだけの教訓をあなたからして頂きまして、私には今迄うつかりしてゐたことが明になりました。私は今後決して武内にゐた時のやうなことはなく、自分を輕んずるやうなことはせず、大切にします。……けれどお嬢さまのことは、私このまゝにして置くのは良くないことのやうに

思ひますわ、正式に先生に人を頼んでお話なさつては如何がでございますの』

『いゝえ、普通の人は人間と人間の結婚をさせずに、社會上の地位や財産や收入を目的にして結婚するものです。先生などの目から見れば、學校の英語教師なんかは人間の數へは入れてゐませんよ。それは先生は私を信用し、或點は私に敬服してゐます。けれどもそれは單に柴野直正といふ學生としての上のことでありまして、自分の娘をやる婿として見る時には、先生にはそんなことを忘却し、社會上の地位、財産または收入か、さもなければそれによつて自分がどれだけの利益を得るかを專ら計量してゐるのです。勿論人間の戀といふものが人間生活の最上價値であるといふやうなことは知りませんから、便宜上のためには人間の戀などは蹂躙して平氣なものです。あの人達には色慾は貪つても戀愛は解し得ないのです、單に法律だけを學んだ者には殊にさういふ人が多いものです』

お絹は此時まつたく首を垂れて、無條件に承服してしまつた形であつた。

『あの戀といふものはそんなに値打のあるものでございませうか、……』

『私は能くは口で言はれませんけれど、非常に尊いものゝやうに思はれます。私がお嬢様を避けるのは、どうもお嬢様が私に對してのものは戀としては大變に不純なものであるやうな感じがす

るのです、私は私の尊い戀をそんなもので汚されたくはないのですから……』

『あゝ、私は汚されたものです、もう取り返しがつきません、私はあなたのお側にゐるのが苦しくなりました、さよなら』とお絹は銀杏返しの前髪を彼れの膝にしつかとつけて、暫くの間は首を垂れてゐたが、撥ね返るやうにして山を下つた。後から見ても、彼女が泣いてゐるのが能く彼れにはわかつた。

柴野はほつと溜息をついて、そこへ石のごとくに座してゐたが、お茶屋の者が邪魔にしてゐるやうな風が見えたものだから、新聞代では無いお金を懷中から出して五十錢銀貨を盆の上に載せて、彼女の跡を追ふて山を下つた。

（十四）

柴野は新聞賣子はとても長く續けられるべきものではなく、こんなことをしてゐては學科の方が駄目になつてしまふと考へた。兎に角勞働は學科の勉強には不適當であるから、勞働でない何か仕事がありさうなものだと探し求めた。彼れは學校の歸りに、救世軍本營の角で一人の男に出會つた。その男は十一月だといふのに羽織を着ず、折目のなくなつた袴をはき、風呂敷を左の脇に抱え、少

つて、結局は請求額の三分の一だけが正當のものだといふことに決定して、老人から預つて來た五十圓の内から二十一圓六十五錢を支拂ひ、彦太郎と車を並べて引取つたので、彼等父子は柴野を大に恩として感謝した。十九歳の柴野は此時に對者に對して自分の方から何物か一種の壓力が出て、對者をして一つの壓迫を感ぜしめるといふ自信力を得て、十年も餘計に歳をとつた大人のやうな感じがした。

『あなたは今？』と高見彦太郎は問ふた。

『僕は外國語學校だがね、君は？』

『私ですか、はゝゝ。まあ其邊で夕飯でもやりませう』と高見は先に立つて、上體を前にかゞめて歩き出して、會芳樓といふ支那料理屋の二階へ上つた。

彼等はシウマイや雲呑麵などを食つて物語つた。

『私は參謀本部の翻譯物の筆耕をしてゐるのですがね、それも私の知つてゐる人かやつてゐるのを、私はその下受けをしてゐるんですよ。これがせめて英語でも知つてゐると、翻譯料としていゝ金がとれますがね、一人いま缺けてゐて必要なんですが、誰かありませんでせうか』との高見彦太郎の話に、柴野はテーブルを乘り出して、

『君、それは通勤するのか、自宅に持歸りの出來るものか』と問ふた。

『兩方あります、通勤してやるのは秘密物で、これは値段が高いです、自宅でやつてもいゝのは割合に安いです、私が一人ほしいといふのは自宅持歸りの方の下受人のことですよ、一日に三四時間やつて二圓ぐらゐにはなりませうか』と高見彦太郎は答へた。

柴野はこれを聞いて、心ひそかに天に感謝した。そして自分の現在の境遇を物語つて、その翻譯物の下受をしたいことを申出た。高見は、

『それは願つたり、かなつたりです、あなたがそれでお樂になれるなら、これに越した嬉しいことは私ありません』と言つた。

それで柴野は明日の夕刻、高見の宅へ行つて、その翻譯物を出す翻譯人の所へ紹介してもらふことを相約して別れた。

（十五）

翌日は日曜日であつた。柴野は今日はもう新聞賣に出ず、樂々とした氣分になり、小ざつぱりした服裝をして朝つから外出したが、十時頃に歸つて來て、五角形の顏の娘に斷つて押込の襖を開い

しく前かゞみに歩き、違つた方角へ眼をやつて、歩いてゐるのだ。柴野は其男が自分を見てゐるのだとは思はぬので、其まゝ通り過ぎようとすると、

『もし、あなたは柴野さんでは？』と其男は呼びかけたので、柴野は面くらつて、彼れを見ると、後れの目には確かに柴野が映つてゐるらしいのだ。

『え、僕は柴野ですが、あなたは？』と言つて、怪しみながらぢろ〳〵と彼れを見た。

『やあ、お久し振りですね、私もうお忘れですか、高見です、高見彦太郎です』

『あつ、高見君、すつかり忘れてしまつた、君、東京にゐるのか』と柴野は漸くにわかつたので、珍しさうにして、彼れの姿を再び眺めた。

柴野がまだ登記所に出てゐた頃のことだが、雨降る日曜日のこと、一人の近村の男が訪れて來た。長い髯を生した、農家には珍しく人品の良い人間であつた。その男の陳述によると、柴野の父が判事をしてゐた頃、いろ〳〵のことで世話になつたことがあると言ひ、今度もまた一つ御子息からお力を借りたいと言ふのだ。事件は何んであるかといふと、悴の彦太郎が遊廓へ四五日前に行つたきり歸へつて來ない、その譯は仕拂ふ金が無いので、金を仕拂ふまでは歸すことは出來ないと言つて止めて置くので、止めて置けば置くほど遊興費は増す、増せば増すほど支拂はれない、支拂はねば支

拂ふまで止めて置く、止めて置けば益々遊興費が増すといつた次第で際限がないから、一つ悴を救ひ出してもらひたいとの願ひだ。

柴野はまだ一度も遊廓の馬に對する處置法のごとき事件に關係したことが無いので聊か當惑したけれど、法律を知つてゐるといふことゝ、裁判所の者だといふことが、案外遊廓の人々を威嚇するかも知れぬと考へたので、老人を待たして置いて俥を走らせた。彼れは車の母衣のセルロイドの窓から外を覗いて見ると、車夫の背中の上を越えて前方が見える。その前方に桐油の合羽を着た郵便脚夫が歩いてゐるが、二本の脛の少し上までその合羽が垂れて來てゐるから、それから上の二本の股は見える筈はないのに、合羽を透してその二本の脛に連續した二本の股かちやんと見えるのだ、丁度合羽が透明の品で出來てゐるやうに。彼れは驚き、怪しんで、母衣の際から、セルロイドの窓を通さずに見れば、普通のごとく合羽のために二本の股は見えない、再びセルロイドの窓を通して見ると、矢張り合羽を透して二本の股が現れるのだ。彼れはへんな氣がして、おれにはセルロイドを通して見る時には透視力があるんぢやないかしらなどゝ考へてゐる内に遊廓の大門の方へ車は曲つてしまつた。

彼れは女將に談判を試み正當な請求額であるや否やを遊廓の役員から來てもらつて檢閲してもら

つて、結局は請求額の三分の一だけが正當のものだといふことに決定して、老人から預つて來た五十圓の内から二十一圓六十五錢を支拂ひ、彦太郎と車を並べて引取つたので、彼等父子は柴野を大に謝として感謝した。十九歳の柴野は此時に對者に對して自分の方から何物か一種の壓力が出て、對者をして一つの壓迫を感ぜしめるといふ自信力を得て、十年も餘計に歳をとつた大人のやうな感じがした。

『あなたは今？』と高見彦太郎は問ふた。

『僕は外國語學校だがね、君は？』

『私ですか、はゝゝ、まあ其邊で夕飯でもやりませう』と高見は先に立つて、上體を前にかゞめて歩き出して、會芳樓といふ支那料理屋の二階へ上つた。

彼等はシウマイや雲呑麵などを食つて物語つた。

『私は參謀本部の翻譯物の筆耕をしてゐるのですがね、それも私の知つてゐる人かやつてゐるのを、私はその下受けをしてゐるんですよ。これがせめて英語でも知つてゐると、翻譯料としていゝ金がとれますがね、一人いま缺けてゐて必要なんですが、誰かありませんでせうか』との高見彦太郎の話に、柴野はテーブルを乘り出して、

『君、それは通勤するのか、自宅に持歸りの出來るものか』と問ふた。

『兩方あります、通勤してやるのは秘密物で、これは値段が高いです、自宅でやつてもいゝのは割合に安いです、私が一人ほしいといふのは自宅持歸りの方の下受人のことですよ、一日に三四時間やつて二圓ぐらゐにはなりませうか』と高見彦太郎は答へた。

柴野はこれを聞いて、心ひそかに天に感謝した。そして自分の現在の境遇を物語つて、その翻譯物の下受をしたいことを申出た。高見は、

『それは願つたり、かなつたりです、あなたがそれでお樂になれるなら、これに越した嬉しいことは私ありません』と言つた。

それで柴野は明日の夕刻、高見の宅へ行つて、その翻譯物を出す翻譯人の所へ紹介してもらふことを相約して別れた。

（十五）

翌日は日曜日であつた。柴野は今日はもう新聞賣に出ず、樂々とした氣分になり、小ざつぱりした服裝をして朝つから外出したが、十時頃に歸つて來て、五角形の顏の娘に斷つて押込の襖を開い

て自分の持物の整理を始めた。

『柴野さん、お引越し？』と五角娘は直ぐと様子を見て察したらしかつた。

『え、なが〳〵御厄介になりました』

『一日も早くこんなところには居らつしやらぬ方がいゝわ』と自分の商賣に損が行くやうなことを他人事のやうにして五角娘は言つた。

『御免くださいまし』と外で訪ふ優しい女の聲がしたので、五角娘は窓から首を出して、

『どなた？　その格子戸をあけてお入りくださいまし』と言つた。

『あの、こちら様に柴野さんつてお方はゐらつしやいますでございませうか』と其女は問ふた。

『え、ゐらつしやいますが、あなたは？』

『あたし絹と申します』

これを聞いてゐた柴野はあわてゝ表の格子戸を開いて外に飛出し、

『やあ、お絹さん、どうして？』と言ひながら、青年同氣社から離れて行つた。

お絹は彼れと肩を摺れ〳〵にして歩き出したが、窓から五角娘が、もし眼が蝸牛の眼のやうに長く飛出されるものなら二三間も伸び出したいといふほどに眼を飛出して二人、殊にお絹の方を睨みつ

めてゐるのを見たお絹はさつと面を染めて一禮して去つた。

『あたしおいとまに參りましたの』とお絹はやゝあつてから悲しさうに言つた。

柴野は昨日高見彦太郎から案内された支那料理が安くてうまくて量が澤山なので、お絹を連れて再び會芳樓に入つた。テーブルに向ひ合つて腰掛けてから、

『いつ歸るの』と柴野は問ふた。

『はい、今夜の夜行で……、あたしもうあれからお目にかゝるまいと存じましたけれど……、どうもあなたの、新聞をお賣りになるのがあんまりおいたはしくつて……』と言つてお絹はハンケチで目を覆ふた。

『やあ、其事ですか、其事なら御心配には及びませんよ。昨日知合に偶然道で會ひましてね、參謀本部の翻譯物の内職の口がありまして、相當の收入になるんですよ、今日の夕方それが定るんです。それであんな所には一日もゐることがいやですから、今朝實は貸間を探したんですよ、するとね、丁度いゝ所がありまして、今夜から其處に住むことにして、先刻は荷物の整理をしてるたところなんです』と柴野は愉快さうに元氣よく語つた。

『さう、それまあ宜しうございましたのね、それでやう〳〵私も安心しましたわ、どうか一日も

早く御成功なすてください、蔭ながらお祈り申します。柴野さま、出雲崎にお絹が寂しく生きてゐることをどうぞお忘れくださらぬやう、これが私のお願ひでございます』とお絹は言つて、またも泣いた。

柴野は何んにも言ふことが出來ず、下を向いて感情を制してゐたが、努めて平氣に、

『どうか私のことも……、時々お手紙をください、私は神田表神保町九番地、中村つな方にゐますから……』と言ふと、お絹は帶の間から小さな手帳を出して、番地を控へた。

食事が濟んでからお絹は、

『まだ少しくらゐ居たつて、こゝは差支へないでせうね』と言つた。

『いゝでせう、邪魔なら歸つてくれと言ふでせうよ』と柴野も別れたなげに見えた。

『柴野さん、あたし實はあなたからお敎へを願ひたくて、最後のお言葉として一生の身のためにと……、それで參つたんでございます』と言つてから、嚴肅な樣子になつて、

『あの、女は一度操を破つたのを隱して、他に良人を持つのは惡いことでございませうか、もし惡いことだとしたら、良人になる人に告白とやらを致さねばなりませんでせうか、または一生涯他に良人を持つことは出來ないものでございませうか』と思ひ迫つたやうに言つた。

柴野は是れを聞いて、非常に苦悶の表情をなしたが、やがて平靜に歸り

『私は何んの思想も哲學もない人間です、たゞ多少小說などを愛讀するだけなので、まとまつた根底のある意見は立てられませんが、私は私自我流の考へは持つてゐます、それで宜しいければお話いたしますが？』と言つた。

『はい、私はなにも學問をお聞きするのではございません、あなたの御意見を私の心の定木として守りたいのが私の願ひでございます』

『ではお話いたします、過去といふことに二つあると思ひます、現在にまで連續してゐない過去現在から切放すことの出來る過去、過去は過去として葬り去られる是等の過去は努めて現在にそれを持出す必要がないと思ひます、あなたが曾てなした行爲はたゞ曾て爲したといふことだけで、現在と關係がなかつたなら、それを現在に持出して人の感情を不快にさせることは無いと思ひます。しかし現在に引續いてゐる過去、現在の中に生きて働いてゐる過去、過去を單に過去として葬り去ることの出來ぬ過去は、言葉こそ過去でもそれは現在と同じものですから、現在に於てそれを隱してゐることは人を欺くことです。あなたの曾て爲した行爲が、たとへば戀情となつて殘つてゐるとか、或は相手が今でもあなたに纏ひつくとか、または子供が出來るとか、その他精神

的肉體的に何物かゞ殘つてゐるとか、それならば現在に生きて働いてゐるのですから、あなたの現在を所有する新しい良人に告白する必要があります。懺悔といふことは何も過去になした罪がほんたうに消えるのではなく、たゞそれによつて感情的に生きて働いてゐた過去が單に過去の過去となつて、現在から切り離されるから、それで「罪は消えた」といふのだらうと思ひます』と柴野はまだ言ひつくせないが、どう言つたらいゝか、辭句に困つてゐるやうであつた。

『ありがたうございます、ようくわかりましたわ』とお絹は言つて晴れ〳〵しい顔を上げた。

『猶ほ一言、蛇足かは知りませんが申します、曾てあなたが過去に於て或事をなした時のその場合の心持と同じ心持を今でもお持ちになつてゐるならば、曾てなした過去は矢張り過去ではなく現在に生きてゐるのです。懺悔は過去の心持を取去つて、新しい心持になることでありますから、卽ち現在から過去を過去として切り放つことになるので、それを「罪が消える」と假に稱してゐるのであらうと存じます。』

(十六)

柴野が借間してゐる家は未亡人とその妹との二人暮らしで、家は五六室もある廣々として好い住

居である。彼れは離れの下座敷を借りた。離れの二階、玄關を控へてゐる大廣間、それから取次の間の左にある書生部屋らしい部屋、この三室もみんな借手が住んでゐた。家の未亡人と妹とは奥の二室を占領してゐる。この家の入口には「中央醫會」といふ看板が揭げてあつて、これは玄關を控へた大廣間にゐる若い醫者の代診くらゐの人物が揭げてゐるものである。その會の仕事といふのは、醫員とか代診とか藥劑師とかの桂庵みたいなことをするのだが、それもそれをほんたうにするのなら良いけれど、例の貸家周旋業者にあるやうな申込金だけを取つて、後は野となれ山となれといふ類の違り方である物凄いものだ。

柴野は三日に一度ばかりづゝ翻譯の下受を出す人の家へ訪問するだけで、他は自分の部屋で出來る仕事をしてゐるので、學校へ行く妨げにもなれず、長岡の叔父から來る十五圓と、翻譯から來る二十圓か二十五圓のお金で、足りながちではあるが、先づ窮乏を感ぜず勉學することが出來るのを大に悅んで、努力してゐた。

彼れは自分の部屋へ來るには玄關から入つて、廊下傳へで行くのであるが、醫會の先生の座敷の傍を通らねばならなかつた。或日不意に歸つて來てみると、醫會の先生は未亡人の膝を枕にして寢て、未亡人に指の爪を切らせてゐた。彼れは『あんな冬瓜のやうな面をした婆々とよくまあ』と呆

れたが『これは下宿料を踏み倒す術策だな』と後から氣がついた。しかし妹の方は彼れが先年直江津で幾度か後から抱きつかれた藝者の愛助に似てゐたので、そして二十四五歳の豐滿な肉體と熟し切つたバナヽのやうな匂を發してゐるやう感じのする女なのであるためか、非常に引きつけられた。

或朝のことである、彼れは翻譯物の下受を出す翻譯係の人が朝參謀本部に行かない前にその人に屆けねばならぬ書類があつたので、夜の明け〳〵に起き出して裏口から出て行かうとして、奥の四疊半を通つたら、そこに一つの寢床の中に例の妹と離れの二階に借りてゐる書生とが入つて、ぐつすりと眠り込んでゐるのを見て、頭に血の逆上する思をした。彼れは『姉が姉なら、妹までが……』と、「未亡人生活の悲慘」といふものを感じた。

彼れが十九歳の時に上京してから四年目の春となつた。いま一年で本科を卒業せられるまでに漕ぎつけた。或晩、彼れは翻譯物の仕事を自分の部屋でしてゐたが、大廣間の醫會の先生の部屋では酒盛が始つて、醫會先生が論ふ、末亡人が三味線を彈く、妹が歌劇の唄を眞似るの賑かさであつた。その内に衣摺れの音が近づいて來るので、彼れは耳をそばだてたら、大廣間の方はひつそりとしてしまつてゐる。障子がすらりと開いて、ぱたりと締められ、後に女が立つたことを知つた彼れは胸を轟かせ、筆を持つたまゝ堅くなつた。その内に彼の首に縋つて倒れかゝた物があつて、酒の匂と

甘ずつぱい匂と白粉の匂とまじつて、肉慾を猛烈にそゝる觸感と共に息のとまるほどに咽せ返つた。彼れは益々石のごとく、地藏尊のごとく泰然自若となつた。

『よう、紫野さん、よう』と彼女は鼻を鳴らした。

そして紫野の襟首、胸元に唇を燒きつけるやうにつけて、

『姉さんは先生と……』と言つて、彼れを飽迄も罪の穴に引つ張り込まうとした。

彼れは遂に猛然と立ち、彼女を抱えて部屋の障子を開き、廊下を通つて、彼女を四疊半に押し込んで、ぴしやりと障子を締め、自分はぷらりと外へ出て、無暗に雜踏の街を歩いた。

『實に亂倫の家だ』と口の中で罵つた。

彼れはへと〳〵に疲れるまで歩き通して、十一時過ぎに宿に歸つた。玄關はまだ開いてあつたので、そこから入り、戸締りをして部屋に進むと、大廣間には醫會の先生と冬瓜の未亡人、四疊半には妹と見知らぬ男と……。これを見た彼れは兩腕で頭を抱へて自分の部屋へ倒れ込んで暫くは五尺の體の置き所に困つてゐたが、定められた學課は眠る前に全部すましてから眠つた。

彼れはこの亂脉の家から逃げ出ようとしたけれども、妹の目や姿に引つけられて、そこから出る勇氣がなかつた。彼れが武内家にゐるに堪へずして逃げ出したのは精神の苦痛であつた、この亂脉

の家で受ける苦痛は肉體の苦痛であつた、彼れは肉體の苦痛に對する抵抗力は強かつたけれども、精神の苦痛に對する抵抗は案外に弱かつた。そして肉體からの誘惑には非常に力づよく引つけられるだけの盛んな肉體の所有者であつた。そしてその力が強いければ強いだけ、その肉體の誘惑力に打克つ力も強かつた。故に彼れは精神の苦痛からは速に避けるので、常に精神の苦痛は輕くして、のんきなものであつたが、肉體の爭鬪苦戰からはなか〳〵逃げないでゐるから、その苦悶は隨分猛烈のものであつた。今や彼れは亂脉の未亡人の家に在つて、この肉體の中に起つた爭鬪苦戰のために血みどろの態であるのだ。

(十七)

彼れは是れまで佛敎や基督敎の說敎を聞いても、魂に何んの響をも與へられなかつた。未來生や極樂地獄や天國や神佛の賞罰などを信じない彼れにとつては、現在の成立宗敎は何等の權威の無いものであつた。たゞ多少基督敎に傾いてゐたのは讃美歌が謠はれるからであつた。彼れの內面的要求の一として、自分の有り餘る情感を漏らす一形式として、施律や高低のある聲によつてそれらを盛りたかつた。彼れはたゞ無暗にどなる譯にも行かなかつたので、この要求と欠陷とに對しては讃

美歌が最も安價で、容易であつたので、讃美歌を覺える手段として救世軍本部の講堂に出入した。そして彼れは彼れの若き情熱、憧れの魂の叫びを下手ながら讃美歌を獨唱することによつて漏らすことを幾分か得たのである。

ところが二十二歲の春の五月に至つて、救世軍の町廻りの「どんどん」と叩く太鼓の音が「ぴいん、ぴいん」と胸の奧、腹の底に響くやうになつた。それには數年來から持續して來た、誰れにも言ふことの出來ない、悲慘な大苦悶があつて、それが今や何等かの解決を彼れに迫つて來てゐる危機であるからなのだ。

その歷史は斯うである。彼れの中學時代のことだが、特に數學に興味を持つた彼れは或淨土眞宗のお寺の次男である同窓と語らつて、數學の先生の宅へ、敎課以外に數學の一段進級したものを習ひに通つた。それは彼れが十六歲、小坊主が十四歲の頃であつたが、先生の歸るのを待つことの間に、十四歲の小坊主から彼れは不潔な惡癖を覺えさせられた。それが如何なる名のもので、如何に健康に害を及ぼすものかといふことを知らなかつたものだから、每日その惡癖に耽つた。十七歲の時に母の箪笥から「造化機論」といふ厚い本を發見したが、それが何を記したものかは知らなかつたけれども、その挿畫に驚異の思ひを感じて、それを盗み出して讀んで行く內に、一切の性の秘密

を知り、且つ自分が行つてゐるところの惡癖が如何に健康に害があるかといふことを知つて戰慄した。けれどももう遲かつた。酒に耽けるもの、煙草に耽けるもの、女に耽けるもの、賭博に耽けるものと同一であつて、惡いといふことを如何に知つても、彼れの手はそれを行ふことを止めなかつたのである。

十八歳になつてからは、それが健康上に害があるよりも、彼れの立てた倫理觀念からして、それを不倫のことであると悟るやうになつて來た。彼れは童貞を重んじて來たので、この惡癖は童貞を傷けるものではないかといふ問題に惱された。それは婦人に關係するのは、自分を汚すばかりでなく、相手の婦人を汚す、しかしこの惡癖は自分一人だけである、とは雖も童貞問題は對婦人の問題ではなく、自分一個の問題であるところから見れば、この惡癖は或は童貞を破るものではないかとも考へたが、彼れはそれを解決する程の力がなくて、二十四歳の今日に到るまでも宿題として絶えず彼れを惱してゐた。彼れの心を幾分なりとも宥してゐることは、節慾、禁慾、持戒、獨棲の僧侶の中にお稚兒さんがあり、またこの惡癖が行はれてゐるといふことを聞かされてゐるので、それならこの惡癖は婦人に關係することゝは全然別のことで戒律にも觸なれいのかと考へたことである。然るに昨今に到つて、婦人と關係すると同じく、童貞を傷けるものであるやうな氣がして來たので、

惱みが急に激しくなつたのだ。

彼れは惡癖に耽けるにしても從來は無意識で器械的であつたのだが、この亂倫の家にあつて、濃艶な妹に刺激されてから、彼女に就ての妄想が現實のごとくその惡癖に加勢して來たので、彼れの童貞觀を激烈に搔き亂してしまつた。斯の如き惡癖は婦人と關係するといふことと、精神上に於ては同一であるといふ解決が初めて着いたのである。彼れの苦悶は悲愴慘憺を極めて來た。彼れの心は底の底から搔き亂されてしまつた。彼れの魂は何者か偉大なる力を求めて日毎夜毎に沈默の聲で泣き叫んだ。そこへ救世軍の太鼓が「惱めるもの、貧しきもの、吾れに來れ」と彼れの魂の底へまで通れと響いて來たのである。

彼れは全く宇宙の大權力の下に自分の心を虛しうしてひれ伏す考へになつた。遂に彼れは救世軍本營の說敎を聞いた晩、亂倫の家に歸らず、九段下の小公園の中に入つて、耶蘇のゲツセマネの園の祈りに似た祈りを獻げた。

『おゝ、耶蘇基督樣、私はまつたく力弱い罪ぶかい者であります、私は自分の力では何もすることの出來ぬ男であります、一切の罪を懺悔して、一切を投出してあなたにお縋りいたします、どうぞ私を助け、私に力を與へてください、私を惡魔の試みから救ひ出してください、今日今夜か

ら私はあなたに全身全靈を献げて、あなたを信じ、あなたをたよります、どうぞ私を救つて下さい、罪より救出してください、勇氣と意志とを與へてください」

彼れの祈りはこれであつた。彼れは人々の如く教師や牧師の前で祈ることが出來なかつた。それは神を見ず、教師や牧師を見て祈るやうになるといふことを知つてゐたからである。彼れの心は周圍を顧みずに、たゞ神にのみ沒頭して祈ることの出來ないやうな性格を持つてゐた。彼れの小公園の祈りは聞き屆けられた。彼れの胸は觀喜に溢れ、全身の血は湧き立ち、手の舞ひ足の踏むところを知らぬ有樣で、小公園の中を躍り廻り、立木に抱きついて體がへと〳〵になるほど、その木を搖つたりした。彼れは疲れ切つて亂倫の家に歸り、部屋に入つたが、考へれば考へるほど嬉しくてたまらず、再び六疊の部屋の中ちうを脚を撥ね、手を擧げ、狂喜亂舞をやつた。

その夜からして不思議な奇蹟が彼れの身の上に起つた。如何に亂倫の家に在つて亂倫の演劇を見ても、彼れが九年間の骨の髓にまで徹してゐた惡癖から全く脫却し得たのである。斯うして秋の十月まで、彼れはほんたうの淸淨の身として、神の前の小羊のごとく純白のものであつた。

（十八）

梨野直正のところへ女文字の手紙が來た。未亡人の妹が妙な目をして、いやな笑ひ方をして、彼れの机の上に置いて去つた。彼女は彼れに耻ぢもせず、憎みもせず、憚りもせず、常に情慾の燃える目を以て彼れに對する態度を止めない、無耻と言はうか、圖々しいと言はうか、徹底したと言はうか、男を甘くみてゐるのか、彼れには彼女の心がわからなかつた。しかしそれだけ彼れはこの亂脉の家に居て心安さを覺え、或垣を越えない用愼をしつゝ、我儘に振舞ひ、家族の息子格に近い横暴を示したが、それが惡型でなく、お坊ちやん型であつたので、未亡人は彼れを自分の方からも息子型に待遇してゐた。

彼れは封書の差出人を見ると「越後國出雲崎町佐藤秀吉方絹より」としてあつた。彼れは「佐藤秀吉」なる者を知らなかつた。お絹の姓は「淸野」であつたのだ。「おかしぞ」と思つて、彼れは封を切つて讀んだ。なか〳〵筆蹟は好いと感じた。

一筆申上候、ながく御無沙汰いたし、申譯無之候、お別れしましてから早一年近くになりましたゞ、お前樣にはお體にも何んのお障り無く無事に御勉學のことゝ、蔭ながら嬉しく存じ居り候、妾ことはお耻かしながら、罪の身を抱いて表記のところへ嫁ぎ申候、されど〳〵何んの悅びとて心には御座なく、たゞ死骸を抱くがごとき佐藤秀吉樣をお氣の毒に存じ候、けれども假りにも良

人と定めたる人。あなた様にお手紙を書くもこれぎりと思へば悲しく候、なんの良人に見せて悪いやうなことは書きませんぬけれども、妾の心は良人にすまぬやうな思ひを以てお手紙を差上げることから逃れることの出來ない良からぬ情を催す罪ぶかい女にて候、ですからもう〳〵お手紙は書きません

私は過去のことを思ふなと、お前さまから教へられましたので、罪の身ながら嫁ぎましたが、あなた様から心の目や女の道をときあかされてより、操のことや罪のことを知り、矢張り心苦しく存じ候、以前のおろかな女の頃のことが氣樂のやうに思はれます、お前様を怨めしく存じては、またもつたいないと自分の心をしかりなどしてをります、

この手紙がもうお前様とのお別れであります、もう生きてはお目にかゝりません、さうしなければ、妾の心をあなた様に打あけることが出來ませんのでございます、それほど迄にして、なぜ申上げねばならぬかと思ひますに、これは誰にも語らず、自分一人の胸におさめて、あの世へ去らうと考へ候へ共、それがどうしても心殘り、せめてはあなた様に私の心を知つていたゞくが、耻しいながら、自分の心やりと存じ候間、申上げ候

私は耻しきことながらお前様を心ひそかに戀ひ慕ひ申候、初めは只けだかきお方とのみ存じ居り

候へしも、あのことをあなたのお目にとめられ、そんなことから、あなたを同じ罪におとさうと惡しき心を起し、それとなくあなた様に罪の汚れを塗るやうに幾たびか致しましたのに、あなた様はそれを悟りながら、きれいにお避けなされしことが、この世の男の方とも思はれず、次第〳〵にあなた様が尊く、したはしく戀しくなり候、けれどもさう思へば思ふほど、私のやうな汚れた女は側へも寄れぬことゝ存じ、ぢつと悲しい心をおさへてお別れ申候、今になりて、猶ほ〳〵お前様にどうのかうのと申す心はさら〳〵ござなく候、たゞ一生の美しい花の夢と見て、それをせめてはあなた様から知つて頂き、かわいさうな女よと、一ぺんの御同情をなし下されば、嬉しく嬉しく、死んでも忘れはいたしません

おはりにのぞんで、申上候、不思議のことに候間申上候、これはたゞお前様のお心に置いて、妾に何んの御返事に及び申さぬことにて御座候、あなた様は女に心ありさうな様子に相見え候ゆえ、女もその心とゝりて、あなたのおそばに近づき申候に、いよ〳〵近よれば、近よるほど、今度はどうしても近よることの出來ない、ちつとも隙のない、どうしても差しひかへねばならぬ心が起きてくることにて候、お嬢様もそれと同じお感じをお持ちのことゝ存じ候、これはお前様の妻にならずに、お前様に近よりたいと思ふ女には、都合の惡いお前様に候へ共、お前様の妻になるお

方には、お前様の妻とならうとする女には幸福なことゝ存じ候、お前様の妻になられる女はどんな良い月日のもとに產れたものかと羨しく存ぜられ候

これが最後のお別れと思へば、書きしたゝめることは山々御座候へ共、これにて筆とめ申候、くれ〳〵も御體御大切に、一日も早く御卒業のこと祈り申上候

彼れは目に涙を浮めて讀んで、この手紙を胸に抱きしめては讀みなほした。そして彼女が彼れに對する疑問の一條に到つて、彼れは『おれはそんなに見えるかなあ』と不思議な感が起きた。彼れは彼女に會ひたいと思ひ、手紙を書きたいと思ふたが、己れの心を制した。『おゝ、お絹、お絹』と彼れは心に言つて、その「お絹」といふ發音に心の恍惚となるを覺えた。

(十九)

風まじりの時雨の降る夜であつた。柴野は飜譯の一段落がついたので、自分の學科の復習に移る前に、お茶でも呑んだり、お菓子でも食つたりしたくなつた。家の中は今なんの物音もしない、醫會の先生は未亡人とこの雨降りに何處へ出たのか居ない、玄關側の三疊の先生は夜學に行つて居ない、二階の先生は居るのか居ないのか音沙汰もない、或は眠つてゐるかも知れない。奥の間の臺子

の前に未亡人の妹が怠屈がつてゐるらしいやうに彼れには思はれた。すると彼れは彼女から茶を入れて貰つて、菓子は自分が買つて、そしてしめやかに話しでもしたい氣になつた。彼れはそれによつてホーム的の快樂の飢渴を癒したかつたのである。

『どうですな、お茶でもくれませんか』と彼れは言ひながら、その部屋に入つて行き、臺子の猫板の上へ五十錢玉を出して、

『これで菓子を買つて來て頂戴』と、どつかと亭主然と臺子の向側にあぐらをかいた。

未亡人の妹は暫くあつけにとられてゐたが、すべての意味を了解するや、崩れるほどの悅びを示して、鐵瓶の下の火を搔き起し、鐵瓶の重さを見てから、

『なあに、餅菓子？　すぐ來るわ、待つてゝ頂戴な、……ほゝゝゝ、だから雨が降るのよ、ほゝゝゝ』と言つて出かけた。

『書生！』とその背中へ彼れは聲を投げた。

『御免よ。ほゝゝゝ』と彼女は振り返つて、花のやうな愛嬌を殘して外に出た。

鐵瓶はちん〳〵と音を立て出した、彼れは『かうしてあの女を妻にして、臺子にすはり込むのも惡くないなあ』と思ふたが、急に『馬鹿な、節操なき彼女等の家庭に入つてたまるものか』と思ひな

ほした。そして『たゞ遊ぶには面白いね』と、ふざけた心の起きるのを禁ずることが出來なかつた。鐵瓶の口からは白い湯氣が立つて來た。女は急ぎ足に、息を荒くしながら歸つて來た。二人は茶を呑み、菓子を食つて世間話をしたが、其間彼女は彼れに對する慾情を示すべく、樣々な姿態を示してゐた。彼れは少しも感じないごとくに裝ふてゐたけれども、實は敏感にそれに共鳴して禁慾の血を燃え立たせてゐた。

『姉さんは感心してゐてよ、あなたを、あんな堅い男をみたことがないつて、あの人の奥樣になる人は仕合だよつて羨ましがつてゐてよ』と女は言つた。

『姉さんぢやなくつて、あなたでせう、謎なんか掛けたつて駄目ですよ、あなたのやうな女、誰れが妻にするものですか』と、彼れはじやうだんらしくと言つた。

『どうせ、さうでせうよ、よくつよ』と彼女は眞面目に考へたか、涙ぐんで下を向いてしまつたので、彼れは驚いて、

『おや、氣に障つたの、辛抱して頂戴、今んのはじやうだんですよ、實はその反對でさよ』と彼女は頭を振つて、髻の毛をほつれさせ、

『いゝえ、じやうだんで仰しやつても、そのお言葉はほんたうの事よ、あたしは全くあなたのやうな綺麗なお方の妻にはなれない、汚れ果てた、だらしのない女ですわ、もう一生をめちや〳〵にしてゐるのよ』と言つて、益々萎れ込んでしまつた。

彼れはそれを見て、次第に眞面目にならざるを得なくなり、また彼女を慰め勵まし、そして今の墮落の生活から救つてやりたくなつた。

『そんなに悲觀するもんぢやないよ、自分で勇氣を出して生き返つてはどうです、人間は自分の奮發次第でどんな窮境からでも生き返られるものゝ思ひます、耶蘇は死からさへ復活しましたよ』とふゝと基督教の牧師の言ふやうな言葉が出て　彼れ自身いやな氣がした。

『駄目でございます、私のやうなものは……、事情をお聞きになれば、あなたは直ぐおわかりです、鼻もはじいてはくださらなくなります、おゝ、人間は恐ろしいものですわ、一足ちがひで地獄へ落ちるんですもの』と彼女は言つて、到途泣き出してしまつた。

彼れは全く氣の毒になつてしまつて『どんな女でも心の底から腐つてゐるものはない、また初めつから墮落してゐるものもない』といふ事がわかつて來たやうに思はれた。

『八重さん、私に聞かせられるものなら、あなたの此處まで落ちた、身を捨鉢になさるまでの事

を聞かせてくださいませんか、さうしてあなたが生き返る方法を御相談しようぢやございませんか』と慰めるやうに言つた

彼女は泣くのをやめた。二階の先生は便所へ下りて來たらしい音がした。其間彼等はだまつてゐたが、彼れが再び二階へ上つた樣子なので、彼女は語り出した。

『え、どうぞお聞きなすつてください、あゝ今おもひ出しても恐ろしうございます。……姉さんが體が惡くて修善寺へ行つてゐたことがありまして、この家には姉さんの良人と私が留守居をしてゐました時のことでございます、その頃の私はまだ十九歳で、何んの罪もない處女でございました。兄さんは前から其心で計劃したのかどうか存じませんが、或晩大變に醉つてお歸りになりまして、私にいろ〳〵なことを言つて、からかふのです、寒い時だのに、座敷にごろ寢したりするので、風をひくと惡いと思つて、幾ら床の中へ入るやうに言つても、くだを捲いて寢ないもんですから、私が抱くやうにして床の中へ連れて行つて、引返さうとすると、私を引込んでしまつたのです。……私は翌朝になつても夢のやうでぼうとしてしまひましたが、昨夜のことをはつきりと思出して見ると、さあ大變なことをしたと狼狽して泣き暮らしました。兄さんも濟まぬことをしたと言つて泣いて私にあやまるんですけれど、どういふものか、私は兄さんを憎めないので

す。でも取り返しのつかない、とんだことをしたといふ氣はだん〳〵強くなつて來ました、兄さんも自分のした事は左程わるいことゝは思はなかつたらしいんですが、もしや子供が產れはしないかといふ心配のために、昨夜のことを後悔してゐるのです。それといふのも、もう私にはちやんと許婚があつたので、來年の春は結婚することにきまつてゐたのですから……、猫のこと、子供が產れることを心配したんですわ、兄さんは青い顏をして一日蹲ぎ込んでゐるのですもの、私もどうしようかと樣々に考へた末、……女つてものは其處へ行くと圖々しくなつてしまふものですわ、恐しいこと、罪なことを考へついたので、兄さんから一日お暇を頂戴して、許婚の男と大森へ遊びに行き、大膽にも私の方から厚かましいことを勸めたのです、そして歸つて來て兄さんに「御安心あそばせ、もし子供が出來ましても、河合の子ですよ」と申しました。河合といふのは許婚の男のことでございます。兄さんは手を合さないばかりに私に感謝してお悅びなさいましたが天罰が直ぐ來てしまひました。姉さんが修善寺の溫泉でした不行跡が兄さんに發見されたのです。兄さんは不意に姉さんを修善寺まで迎へに行つて、それを發見したんですの。兄さんはお婿さんなので、到途出て行つてしまひなすつたの。ところが私にも天罰が來ました。河合と夫婦になるや、間も無く男の兒を產みましたが、月數のことは十森行があるので胡魔かせましたけれども、天

劃ですわね、その子がせめて私に似てゐてくれゝばいゝのに、まあ、兄さんにそつくりなんですもの。それが又どうしても胡麻かすことが出來ないほど判然してゐるのですわ。私も河合もこのやうに面長なのに、兄さんときては長さよりも幅さの廣い顏で、目の小さい人なのよ、ですから子供の顏を一見して、これは誰れに似てゐるかつてことは、どんな人にもわかるのですもの。私もあんまりの恐ろしさに、白狀しないではゐられませんでした。斯うして姉さんと私と二人の姉妹が出來たのですわ。女も斯うなつては駄目です、まるで坂を石が轉がるやうに墮落して來ました。……どうしてこんな罪深い私どもが眞人間な生活が出來るもんですか』ともう涙も出さず、自分を嘲ける微笑を漏して、彼女は語り終つた。

彼れは何んとなく嚴肅な或物にぶつつかつたやうな感じがして、暫くは沈默してゐた。すると不意に火鉢越しに女の手が來て彼れの手を握り、

『柴野さん、私を救つてください』と焰のやうな目をして彼れを燒き盡すやうに見つめた。

彼れは靜かに女の手を拂ひのけて、

救へと言ふのはどうしろと言ふのですか』と問ひ返した。

彼れは性慾の情をぢつと耐へて、わざと冷淡に構へた。女もその態度に影響してか、高潮した感情

は沈靜に向つた。

『私にもわかりませんわ』と女はやるせなげに身をもじつて言つた。

『私はまだ歳が若くて經驗も少ないから、適切なことは言はれませんが、私のまあ考へは、あなたが貞操を只一人の男に献げるといふ心を持つこと、その只一人の男を探して、それを良人に持つこと、この二つに向つて努力するよりほかに方法はないと存じます』と彼れが言ひ終らうとした時に、姉と醫會の先生とが歸つて來た昔がしたので、

『……あなたは姉さんの眞似をしてはなりません』と早口で言つて、自分の部屋へ逃げ歸つた。

（二十）

彼れは二百十日の前後になつてから、再び肉體上の苦悶に遭遇するやうになつた。彼れが性慾を絶對に禁止してから半年を過ぎてゐた。彼れは此家の妹八重に對して直接に肉體に於ける慾望を猛烈に感ずるやうになつて來て、彼女が遠慮してゐても、彼れの方から積極に進みさうな形勢を示して來たので、彼れは此家からも逃亡せねばならぬかと考へたが、彼れの慾望は單に八重の上にのみ掛かつてゐるのでは無く、往來の女、電車の中の女、歌劇や活動小屋の中の女、すべて肉附のよい

女に對しては、今迄に感じたことのない、極端に肉體的の情慾に襲はれた。甚しきに至つては干物竿に掛かつた女の腰卷を見ても焰が燃え上つた。一日の内でも潮時ごろになると、一種の淫毒の如きものに腦髓を覆はれて、頭が重い石の蓋か何かを被されたやうに感じて、學科の復習なども出來ないほどになつて來た。

夜は次第に寒くなつて來た初冬の或夜、重い布團を被つて妄想に惱ませられながら眠りに就いた。或る天氣の好い日、八重と郊外へ散歩に出て、何處かの林の中に入つて行き、草の上に腰を下して寢ころんだ、二人の脚は言ひ合せたやうに觸れ合つた。……彼れはぱつと驚いて目を醒ますと、それが夢であつたので安心したが、肌に液體のひや〳〵して流れるのを知つた時に『もう駄目だ』と心の中で絶望的に叫んだ。

彼れは考へを進めて行つた。「おれは何處に童貞がある、妄想を描いて惡癖に耽けつた時に、既に童貞を破つたも同然ではないか、いま又たとひ夢とは雖も現實と同じやうな感じを以て婦人に接したではないか、これは餘りに明かなことだ、おれはもう童貞なんかは破つた。一たい童貞とは何んだ、一種の偶像でしかないぢやないか、童貞を守つてゐると言つてはゐるが、事實どこに童貞を守つてゐるか、もし童貞の必要があるならば、その童貞の意義はおのづから違つたものにならなけれ

ばならぬ。今迄おれは童貞とは自分一個の問題と思つてゐたが、全然それは裏切られてしまつた。これはどうしても童貞といふものは對女子の問題であらねばならぬ。女子を傷けることが童貞を破ることなのだ、即ち女子の貞節と男子の童貞とは結局同じ一つの行爲に對する二つの見方であるのだ』と斯う解釋を下した彼れは『そんなら八重さんはどうだ、彼女には貞節といふものは破られて來てゐるのだ、さうすればおれが八重さんの所に行くことはおれの童貞を破ることでも何んでもないぢやないか、彼女が諾し、おれが諾し、そして彼女は最早汚れてゐる身だ、そこに何んの罪があるか』と思つた。しかし其時に忽然として警告の光がさして來た。『おれは先日、八重さんに何と言つた、あなたが救はれるには、貞節を只一人の男に獻げること、その只一人を探し求めて良人に持つこと、あなたは姉さんの眞似をしてはいけませんと言　たではないか、それを自分の方から蹂躙することは、彼女の墮落を救ふのでなく、却て石臼をつけて海に投げ落すやうなものだ』と氣がついた。そんなら、おれはその只一人の男となつて、彼女の所に行くか、おれはあの女を好きだけれども妻にしたくない、妻にしたくない女に對して、彼女の只一人の男となることは到達できないことだ』といふ結論に達した。

此處に到つて、全く別の方面に向つて考へを進めて行つた。「おれは近頃妙に下劣になつて來た、

こんなことは今迄になかつたことだ、今では容貌の美醜よりも、女の肉體を直ぐ見て、淫慾にその身を燃すやうになり、遂ひに今夜のごとき妄想夢精をやるやうになり、頭は重くして氣は懶く、女の赤い鼻緒の下駄を見ても神經を刺戟されるのは實に變態性慾に近くなつて來てゐる。これはあまりに禁慾をしてゐるせいではないだらうか、或はさうかも知れぬ、單に「自己のための童貞」の價値を認めなくなつたおれは、例の悪癖をたゞ健康上の問題に於て考ふべきことだけになつた。ところが禁慾が過度になれば却て健康や肉體に害を及ぼすものとすれば、適當の慾望滿足は健康のために良いのかも知れぬと考るへやうになつて來た。

彼れは斯ういふ考への變化に連れて、悪癖に對する神の禁制に就て疑が起きて來ると、昔の悪癖が復活して、彼れは有意的衝動を以て禁制を破つてしまつた。彼れの頭の重いのも或はそのためか輕くなるのを覺えた。

（二十一）

彼れは悪癖に返つたけれども、女子との關係に於ては潔白の身を以て、六年目、卽ち滿五ヶ年間の星霜の後に漸く外國語學校を卒業した。越後高田市の私立の女學校に於て英語が隨意科として設

けられた。彼れは長岡の叔父から高田市の辯護士へといふ手順によつて、その女學校に聘せられる身となつた。生徒は三四年の兩學級の有志二十名だけであつた。彼女等は無論英語に興味を以て其課の生徒となつたのだけれど、一ヶ月二ヶ月とたつに從つて柴野といふ人物に興味を持ち、それが生徒間の評判となつて、次第に生徒が增して五十名ほどになつた。彼れは語學といふよりも英文學といふことに變り、それが一般の文學と變つて行つたので、むづかしい英語を覺えるよりも、彼れの文學談に彼女等は感激の眼を以て傾聽するやうになつた。彼れは二年ほどの間に師弟としての垣を越えるほどの熱い情愛が多くの女生徒の仲に生ずることになり、學校職員の問題になり出し、それを最もやかましく言ふのは女教員達であつた。女教員達は自分等から生徒が離れて彼れの方へ移り行くのが頗る妬ましくなつたのである。

彼れは校内の空氣を早くも悟つて、鄕里柏崎の中學校へ轉任する運動をして、それが成功した。彼れが赴任してから二年半ほどの後に柏崎中學校へ轉任した。彼れは出發の際、女生徒の見送りを拒んだ。そのために行列的の見送りはやめになつて、有志の者が隨意に見送るのは差支へないと言ひ渡されたが、それでも見送りの生徒は數十人あつた。彼女等の辯として忽ちに涙は流された。中に雜貨商の娘に清子といふのがゐた。彼女は其時十七歳であつた。秋の日は麗かに彼女の色彩あざ

やかな洋傘を照らした。柴野は途で清子が自分を送つてくれるのに會つた時に、

『清ちやん、ありがたう』と言つた。

すると清子は非常に苦痛を感ずるやうな表情をして、

『いやだなあ』と言つた。

彼れが列車の中に入つて、窓から首を出した時には全部の女生徒は泣いてゐたが、一人かの清子だけは泣かず、ぱつちりと大きな眼を開いて彼れの顔を燒きつけるやうに見つめてゐた。彼れも亦その目から逃げることが出來ずに見返してばかりゐた。列車が動き出して遠くへ去つても、清子の下眼瞼の垂れた目だけは何處までもついて來てゐるやうに、彼れには感じられた。

彼れは柏崎のがらんとした古い大きな家の中に雇婆さんとの二人暮しを寂しく感じて、中學校の生徒を二人ばかり泊めてゐた。そして毎日そこから五町ほど離れた學校へその生徒達と一しよに通つた。彼れが鄕里の中學校に赴任した翌年の初夏の頃から、彼れの家に寄宿してゐる二人の學生は殆ど毎日のやうに家の周圍に現れる十七八歳の美しい娘に注目し出して『あの女はおれに氣があるからだ』と二人して面白さうに言ひ爭つた。雇婆さんもその仲間に入つて二人の學生をからかつてゐたが、婆さんは直に老婆心を起して、もしも學生達やその娘にあやまちがあつて大變だと思ふた

かして、或日主人柴野に學生達ののろけ話を告げてから、

『旦那さん、學生さん達と何か起りはしませんかの』と言つた。

柴野はこれを聞いて、直ぐ中學校の教師としての考へを以てそれを耳に入れた。女學校の生徒と中學校の生徒との艶聞は折り〳〵あることなので、もしや自分の監督の下にある生徒からしてそんな問題が起つては面白くないと思ふたので、その娘を一つ能く注意して擧動を調査し、どこの娘であるかをも見屆けてやらうと心に定めた。

『お婆さん、その娘はどんな子だね』

『はい、十七八でして、丸い顔で、愛嬌のある、西洋人のやうな眼をした、背の高い、赤い帶をしめた、蒲黃色の洋傘をさした、束髮を結ふた、器量のいゝ子でございます』

『いつも何時頃やつて來るね』

『さうでございますね、なんでも一日に二度は來ますが、それが朝は旦那さんのお出かけなさる頃、夕方は旦那さんがお歸りなさる頃でございますよ』

『さうかな、お婆さん、まあ知らん顏をしてゐておくれ、私が一つ調べて見るから……』

彼れは翌日の出勤時間に二人の學生を先に出してやつて、二三十分間も過ぎた後に二階の窓の戸を

細目に開いて外を見た。正面には大きな醤油屋の土藏が突っ立つてゐる。その下が道路であつて醤油屋の石垣がずつと連續して一方の側壁を作り、他の一方の側壁は柴野の家の石垣で、道は石垣と石垣との間にある狹い坂道なのだ。その醤油屋の石垣に一人の娘が倚りかゝつて、柴野の門の方へ注意を向けてゐるのか、雇婆さんの言ふやうに朋黄色の洋傘で顏を隱すやうにし、眞赤なしぼりの帶をしめてゐる。この樣子を見た彼れは『學生がとつくに學校へ行つてしまつたのに、あゝしてゐるところを見ると、學生とは關係してゐないことかな』と考へたが『それでも學生がまだ行かないのだとでも思ふてゐるのかも知れない』とも思ふた。彼れは猶ほ十五分間ばかりも隙見をしてゐたが娘は依然として門の方に注目して立つてゐて、何處を見よっともせず、何處へ行かうともしないので、彼れはまた『これは學生には用がないのだ、もう學校の始業時間は過ぎてゐるのに、まだあゝして立つてゐるところを見れば、學生か出て行つたことは知つての上のことだ、さうすると婆さんには用のないことはわかり切つてゐる、なぜなら用があるならいつでも會はれることだから……、して見るとおれだな』と氣がついた。

彼れは自分を顧みた。彼れは二十七歳でしかない、そして獨身だ、いろ〳〵と緣談も持ちかけられてゐるし、また若い女から注目もされてゐる、今そこの路傍に立つてゐるのは矢張り彼れを注目

してゐる女の中の最も執念ぶかくて猛烈なのかも知れないと考へた彼れは胸の躍るを覺えた。再び覗いて見ると、女は心が動搖して來たらしい樣子をし始めた。彼女は次第に門の方に近づき、門から上半身をのばして玄關の方をさし覗いてゐるやうになつた。彼れは『いよ〳〵是れはおかしいぞ、一つ不意に玄關から飛出してやつて、あの女の顏を見てやれ』と考へ、

『お婆さん、行つて來るぜ』と言つて、靴をはき、からり格子戸を開き、敷石の上へ飛出した。女は驚いて電光のごとく姿を消してしまつた。彼れが急ぎ足で門の外へ出て見た時にはもう何處へ行つたか、少しも見えなかつた。けれども玄關の戸を開いてちらつと見た時のその顏は決して初めて見る顏ではないが、だと言つてこの土地で見たものではないといふことを、彼れはぼんやりながら思つた。

(二十二)

彼れは學校から歸つて來ながら考へた。お婆さんの言ふ通りであるとすれば、いま時分もあの女は來てゐるに違ひないが、どうしたならその女の氣のつかぬ内にその女の近くへ寄ることが出來るかと名案を出さうと努めた。彼れは廻り道をして反對の方から歸ることにした。いつもは坂を下つ

て門に到るのを、今度は上つて門に到るやうにした。彼れがお寺の前を通り、少しく前かがみになつて坂を登つて、醤油屋の石垣の近くに來ると、豫想どほり例の女が例の洋傘をさして赤い帶をしめ、柴野の門の方に向つて、彼れの近づきつゝあるを知らずに背を向けて立つてゐた。

彼れは胸をどき〳〵させながら靴音を忍ばせて、女の洋傘に肩を觸れるやうに近づき、通り過きて不意に女の顏を見た、女も彼れの顏を見た。そして微な叫び聲を上げたが、どうすることも出來ず、棒のやうに突つ立つて彼れの顏から目を放さうとして放し得ずにゐるやうであつた。

『おや、あなたは清ちやんぢやない？』と柴野は驚いて問ふた。

彼女は漸く心を取り直したと見えて、上體を曲げて挨拶し、顏を眞赤にして、

『はい』と答へた。

『どうしたんです、まあお入りなさい』と彼れはもじ〳〵してゐる彼女を誘ふて家に入つて、直ぐ自分の書齋に通した。

學生達は庭球か野球でもやつてゐるのか、まだ歸つてゐなかつた。柴野は常服に着かへてから、小さくなつてすはつてゐる彼女を促して樂に身を崩すやうに進めてから話を始めた。

『内の者の話には、あなたは時々この邊へお見えになるさうだが、どうしたの？　こつちへ來て

ゐるんですか』

『はい、あたし病氣でこつちの親類へ轉地に參つてゐますので、毎日意屈ですから散歩にこの邊まで來るのでございます、あの山形屋が親類ですの』

『さうですか、なぜ私のところへ來ないのです』

『でも耻かしくつて……』と彼女は體を曲げて袖で顏の邊を覆ふた。

『いつ頃から？』

『四月に參りました』

今は祇園祭に近い七月に入つてゐた。彼れは彼女の樣子を見た。病氣といふけれども、どこが病氣なのか顏色もよく、體も脂肪がかゝつて、すつかり女になつて健康と性的の血とが活潑に循環してゐるやうに見えた。

『いつ頃までゐるの？』と彼れは問ふてみた。

『いつ頃までですか、あたしいつ迄もゐたいと思つてゐますの』と彼女は言つて、濕ひのある西洋人のやうな目だと雇婆さんが言つた大きな眼をぱつちりとあさせて彼れを見上げた。

私のとこはね、二人の學生とお婆さんがゐるだけで、何んにも氣樂ねはいりませんから、遠慮

なく遊びにいらつしやい、ね』

『はい』と彼女は體を前にかゞめた。

彼女は二時間も遊んで、夕飯に近づいたのを見て、また來ることを言つて、いそ〳〵と歸り去つた。

彼れは彼女の擧動や表情からして或物を感知して、自分の心にも彼女に對する或物が激しく醸生されて來たことを知つた。病氣のためだといふのが彼れには解せなかつた。もし果して彼女が病氣であるとすれば何病氣だらう、轉地をせねばならぬ病氣とすれば、先づ肺病か腦病か神經病か精神病だが、あの健康さうな體を見れば、決して肺病や精神病とは思はないので、或は腦か神經に關する病氣だらうかと考へた。それから彼れは、彼れの家の周圍に毎日來ること、あの目、あの樣子から推しての彼女の心、そんなことを綜合すると、一つの空想が、ローマンスかに關する事柄が思ひ浮ぶのである、彼れは彼女に對して無關心でゐることが出來ず、心を惱ませられた。

その翌日から彼女は彼れの出勤前にやつて來、彼れの歸宅前には軒音を聞くと玄關の障子を開いて手をつき『お歸り』と言ふために早く來てゐた。二人の學生も雇婆さんも、妙な目で柴野と彼女とを連絡つけて見るやうになつた。そこで彼れは考へて、この女の處置を適當につけねばならぬと決心した。田舍の人の目と口とはやかましいもので、殊に教育者に對しては苛酷であることを知つ

てゐる彼れは、つまらぬ評判を立てられては自分も娘も不幸であると思つた。

そこで彼れは學校の歸りに、彼女がゐるといふ呉服屋の山形屋へ立ち寄つた。彼れは今頃は彼女が彼れの家に行つてゐて、不在であることを知つてゐるので、その機會を利用したのだ。彼れは二三人に會つて、彼女のことに就て聞きたゞしたこともあつた。

『實は變なことを承はるやうですが、あなたの所へ高田の三宅清子といふお娘さんが來てゐらつしやますね』と彼れは先づ問ふた。

『はい、如何にも來て居りますが?』と主人は不審さうに問ひ返した。

『それがその、私の家へ始終お遊びに入らつしやるんですが、それと言ふのが、私がもと高田の學校にゐた頃、お教へ申上げたことがありますので、知り合つてゐるのです、先日ふと私の家の前でお目にかゝつてから、まあその奇遇といふやうなことからして家へお上げ申して、柏崎にゐるでのことを伺ひますと、病氣で轉地療養に來てゐるとのことで、それから毎日のやうにお遊びに入らつしやるんですが、私共は決して迷惑には存じませんけれども、内にも學生がゐることでもあり、世間の口の端がうるさいものです故、それでお伺ひに參つたんでございます』

『左樣でございますか、どうも御迷惑樣で……』

『いや、さういふ意味で私は申すのではございません、あなたから御注意して戴いて、お遊びに入らつしやらぬやうにしたいといふのでは無いのですから、そこを誤解のないやうにして戴きたいのでございます。こゝを能く御相談を願つて、お娘さんの幸福になるやう、私共も都合の好いやうにしたいと思つて參つたんでございます。事實を申上げます、ずつと前から一日に二度も私の家の周圍に立ち寄られてゐられたので……』と彼れは今迄の事のいきさつをくはしく述べて、

『私はそんなことや又はお娘さんの擧動や心ありげな表情などからして、考へてゐることがあるのでございますが、それに就て、それを確めるか、打消すかの材料のために、あなたにお伺ひ致したいことがあるのでございます。私の見るところによりますと、御病氣の樣子にはちつともお見えならんので、一たいどんな病氣でゐられるのか、甚だ立ち入つた事を申して濟みませんけれど……、そんなやうな行きがゝり上からして……』と言ふや、主人は幾度かうなづいて、

『いや、能くわかりました。私も今あなたのお言葉によつて思ひ當ることかございますから、そんなら私の存じてゐるかぎりのことを申上げることに致しませう。私の妻……つまりあの子の叔母にあたるんですが、高田の姉……あの子の母親ですな、それから承つたことですが、去年の秋頃からあの子が氣拔けしたやうな風になつて、學校も缺席勝ちで成績も非常に惡くなり、學校か

らはその不成績のことを言つて來ますけれど、多勢の子供の中のあの子でございますが、特にあの子ばかりに目をかける餘裕もなかつたので、心ならずも投げやりにいたしてゐましたら、到途今年の卒業には落第させられてしまひました。その時になつて兩親はあの子を叱つては見ましたものゝ後の祭でございます。あの子もそれからは學校へ行くことがいやだと言つて行かなくなりましたが、毎日うつら〳〵と病氣のやうにして日を送つて、寢たり起きたりしてゐたのがほんたうの病氣になつて床に就きつきりになつてしまひした。醫者は、少し肺が弱つてゐるから海岸へでも轉地させて見てはどうかと言ひましたものですから、直江津へでもやるかと申しますと、あの子は「柏崎へ行きたい柏崎へ行きたい」と泣いて言ひますので、寢てゐる病人がそんな遠い所まではは行かれるものかと母親が叱ると「あたし一人で行けるわ」と行つて私の所へ預けられるやうになつたのでございますが、私のところへ來た當時は、元氣もなく、青い顏をして痩せてゐたのが、今ではあの通りに丈夫さうになりましたので、矢張り海岸へ轉地した甲斐があると思ひました。それでもう良からうから歸つてはどうだと言ひますと、「まだゐたい、いつ迄もゐたい」と言ふので困つてゐる次第ですが、子供の多いのに私の妻は誠にあの子を可愛がつてゐますので……、まあそんなやうな譯でございます』と語り終つた。

『さうでございますか、さうしますと、去年の秋からと言つても、私があちらにゐました頃はお丈夫で、學校の成績もよかつたのですから、私がこちらへ來てからのことですね』

『さういふことになりますかな』

彼れは膝を組みなほして、洋服の窮屈さを耐へ、

『そこで一つお願ひがあるのでございますが、お娘さんのほんたうの心を聞きただして頂きたいのでございます』と言つて、主人の顏を見ると、主人も彼れの顏を見て何事かを悟り、

『はい、承知いたしました』と快諾した。

(二十三)

彼れはその翌日から彼女の擧動や樣子を見るのに變つたところもないので、其内には何事があるだらうと、毎日通つて來る彼女を歡待してゐたが、彼女は二人の學生とは少しも接觸せず、雇婆さんからは柴野のことを根掘り葉掘り聞きたゞすことを雇婆さんから彼れへ報告された。

『お婆さん、清ちやんは自分の心持について何かお前に漏らすやうなことはなかつたかね』と彼れは聞いてみた。

『いゝえ、なんにも言ひなさらんが、なぜ奥さんをお貰ひにならんのかとか、奥さんになる人は仕合せだとか言つたりなさいますことが能くございますよ。旦那さん、私はお嬢さんの心をよう く知つてゐます、どうにかしておやりになつたが良うございますまいか、私はお嬢さんがお可哀でなりません』と雇婆さんは言つた。

彼れはその事に就ては何んにも言はずに、たゞ溜息をもらしてゐるのみであつた。

祇園祭が來た。長岡から來客があつた。それは辯護士の叔父とその妻と娘との三人であつた。彼等は祇園見物と避暑とを兼ねて來たので、叔父は明日歸るが、母と娘とは一夏御厄介になるとのことであつた。この不意の來客、殊に若い娘の襲來を見たものか、清子は姿を見せなくなつた。それでも家の周圍に立ち廻ることがあると、雇婆さんは聲をひそめて彼れに報告した。

辯護士の叔父は翌日の午後の下りで歸ることになつた。母親と娘とだけがこの一夏こゝに停つてゐるといふことの眞實の目的がどこにあるかは彼れには能く讀めた。彼れは娘を觀察した。この前に來てゐた姉娘よりは感じのよい女であつたが、淺薄な、奥行のない女で、彼れを引つける力をどこにも持つてゐなかつた。到底「清子」のロマンチックな色彩を彼女からは見出し得なかつたので、彼れは再ひ叔父の意に叛かねばならなくなつたことを苦痛に感じたが、仕方のないことだと思つた。

しかし寂しい家庭の中は二人の婦人のために賑かになり、娘と二人の學生とは直ぐ仲よくなつて遊び騒いだ。母親はそれを見て氣を採んでゐた。そして彼女は娘を柴野に接近せしめることに苦心をこらした。これを見た柴野は、前の姉が來てゐた時は祖母であつた、それを今度は母親が『お婆さんは腕がない』と見て、自ら忙しい家を離れて來たものだなと察せられて『やり手婆のやうだ』と考へて、おかしく感じた。

娘も母親の尻押しによつて、彼れに接近していろ〳〵の隙を作つて見せたけれども、また彼れを恐れ憚つてゐるらしいので、そこにぎごちない樣子があつて、彼れは寧ろ不快を感ずることはあつても、誘惑を受けることはなかつた。娘も難より易をとるといふ傾向があつて、彼れよりも二人の學生に接近して行くことが、彼れに能く見えたので、そこに過失がないやうに注意を怠らなかつた。母親の樣子を見ると、娘と彼れとの間が一定の距離を作つて、それよりは一歩も接觸して行かないので呆れてゐるらしく、そろ〳〵最後の一戰を試みて退却と出かけろ準備をしてゐるらしく、柴野には思はれて、その最後の一戰を恐れた。ところがその最後の一戰は奸計でも地雷火でも水雷でも飛行機でもなく、堂々たる宣戰の布告をなした白兵戰であつた。

『直正さん、私もいつまでゐたつて際限がございませんから明日歸らして頂きますが、お房だけ

は殘して置きますよ、あなた一人では不自由でせうからね』と母親は言つた。

『いや、お歸りになるのはいゝとして、お房ちやんを一人のこしてお歸りになるのは迷惑しますね、今ですらも、あの學生達とお房ちやんとの中を警戒するのに骨が折れるのに、あなたに歸られてはいよ〳〵以て困りますよ。お互に年の若いものです、もし萬一のことがあつたら、私は教師とし、またあなた方から依頼された監督者として申譯がないのです』と彼れは敵本主義で、それを撃退しようとした。

『そんなことは直正さん一人の心次第で、何んの危險もないことになりますわ、瓜を盗まれないに摘み取つたらいゝぢやありませんか』と母親は銃劍を拔いて突貫して來た。

『私はもう瓜があるのです、ちやんと定つてゐるのです』と彼れは大きな楯で受け止めた。

母親はだぢ〳〵と退いて、

『へえ、さうでございますか、どこの娘ですの』と隙を狙つて斬り込まうと陣容を整へた。

彼れは少しく躊躇してゐたが、大楯を眞向にかざして少しも隙を與へないやうに、

『高田の雜貨商三宅の娘の清子といつて、今はこゝの呉服屋の山形屋に來てゐる娘がそれです』

と『金城鐵壁だらう?』といふ風に答へた。

『もう結婚のお約束でも出来てゐるのですかね』と彼女は何處かに弱いところはないかと叩いて見た。

「いゝえ、結婚の約束もないし、先方も知らないことです、たゞ私の心の中に定めた問題でして、私はその女に戀してゐます、どうか妻にしたいものだと考へてゐるのでございます」

母親は大に驚き、狼狽したが、金城鐵壁と見えたのは此方の幻であつて、實は何んにもなかつたので、彼女は敵が無鐵砲で度胸がいゝのにだけは呆れ返つた形、これは一つ彼れの味方となり、新に現はれた敵國を突いて見て、その敵が到底落城しなかつたら、また此方から攻めたてゝほんたうに落城させようとの策戰計劃を新に立て直したかの如く、

『ぢや、物は相談だが、お前さんがそんなに御執心なら、私もお前さんの叔母だもの、自分の物ばかり押しつけるのが能ぢやない、一つお前さんのために肌をぬいで、其方のお世話をして見ませうか、どうですね』と出たので、柴野は『さう來なくては嘘だ』と、

『さう叔母さんが言つてくれりゃ誠に有りがたい、一つ先方に掛け合つては見てくれませんか、その山形屋といふのは其娘の叔父叔母に當るのですから、話はわかるだらうと思ひます、もしそれが駄目なら、叔母さんの仰せには何んでも從ひます』とうまく言つて、お願のしるしに頭を一

つ下げた。

『では、さうすることにしませう、これから行つて來よう、何か手土產を持つて……』と母が手土產の用意に立ちかゝらうとすると、

『叔母さん、實はその娘はあなた方のお出でになつた日まで毎日こゝへ遊びに來てゐたのです、それで私が見染めたといふわけなんですから……、その娘の方では私がそんな心でゐるなんてことは少しも知らないのですよ』と彼れは參考のためといふやうにして言つた。

「さうかへ、ぢや其つもりで……』

「叔母さんは山形屋を御存知ですか』

『知らないでさ、あそこへは長岡の六角からお嫁が行つたんだよ、その六角と私の内は親類同樣のおつきあひをしてゐるからね、さう言へば山形屋でも心置きなく相談に乘つてくれると思はれるんだよ』

叔母は『うまく纏つてくれゝばいゝが』と獨語のやうに言つて出て行つた。柴野は『うまく纏らねばいゝがだらう』と皮肉の笑を浮べて、口の中で言つた。學生の一人は暑中休暇で不在だが、他の一人は水泳練習のために海岸に行つてゐる。長岡から來た妹娘はこれもまた海濱へ遊びに行つて内

には居なかつた。その不在を見すまして叔母が彼れに直接談判を開始したのであつた。

彼れは叔母の短刀直入の白兵戰に金城鐵壁と見せかけた「清子に戀慕」云々の件は、彼れにとつては決して一時凌ぎの逃口上では無く、近頃の彼れの決心であつたのだ。彼れは武内家に上女中をしてゐたお絹から貰つた手紙の中に『あなた様は女に心ありさうな様子に相見え候ゆえ、女もその心となりて、あなたのおそばに近づき申候に、いよ〳〵近よれば、近よるほど、今度はどうしても近よるとこの出來ない、ちつとも隙のない、どうしても差しひかへなければならぬ心が起きてくることにて候……』といふ文句が深く心に刻みこまれてゐるので、清子が子供心にも女學校時代から彼れを慕ふてゐるらしいことは、彼れは心に知つてゐたので、清子をして此處まで來らしめたのは、彼れ自身が最初彼女に水を向け、其後とも絶えず水を向けてゐたせいではないかといふことに氣がついたのだ。彼れは彼れ自身の心を解剖してみると、それが充分うなづかれるので、以前から清子を戀しく可愛ゆく思ふてゐたことは確かなのである。それで今この場合になつて、彼女の心を汲んでやらぬといふことは罪深いことであり、また彼れ自身の失戀にもなることであるので、彼れは勇を鼓して彼女を自分の妻にしよう、いつまで外形上の童貞を守つて、心にいろ〳〵の罪を犯してゐることは愚かなことである、彼れが二十八歳の今日まで立て通した外形上の童貞を清子にによつて

破ることは決して口惜しいことではなく、今迄その操を守つて來たのは、清子一人のためであつたのだといふやうに解釋を下すほどの心になり、それほどの熱い戀情を彼女に向つて燃し、また彼女と彼れとが結びつくのに、其處に何んの不都合もないやうに考へられたので、偖こそ叔母に向つて彼れの平常としては大膽に切り出してしまつたのだ。

（二十四）

叔母は悅びともつかず、悲しみともつかず、複雜な顏をして歸つて來た。水泳に行つた一人の學生も、海濱へ遊び行つてゐた妹娘も歸つて來てゐた。それで夕飯が濟まされるまで、叔母は緣談の報告ができなかつた。夜になつてから、叔母と彼れとは彼れの書齋に閉ぢ籠つて、低い聲で話しあつた。醬油屋に面してゐる方の窓からは涼しい米山風が吹き入つた。叔母の報告の要領は次の如くであつた。

清子は柴野へ長岡の客が來てからは急に鬱ぎ込んで、部屋の隅で泣いてばかりゐたが、再び病氣になつて寢るやら、泣いたり、死んでしまひたいなど〻言つたりして、山形屋のおかみである叔母を困らせた。その前からして、叔母は柴野先生の頼みもあるので、清子に胸に納めてゐる秘密を吐

かせうと骨折つたけれども、どうしたことか、柴野先生のことを白狀しない。白狀はしないけれども、叔母には清子の心が直感されてあつた。そこへ以て來て、今度の清子の病氣やむづかりやうであるので、てつきり是れは柴野先生との間に何事かあつたのではないかと見當をつけた。そこで叔母は召使の信用ある者に意を含めて、柴野先生や其家の樣子を探らせたら、長岡から若い娘を連れた客があつて、その娘が柴野先生の許嫁であるといふことがわかつたので、清子の病氣も原因が判明した。そして『誠に困つたことになつたが、どうして見ようもない』とたゞ心を勞してゐるのみであつた。斯ういふ狀態になつて停滯してゐたところへ、長岡の叔母が緣談を持ち込んで來たので、山形屋では夢ではないかと驚いて悅んだが、また解し兼ることもあつた。それは長岡から來た許婚の娘の一件である。このことに就て叔母は事實ありのまゝを言つて聞かせたので、大に了解したさうである。しかしながら今一つは、柴野先生の心をまだ清子には知らせてないといふことである。あんなに毎日清子が行つてゐたのみか、わざ〳〵柏崎まで追つかけて來たほどの熱心がたゞ單に男を戀ひ慕ふだけのことで出來るものではない、これには高田にゐる時から二人の間には何か取り返しのつかぬことがあつて、娘心の一圖にそれを、いたづらで無い正しきものにしようと努めてゐることではないかといふ疑問が山形屋では起してゐるのだが、それも緣談がまとまることになれば、

そんな事は荒立てる必要は無いといふことになり、その緣談に就ては山形屋では無論異議のあらうやうもなく、また高田の方でも、多勢の子供の中の一人の娘のことでもあり、且つ山形屋で『良緣だ』といふことであれば、これも直に承諾することであらう、清子本人の心は問ふて見なくてもわかつてゐるから、話はまとまつたも同樣である。けれども順序は順序であるから、一應その話を高田の方へ通し、その承諾を求めた後に、吉日を選んで結婚といふ運びにしようといふことに一決したのだ。

それで兎に角この事を清子に聞かして悅ばせてやり、病氣もなほさせようとて、長岡の叔母のゐる內に、柴野先生からの申込を清子に話したら、

『うそよ、あたしをだましてはいや、いや』と言つて泣き出したが『長岡の叔母さんがその事でわざ〳〵來たのだ』といふことを說き聞かせ、また長岡の叔母が彼女の側へ行つて、柴野先生の言つたことを話すと、彼女は一時は氣拔けのした馬鹿のやうな顏をして喪心狀態であつた。それで一同はどうなることかと樣子を見てゐると、彼女は逆上して氣が變になつて、しく〳〵泣いたり、けら〳〵笑つたりしてゐるが、だん〳〵氣が落ちついたなら、正氣に返るだらうとのことだ。……

これで叔母の報告は終つたが、今度は叔母の言葉として、

『まあ、ほんに、清子といふ娘はいぢらしい子だ。私はもう〳〵自分達のことは考へないで、あの子の緣談が丸く納まることを心から願つてゐます』と言つて涙ぐんだ。

それから三日目に、山形屋のおかみが柴野のところへ來て、高田の方でも異存はなく、一切のことは山形屋にまかせる、祝言の日が定つたら聞かしてくれ、それまでに娘の衣裳道具萬端を調へて送るし、その日には母親が出向いて行くといふことであり、清子も正氣に返つて、ほんたうに泣いて悅んで、今では大に元氣が出過ぎて、內の子供を連れて濱へ遊び出てゐる。お嫁に行くといふ娘がお尻をまくつて砂の中を駈けくらしてゐるとの事である。

そこで長岡の叔母と山形屋のおかみとが祝言の日取りの相談を始めて、約一時間をそのために費した。甲論乙駁でなか〳〵埒があかなかつたが、柴野がその中庸を取つて、いまは八月の下旬であるから、二ヶ月も猶豫があつたら支度が出來ようといふので、十月の二十五日といふことを提議した。長岡の叔母は來月早々との說で、山形屋のおかみは支度に日數がかゝるから來年の春との說であつたのだ。

『十月と言へば、魚も澤山とれるし、料理も腐らないから……』と二人の女はそこで手打をして、後は衣裳の話に移つた。

長岡から來た妹娘はどんな感想ををを抱いてゐるのか、別に平常と變つた表情もしないで傍聽してゐた。

(二十五)

柴野と清子との結婚式が擧げられるまでの間に、彼れにとつて起つた事件で書き記して置くべきことが二つある。一つは彼れの長岡行である。長岡には彼れの中學校時代の同窓で、高等女學校の教諭になつてゐる男がある。九月下旬の土曜日に彼れは長岡の叔父の家を訪問したついでに、その教諭を訪ふた。久しぶりの對面なので、角屋で一杯ひつかけ、教諭はその元氣で遊廓行を誘つた。彼れの多情と好氣心と、それから堅固なる童貞の自信とは彼れをして快諾せしめて、其夜登樓した。彼れは門をくゞる時に『おれは直江津で試驗濟ではないか、それにあんな可愛い美しい清ちやんがあるもの、矢でも鐵砲でも持つて來い』といふ確乎不拔の精神であつて『汝の神を試みる勿れ』といふことはすつかり忘れてゐた。

いま一つのことは、十月の初旬、柏崎の越後タイムス主催で、平塚らいてう、山田わか子の講演會があつて、彼れも、彼れの許婚の清子も傍聽に行つたことである。山田わか子の講演は一男性文

明の末路」と題するもので、要するに「婦人問題」を說いたのだか、彼れは、わか子の婦人問題に對する根本的思想に於て誤りがあると考へた。彼女は婦人問題を「女性は男性よりも優れてゐる」といふ立場から取扱つてゐるが、彼れは婦人問題は「男子ばかりが人間ではない、女子も人間である、故に男子と同一待遇に女子も置くべきものだ」といふ立場から取扱ふべきものだと考へた。

平塚らいてうの講演には全く打たれてしまつた。彼女は山田わか子のごとく泰西の學問を振りかさゝなかつた。たゞ新婦人協會の事業たる「結婚に對して花柳病に關する取締規則制定の出願運動」に就ての廣告であつた。花柳病に犯された男子はそれが全治するまでは結婚が出來ないといふ規則の制定といふことよりも、彼れが打たれたのは、その事實の行爲そのものに就てゞある。規則の有無に關せず、花柳病に犯された者は無垢の相手を汚すことは大罪惡であると考へたので、もしそれが法律となつて發布されたなら、どんなに日本の女子は幸福であらう、どんなに日本の男子は品行を慎しむであらう、どんなに日本の子供は健康になるであらうと思つた。この講演會があつた以來、彼れは平塚らいてう等の運動に非常に打たれて、一つの大いなる煩悶苦惱を嘗めるやうになつた。

偖て十月二十五日の夜は來て、柴野家にては直正と清子との結婚式が擧げられた。その夜は此處に書き記すことは無い。第二日目の夜からのことを書き記す。第二日目の夜に至つて、前夜に形式

の結婚式は行はれたのだけれど、二日目の夜にも彼等二人の間には依然として童貞と處女とで夜を明かした。第三日目の夜も同じい形勢を保つて夜が明けたが、二人が起き上る前に、彼れは自分の體の上に何か重い物が障つたと感して目を醒ました。それは傍に臥してゐた清子であつた。彼女は彼れが目を醒ましたのを見て、囁き聲で、

『まだ起きなくていゝんですの』と問ふた。

斯う言つて彼女は身をわな〳〵慄はしてゐた。

『さう、もう起きてもよからう』と彼れは言つて、一しよに起き上つた。

彼等の間には何物か隔壁が生じて、樂しからぬ第四日目の夜となつた。彼れは寢た、彼女も寢た。そして二人とも互に一睡だもしないといふことを知りつゝも鷄の鳴く頃まで、敵同志であるもの〻如く相對峙して過した。遂に彼女は床の上に起き上り、きちんとすはつて、さめ〴〵と泣き出した。そして次第にヒステリックの擧動に變じつゝあつた。これを見た彼れもまた起き上つた。二人は相向ひ合づて石の如くに動かないことが暫く續いた。二番鷄が鳴いた。

『清ちやん、どうぞ宥してください』と不意に彼れは言つて、頭を低く垂れた。

清子は驚き呆れて、たゞ彼れを見つめてゐるのみであつた。

清ちやん、私はあなたに懺悔して、宥して頂かなければなりません、どうか私がいまお話することを能く聞いてゐてください』と彼れは言つて、彼れが十七八歳から今日に到る十年間の童貞を守つて來た苦心をくはしく語つた。

『……ところが、あゝ、天罰です、恐しい天罰です、私の增長慢に對する天罰です、私が直江津の遊廓で勝つたと思つたのは、それは相手の女が私に心を向けなかつたせいで、私は誘惑されなかつたのです、私に力があつたのではなく、先方に心が無かつたからです。しかるに先月下旬に長岡へ行つた時に、十年間の童貞を只の一夜の只一回に於て滅茶々々にしてしまひました。私は彼女の手腕に全く力を失つてしまつたのです。しかしそれだけならば、あなたを傷けることではなし、たゞ私をつまらなくしたゞけで濟んだのですが、實に恐ろしいことです、私が或未亡人の家に寄宿してゐた時に聞かされた姦通の話のごとくたゞ一度の過失に取り返しのつかぬことになりました。あなたは今月の初め、平塚らいてうの講演を聞いたでせう？　清ちやん、宥してください、私はたゞ一回の不潔な交りによつて、不潔な蟲と不潔な病毒を受けました、おゝ、天罰です、あゝ、恐ろしい、實に恐ろしい、私は結婚をする資格がありません。清ちやん、どうぞ宥してください。神のごとく綺麗な純粹無垢の處女たるあなたを、この汚れ果てた私がどうして抱かれま

せう、宥してください、宥してください』と彼れは再び頭を低く垂れて、そのまゝ布團の上に伏して泣き出した。

これを聞いてゐた清子は青い顏になり、唇は白くなつた。彼女は動かず、物を言はず、暫くは喪心してゐるやうな樣子であつたが、わつと聲を擧げて泣き伏した。柴野は泣きやんで、立ち上り机の下から一冊の本を出して來て、

『清ちやん、夜が明けましたら、これを讀んで下さい、そして私があなたに觸れない理由を、平塚らいてうの主張の道理あることを了解してください』と言つた。

その書籍は花柳病に關する大部の著書であつた。二人は互を尊敬した形に於て夜を明かした。清子は終日、彼れの與へた書籍を讀んで、時々ため息を吐いた。第五日目の夜が來た。寢る時が來た。彼等は各自の寢床の上に座した。

『清ちやん、わかつたでせう、どうか私を宥してください、全治するまで……けれども私は全治しても、この汚れた體は清まりません、あなたを汚すことです、……あゝ、私共が救はれる道はないでせうか、あゝ恐ろしいことです』と彼れは悲痛な顏をして言つた。

彼女は燃えるやうな眼をして彼れを見た、そして唇を動かした、けれども聲が出なかつた。二三回

も聲を出さうとして出なかつた。遂に彼女は聲の代りに動作を以て、彼れの膝にとりついた。そして何事かを一口言つた。彼れはそれを聞きとり得なかつたので、耳を近づけて、

『何か言ひましたか』と問ふた。

『……いゝわ、どうなつても……』と彼女は言つた。そして『……死んだつて……』とつけたした。

第十七篇　新しい影がつく

（二）

イワンは大學を中途でよして國へ歸つた。それは大學生の騷動のため政府から追放されたのである。會社員と書籍販賣人との二人の友が週刊新聞を出さうとしてゐるので、彼れは早速その主筆となつた。この新聞は政治新聞でもなければ、文學雜誌でもない。その地方の事件や人に對する高等批評のやうな方面に特色を持つてゐるが、時代が時代だけに、ブルジョアーに對する反抗の念がその基調をなしてゐた。

彼れは貧乏と不運とのために親の愛を受けることが出來ず、樂しかるべき青年時代を苦しんで過し、大學に入るやうになつても苦學生であつた。當時の青年で、イワンのやうな境遇を經て來た學識のある者は多くはクロポトキンの無政府主義にかぶれたものである。しかしながらイワンは元來、口へ出してこそ言はないが、皇帝の大忠勤者で、また眞の愛國者でもある。彼れは、人類が幸福に生存するためには國家といふものは必要であり、優良な國家を有するためには優良な政府が必要であると考へて、卽ち方便として國家と政府とを認めてゐるのだ。そして彼れは寧ろ强者の道德としてニイチエを好んでゐた。

けれども當時の露西亞は社會主義や無政府主義を一般に「思想」といふ名の下に於て危險視し、是等の「思想」を有する者に對しては非常に神經過敏になつて、少しく毛色の變つた青年や思想上の事を語る者はみんな國事探偵の手帳には注意人物として記入された。殊にイワンの生れた州には、先年コフトウシウスキーといふ社會主義者がゐて、州の檢察官は枕を高うして寢られないものだから、虛構な罪跡を揑造して、彼れを皇帝暗殺未遂犯人として、死刑に處した。無論愚昧な檢察官はかういふ土地へイワンは大學から追放されて歸つて來た。例の愚昧な檢察官のことだから、學問をした青年はみんな危險人物視してゐたので、イワンの「權力意志」のほかには何等の權威をも認めない見地から新聞に於て高等批評をなしてゐるのを「思想」を語るものとして常に警戒看視を怠らなかつた。

(三)

その地方の大工場の職工と工場主との間に大衝突が起つた。前々から職工は低廉な賃銀で酷使されてゐたので、絕えず工場内には怨嗟の聲が絕えなかつた。どこからともなく彼等に對しては宣傳

的のパンフレットが頻に差入れられたりしてゐた。ところが食料品の價格が暴騰し、食料の大缺乏を來した。これも饑饉やなにかのせいではなくて、政府が政策を誤つてゐるために、下級氏だけがその窮乏を感じてゐるのである。そこへ持つて來て、工場主は職工を三割だけ解雇することにしたので、遂に從順であつた職工も忍ぶことが出來なくなつた。各部の職工部長が集會して、解雇職工の復職と工賃二割增しとを要求し、その要求の容れられるまでは同盟罷工することを相談した。

イワンは新聞に「同盟の力」と題して、この事を論じた。その大要は橫暴な資本家に對する吾等弱者は、彼等に對しては一團の力となつて當らねばならぬ、しかしながら吾等の力は餘りに貧弱であり、彼等の力は餘りに强大である、故によしや一團の力となつても彼れ資本家に勝つことは出來ない、されば吾等はもつと根本的に力を集注して大集團となり、彼等の力の根本を切り崩すことに心がけねばならぬ、その手段方法は……と書いたのである。職工が同盟罷工しても、彼資本家はその工場を永久に閉鎖することによつてそれに當ることが出來るほどの大資產を有するのである。職工は一ヶ月も休業すれば餓死せねばならぬほどの貧弱さであるのだ。

イワンの新聞は神經過敏にして富豪、資本家に媚びる愚劣な檢察官のために沒收せられ、イワンを西比利亞へ追放しようとした。イワンの朋友の盡力によつて、正式の裁判を仰ぐことを請願して、

こゝに陪審官をつけた正式裁判が設けられたのである。職工の同盟罷工の首謀者五人は官憲の手に押へられ、他の職工は無條件で仕事に就くよりほかに仕方がなかつた。

(三)

イワンは二三週間前に従妹にあたる女を妻に娶つた。彼女は良人がどんな罪科を宣告されるか、そんなことは知らずに安らかに眠つてゐる。イワンは暫く妻の寢姿を見てから、汽車の時間表を出して、明日モスクワへ午前中に着く汽車を調べてゐると、ドアーを押して入つて來た者がある。それは新聞社の同人である書籍販賣人に雇はれてゐるつんぼの男である。彼は挨拶もせず、

「おら旦那が言はしたが、旦那はニコライ旦那と二人して保釋金の用意して行くけど、もしや駄目かも知んねから、お前さまは牢屋へ入る支度をして行つたがいゝつて……、奥さまは？　もう寢やしたね、さいなら」と自分の言ふことだけ言ふて去つた。

イワンは罰金を取られるよりも西比利亞行を望んでゐた。若い第二の露西亞はみんな西比利亞へ行く人間によつて造られるやうな氣がするのだ。けれども今『その支度をしろ』と言はれた時には胸がどきりとした。彼れは聖書の『すべてのこと吾れに良からざるなし』といふ言葉を信じてゐる。

また經驗を豐富にして自己を偉大にしたいとも思つてゐる。西比利亞行の苦役のごときは自分にとつては非常に尊い經驗になると考へてゐるのだ。けれどもイワンも凡人であるから、一方に安逸を貪る心があつて、なるべく平和な生活と新妻との甘い睦言に醉つてゐたいとも願つてゐる。

また彼はブルジョアー仲間から非常に憎まれてゐる。いくら神經過敏の愚劣な檢察官でも、イワンの書いたあんな事ぐらゐで彼れを追放の身とするやうなことはしまい、あれは資本家、工場主の方から手を廻してイワンを陷れようとするのではないかと、彼れの朋友たちは思つた　故にイワンも彼等資本家から『ざまあ見やがれ』と言はれるのが殘念のやうな氣もするのだ。しかしイワンは自分は世間のために生きてゐるのではなく、自分は自分のために生きてゐるのだから、他を顧みず、自分は自分の行かうと欲する道へ勇ましく進まねばならぬとも決心した。

彼れは午前四時に起きられるやうに目醒時計のねぢをかけて寢た。彼れがモスクワの裁判所へこの事件で呼出されたのは明日で三度目である。第一回目は取調、第二回目は檢察官と辯護士との辯論があり、明日は刑の宣告があるのだ。明日は午前四時半の汽車に乘ればモスクワへ午前九時に着くのだ。彼れは今迄いつも午前九時出頭の呼出狀であるから正直に午前九時に行つて見ると、裁判所は頗るだらしのない所で、五時間でも六時間でも待たせて置く。それで彼れは、明日も午前九時

に出頭したつて駄目だ。その次の汽車で行つて丁度よいと思ふたけれども、矢張り氣になるので、四時に起きることにした。彼れは入牢したらうんと讀書をしようと思ふて、心の中で持つて行く書物を選んだ。

(四)

イワンは四時に鳴り出した目醒時計に目を醒された。彼れは入牢せねばならぬものを支度するのに、妻にそれを見せては、彼女が心配すると思ふたから、彼女の目を醒さないやうに靜に支度をした。シヤツ、ルバシカ、着替のジヤケツ、書籍、原稿用紙、鉛筆、封筒、切手などをかばんに一ぱいに滿した。部屋を去る時に一寸と妻の寢顏を顧みて、遠くから接吻を送つた。彼れは、自分が若しも牢内か西比利亞で病死すれば、これが或は妻との一生の別れかも知れないなどゝ思つたので一そのこと妻を呼び起して……と考へたが、矢張り起さないことにして、毛布の下から出てゐる足の指にそうと接吻を再びしてから出た。そして『良人が運命の分岐點に立つてゐるこの朝ですら、妻は暖かな夢を貪つてゐる、罪のないものだ』と無智の幸福を感じた。

彼れは停留場に近づいた時に忘れ物はなかつたかと考へて、聖書を忘れたことに氣づいた。そし

て『おれは落ちついてゐるやうでも、まだあわてゝゐる』とも思ふたし、また『宗教、信仰といふものに對する信念が薄らいで來た』といふことを考へられた。彼れは常に顏を見知つてゐる政府の犬をしてゐるピヨトルに改札口で會つた。

『イワンさん、今モスクワへお出かけですな』とピヨトルは言つた。

『君は？』と彼れは問ふた。

『私も一寸と用がございまして……』と答へて、ピヨトルは何處へか行つたが、イワンが汽車に乘つてからふと後を向いて見ると、同じ室の隅の方に背を此方へ向けて彼れがゐたので『はゝあ、おれの監視だな』と思つた。

まだ第一回の公判の始まらない時に、モスクワから一人の國事探偵がイワンの町へ來た。そしてイワンを訪ふた。それは政府ではこのイワン事件を重大視して『裁判はどうなつたか』と時々問合せるほどであつたから、わざ〳〵國事探偵をモスクワからイワンの町へ派遣したものであらう。

『一寸と遊びに來たものですから、お寄りいたしました』と國事探偵はイワンに言つた。

イワンは『おれの樣子を見に來たのだな』と思つたから、

『私を西比利亞へやつたからつて、政府は何んの利益も無いから、罰金をとるのかも知れません

ね、しかし私のやうな貧乏人には罰金は困りますよ』と國事探偵に言つて笑つた。

イワンの朋友のアンドロキッチといふ男が書籍販賣人の店先で大きな聲で、

『イワンがもし無政府主義者でありとすれば、西比利亞へ追放したつて、その主義をやめるものでもない、殺してしまはねばならぬ、政府のする仕事は愚劣きはまると言つてゐる』ところへ、國事探偵かぬつと顏を出した。

アンドロキッチはこの髯だらけな男が國事探偵とは知らぬものだから、猶ほ政府攻擊をつゞけてゐるので、書籍販賣人は彼れの尻を突ツついた。イワンはこのことを思出し、『さうだ〳〵アンドロキッチの言ふとほりだ。おれが若し無政府主義者であれば、西比利亞へやられゝば猶かその主義に對する信念が增して來る、そして一そう反抗するやうになる』と考へた。

(五)

イワンはモスクワの裁判所の人民控所に入つた。煙草の煙とウォッカの匂と人の臭い息とで咽せ返るやうであつた。薄暗くて最初は中に何がゐるかわからなかつた。椅子一脚に就て番人が二コペックづゝ取る。そしてサモワルの洗ひ汁のやうな薄いお茶を持つて來て矢張り五コペック取る。彼

れは『裁判所は人を呼出して置きながら、無料で待つてゐられるベンチを備へて置いたらよかりさうなもんだのに、番人をして人民から七コペック取らしめるのは不屈だ』と思つた。

第二回目の公判の時にこの控所の隣の辯護士控室の電話で廷丁が辯護士の宅へ　今日は土曜日だからお早く御出廷を願ひます』と五六ヶ所へ二度も三度も電話をかけてゐたのを見たイワンは『法文の一字一句にも拘泥してゐるほどの四角四面の裁判官、重箱のすみを楊子でほぢくるやうにして人民の罪を發く裁判官が、最も貴重すべき時間に定りが無く、もし土曜日でなければ辯護士の出廷の催促などはせずに構はないで置き、法廷をいつまでも開かず、人民をして控所の番人に成る可く多くのお金を拂はしめるのであるらしい』と考へた。

イワンは第一回目の公判の時に產れて初めて裁判所の法廷といふものに立つたのであるが、裁判官の態度や法廷の一たいの空氣が頗るだらけて滑稽に感じられたので、ともすると自分はいま法廷に立つてゐるのだといふことを忘れて、體の姿勢を崩して手を後の方へ廻して組んだりするので、法官は怒つて彼れに、

『手を眞直に下げろ、法廷の神聖を保つ上に於て』と小言を食はせた。

法官がわざと恐しさうなを聲を出し、どうかして威嚴をたもたうとするやうな物言ひと、魚のやう

な眼を光らすことゝが、イワンには喜劇でも見るやうな氣がして、どうしても裁判の嚴厳を感ずることが出來なかつた。

『イワン、コヤータロフ、ベリンスキー殿』と叮寧な呼名で、廷丁が頭の上でどなつたので、イワンは是等の回想から急に醒めて法廷の方へ行つた。彼れの胸は蠢いた。そして戰場へ行く兵士のやうな心の緊張を感じて法官の前に立つた。廷丁が他の人民に對しては、たゞ簡單にニコライキッチとか、ペトローウナとか呼び捨てにするに、イワンだけには正式の名を呼んで「殿」とつけたのを彼れは愉快に思ふた。

(六)

たゞ刑の言渡しがあるだけであらうと思ふたのに、第二回の公判に辯論を試みた二人の辯護士も法服をつけて立會つたし、陪審官までがずらりと並んでゐた。こんな詰らぬ事件で西比利亞行を宣告されさうもないのだが、彼れには何んとなく重刑を課せられるやうな氣持がしたので、重々しい氣分がした。それは辯護士が第二回目の公判が終つてから、イワンに、

『檢察官はあなたを無政府主義者と思ふてゐるやうだから、重刑に處せられるかも知れません』

と言つた爲でもある。

公明正大であるべき裁判であるけれども、被告があまりしやべると却つて不利益だから、被告は何んにも言はぬがよいと言ひ聞かされたイワンは、第二回公判の辯論の時にしやべりたいことが澤山あつたけれども、辯護士二人の辯論のあつた後に裁判長が、

『イワン、其方はもう何んにも言ふことはあるまいな』と言つた時に、彼れは仕方なく、

『はい、ありません』と首を下げたのである。

イワンは考へた。法官は全然被告には物を言はせないつもりであるから『其方はもう言ふことはあるまいな』ときめてかゝる。被告はさう言はれるから『はい、ありません』と言つてしまふ。既に法官は被告が如何に辯解しても耳を貸す考へがてんから無いのであるから、被告はどうしても辯護士を賴まねばならぬやうになる。してみると辯護士を食はせんがために政府は裁判所を設けてゐるやうなものだ、と。猶ほ彼れは斯う考へた。犯罪は人間があつて初めて成立したのであるから、その人間をよく知らなければならぬ。イワン事件はイワンといふ人間をよく知る必要がある。辯護士はイワンを初めて見たのであるから、イワンがどんな人間であるかを知らぬ、知らぬ人間の辯護などどうして出來るものか、只お座なりを言ふけだのことでしかない、と。彼れは辯護士の辯論を聽

きながら『辯護士ばおれの心持に反した辯護をしてゐる』と思ふたことが度々あつた。そして書籍販賣人が『辯護はあかの他人の辯護士よりか朋友にさすべきものだ』と言つたのを名言だと、イワンは考へた。彼れは『すべて刑事問題は法律的の見地から見るべきものではない』といふてゐる。

(七)

裁判長はイワン事件をさほどに重大とは思つてゐなかつたらしい。故に檢察官や辯護士の辯論がどうあらうとも、あまり念頭にはそれらのことを止めなかつた。裁判長にはイワンを牢に叩つ込むほどの罪があらうとは思はれなかつたし、また無政府主義者だとも認めはしなかつた。

『イワン、其方はこの論文によつて、當時おこなはれてゐた同盟罷工を煽動しようとしたのであるか』と裁判官は問ふた。

『いゝえ、私の意志はそれとは反對で、そんな事をしたつても駄目だといふ意味をその論文によつて發表したのであります』とイワンは答へた。

『その方は政府の存在を認めるか』と裁判長は問ふた。

『はい、政府の必要は認めます、けれども現在の政府は改革せねばならぬものと思つてゐます』

とイワンは答へた。

『其方は資本家をどう見てゐるか』と裁判長は問ふだ。

『私は資本家を別に惡いとも善いとも思つてゐません、たゞ現在の資本主義的制度の不完全であることを認めてゐます』とイワンは答へた。

茲に於て裁判長は陪審官に向つて、

『陪審官各位、なにとぞ公平の立場に立ち、賢明なる常識を以て、この事件の審判を願ひたい』といふや、陪審官等は次の室に引下つた。

暫時の休憩後、いよ〳〵判決の法廷が開かれた。陪審長は立つて、

『裁判長閣下、被告を適度の罰金刑に處せられたし』と陪審官の審判決定を申告した。

裁判長は書類を翻した後に、判決を言渡した。

『被告、イワン、コヤータロフ、ベルンスキーよ、五十ルーブルの罰金に處す』

イワンは意外に感じた。そして嬉しく思ふたが、踵を返して法廷を出る時にはおのづから口を一文字に結び、右の肩を少しく搖り、不滿の表情をなした。しかし彼れは自分ですぐその事に氣がつき、檢察官に見つけられはしなかつたかと、急にその態度を隱した。彼れは、自分がつまらぬ事件のた

めに五十ルーブルの罰金に處せられたことを不服に思ふてあんな表情をしたのか、又は西比利亞行がはづれたのか失望したぜいなのか、それはわからなかつた。

次の列車で會社員ニコライと書籍販賣人との二人の朋友が來る筈なので、イワンはすぐ停車場へ行つて見た。丁度二番列車がついたところで、二人の朋友は保釋金の用意をしてゐたのである。その姿を見たイワンは嬉しい顏をせずにはゐらなかつたが、つとめて平靜な顏に裝ふて、

『五十ルーブルの罰金だ』とわざと不平げに言つた。

『それはよかつた』と朋友は口を揃へて祝した。

揃り違ひに發車する汽車にすぐ乘つて、彼等は歸ることにした。列車に乘り込むと、來る時に一しよに乘つた政府の犬のピョトルが再び姿を見せた。今度彼れはイワンと向ひ合つて席に着いた。町の停車場へ下りると、政府の犬のピョトルは、

『まづ罰金で濟んでおめでたう』と言つて、にやりと笑つて別れた。

イワンの一行は停車場前の酒場に飛び込んで、ウォッカの祝盃を擧げた。そして新聞の週刊を日刊に發展せしめる相談をした。イワンがほろ醉ひ機嫌で出ると、今まで門口に突つ立つてゐた政府の犬のピョトルといま一人の怪しげな男とがあわてゝ蔭へ隱れた。イワンが歩き出すと、その二人は

跡からそろ〳〵とついて行つた。イワンはそれを知つてゐた。彼れは『あゝ、おれに新しい影がついたな、いつになつたらあれが離れることか』と考へたら、心細く、憤ろしくなり『政府の奴共があわてるやうな事を、うんと何か一つやッつけてくれようか』とも考へた。

第十八篇　尖塔上の絶叫

（二）

全村の住民が今朝はみんな天空を仰ぎ見ながら教會堂の森に向つて急き足に歩いた。遲れて家を出た者、遠いところの者は最早、前に進むことが出來なくなつて、畑や牧場の空地にまで溢れ出ねばならなかつた。それで教會堂の森を中心として三百間の半徑を以て全圓を劃いた中には人間で一ぱいになつた。無論屋根といふ屋根、樹といふ樹には稅吏ザーカイのごとくに登つてゐる。電柱だけは罰せられるので、普通の者は登ることが出來ないが、此時こそと言はぬばかりに電信電燈などの工夫が鳥のやうに登つてゐる。電線の上はさすがに人間はとまつてゐない、たゞ燕が黑いフロックコートを着て、鳶色のチョッキをつけて『これ見ろ』と控えてゐるだけだ。火の見櫓は吾等の領分だと稱して消防組が登つてゐるが、それも組頭だけに限られてあつて、丁度宮中伺候を許されてゐる公侯爵といふ格である。半徑五百間の圓を劃いて、その外周を皇室の藩塀と自稱する華族の連中のごとくに取り圍んで藩塀をなしてゐる村民は口々にこんなことを言ひ合つてゐる。

『あなた、もし見えますか』

『何がでございます？』

『何かゞ……』

『さうですな、まづ屋根の上の人間が見えます、それから青空が能く見えます』

『なるほどな、それだけなら私も同感で』

『あなた方は御存じぢやないんですか、尖塔の一ばん上の方に、あの教會堂のですな、その天邊に男がぶら下つてゐますよ』

『へえ、あの教會堂の尖塔ですか？』

『え、如何にも左樣で……』

『あなたは見えるのでございますか』

『いゝや、私だつて見えはしませんが、さういふ風說があるのです。どうかして見たいもんですが、時間が早いですかな』

『教會の尖塔の一ばん上としますと、たしかあの火の見櫓の二倍はありますな』

『どうしてまたそんな高い所へ登つたんでせうか』

『いや、降つたのかも知れませんよ』

『鳥のやうに小さく見えるさうですよ』

その内に三百間の半徑は次第に少しづゝ長くなつて、圓周はだん〳〵膨脹して來ることは、酒場のおかみさんの腹のごとくである。

『さう押しては困ります』と苦情を言ふ者がある。

(二)

この州の内でも稀れな大教會堂の尖塔の最も高い天邊に一人の男がぶら下つてゐる。望遠鏡で觀測した人間の證明するところによると、ぶら下つてゐる男は當村で高等批評をなしてゐる唯一の週刊新聞のイワン主筆であつて、彼れは太い麻繩を襷にし、その先の鈎を以て尖塔の頂天に引つ掛かつてゐるから、案外、樂ではあらうとのことだ。そして尖塔が朽ち倒れるか、または麻繩が腐つて切れるかしなければ、イワンは下りられまいといふ、そこで教會堂の存在生命は先づ永遠で、基替の再臨までは大丈夫だから、尖塔の腐朽して倒れるのを待つては子孫に語り傳へねばならず、麻繩の腐れて切れる年限は先年同盟罷工があつて、イワン主筆が筆禍のために罰金に處せられた、その本元の鑛業會社の技師からして測量してもらはねば判然しない。[illegible]今分ではあの男の下りられる機會は先づ無いと言つてもいゝ、しかし玆に大問題のあるを忘れてはならぬ、それは例の麻繩の腐

れるまでに、あの男の命の綱が保ち得るや否やといふことである、云々といふのだ。

イワン主筆の朋友第一の會社員ニコライは水平に頭を天上に向けて、その鼻の二つの穴が教會の常燈明に向つてゐるともいふべき位置に置き、大聲を張り上げて、

『おういい、なあぜ、そんな、とうころへ、あアがつたあか、なあんぎいだあらう』と呼はつた。

けれども天上からは返答が無い。或は下からの呼聲が屆かないのか、上からの返答が下へまで聞えないのか、傍觀者ががやゝ言ふので判明しない。警察部長は火事か大水かの時のやうに得意になつて教會堂の屋根の上に登つて、ヴォルガ河の船員の持つ大喇叭に口を當て、人口蓄音機といふ格好で訓示を發した。

『おめえ達、天の人と地の人が問答をやるつてえから、靜かにしたがいゝぜ』

すると『東西々々』とオペラ座のつもりでどなる者がある。半徑六十間くらゐの圓内の人々だけは鳴りを鎭めた。イワン主筆の朋友第二は豫備陸軍士官で、この時とばかりに金米糖やひとでのやうな勳章をぶら下げて出て來てゐたが、號令で聲を慣らしてあるといふところからして、天と地との問答の使命を果すべきことを指名された。彼れは七面鳥の牡のごとく胸を張つて、

『君、君、僕だがね、全村の輿論を代表して君に聞くんだがね、いゝかね、聞えるか、あのなあ、

なぜそんな所へ登つたのか、難儀だらう、下りないかね、え？』と。飛行將校が飛行機の墜落を見るやうな風に天上に顏を向けて聲を放つた。

尖塔上からは洞穴の奥より出るやうな聲が下つて來た。

『吾れひとり群を拔いて高く超越してゐるつてものは、はたから見るやうに餘り樂のもんぢやないよ。しかしだね、俗衆の知らぬ宇宙の眞理と人類愛を感得しられるからね。まあ暫くは放任して置いてくれたまへ』

このとき群衆は『わあつ』と鯨波の聲を擧げた。

『馬鹿だね一

矢つ張り變んだね』

『あれこそほんとの墮落天使だよ』などの囁きが聞える。

(三)

村長から毎日しかり飛ばされてゐる收稅吏、州の知事から模範收稅吏として表彰されるだけ、村民からは表彰されない、稅金の頭をはねて自分の懐を肥してゐる男が茶色のジャケツを見せびらか

せて、雜踏の中をくゞり歩いてゐる。これは教會堂の中で村民の臨時役員會が急設されることの通知狀を各役員に配付するためであるのだ。村役員はみんな教會堂の中に集つた。社會主義者や「思想」を語る者を退治するのを自慢にしてゐる黑眼鏡の村長が議長席に納つてゐる。村第一の金持で第一の憎まれ者である雜貨屋の主人にして、村長よりも威張りたがつてゐる男が先づ立ち上り、

『皆樣から急にお集りを願つたのは、あの天に高く地より離れてゐるイワンといふ男をですな、其筋に於てあの男を見物する群衆を整理するにあたり、吾れ〳〵はまた村の繁榮策を講じたいのですな、それは一舉兩得といふ次第から割り出したのでして……』と言ふや、腕力なら村第一と自ら認めてゐる酒場の主人が、

『人の不幸につけ込んで、利得を貪らうといふのは基督樣にすまねえことではないかと存じまするかな』と柄にもないことを言つて注意した。

雜貨屋の主人はあわてた形で、

『なに、なに さうぢやない、あの男は自分で誓く「ほつて置け」と言つてゐる。お前さん、そだろ、混雜で人死にがある、整理しなけりやならん、そだろ。就てはと、お前さん、柵内が十ベック、柵外が五コペック……』と言ふと、黑眼鏡の村長が、

『代は見てのおもどり、ひゝゝゝゝ』と笑つた。

『時間は一時間づゝとして……』と雜貨屋の主人が言ふと、黑眼鏡の町長が、

『先樣おかはり、ひゝゝゝゝ』と笑つた。

『なに、なに一舉兩得で……』と雜貨屋の主人が言ふと、黑眼鏡の村長が、

『二兎を追ふものは一兎を得ずと、ひゝゝゝ』と笑つた。

すると青年黨から出た一役員、これは尖塔上のイワン主筆の朋友第三の書籍販賣人であるのが、眼を光らして、アンドロウィッチの鷺鳥のやうに首をのばし、

『諸君、これは戯れ事ではありませんぞ、嚴肅な問題ですぞ、看覽料を議する前に、先づ以て如何にして彼れを救濟すべきかを研究調査せねばなりません。故にこゝに於て調査會なるものを組織し、調査員を選擧任命すべきことを建議いたします』と發議した。

雜貨屋の主人は首を縱に上下して、

『それも追つて議するが、先づ先づ場内を整理せんければならぬ、ね、お前さん、そだろ、諸君、如何ですな、はゝゝゝ』と大きな聲で笑ふが、敢て可笑しいのでは無いのである。

黑眼鏡の村長は尖塔上のイワン主筆の朋友第三の書籍販賣人に小さな聲で囁いた。

『あの男はね、君も知つてゐる通り、常に町の發展のために自らを犠牲にすると叫んでゐたから、これを機會に入場料を取ることは差支へないね。それから君、消防義勇團へ命令を發して、各要所々々に非常線を張らしてもらひたい。あの男を救ひ下すのは、鑛業會社の技師長から測量してもらつてからにしないと、勞して功なく、またあの群衆の混雜を整理してからでないと、村の安寧秩序を亂すことになるからね』

この朋友第三の書籍販賣人は消防義勇團の團長であるのだ。寄り集つた群衆の中では、村の役員會でこれを好機として金儲をしようと相談してゐる間に、もう個人的に物賣の露店などを出して金儲をやり、おかみさん方は新聞を尻の下に敷いて手内職の編物を長い針を動かしてやつてゐる。

(四)

尖塔の上の男を圓心とした半徑三百餘間の圓は、中心から圓周に到るまで二條の道路ができた。一本は入口、一本は出口、つまり左側通行を應用したのであつて、これには交通巡査が立番をした。入場料は柵内が十コペック、柵外が五コペックと掲示され、尖塔の見える所までを限度として小さい圓を劃き、それに柵を周らして柵内柵外の區別を立てた。觀覽時間は「一時間を限度とす」

としてある。要所々々には消防義勇團が兎狩りのごとくに非常線を張つてゐる。泣いてゐる若い女と泣いてゐる老女とが柵内に入つて來た。彼女等はイワン主筆の家族であることが、朋友第三によつて證明されたので、入場料御免の恩典に浴した。朋友第一ニコライは彼女等を指し、樹の上のイワン主筆に向つて、

『おうい、君、これは君の最愛の妻と母だ、君の生命を心配して泣いてゐるんだよ』と呼んだ。

『吾れはそのごとき女を知らず、吾妻は宇宙の眞理、吾母は天である。超人は絶對の孤獨を忍ばざるべからずだよ』と尖塔上のイワン主筆は言つた。

熱心に教會へ通つて、若い未亡人を狙つてゐる男が、

『まるで基督様のやつだね』と言つた。

思想が密に語り、反基督を以て聞えた、まだ有名にならない文士が。

『ツアラトウストラの如しさ』と言つた。

『あゝ、氣の毒な、氣が狂つたか』と老人の内では彼れの新思想を理解し得るのはおれだと言つてゐる老人が歎息した。

週刊新聞の第二主筆が小走りに驅けて來て、ポケットから手帳を出し、紫鉛筆を嘗めて口が紫色に

して、頭の天邊の禿けて光つてゐるのを遙か彼方の停車場の大時計と相向ひ合ふぐらゐに、顔を上へ向け、

『わが尊敬すべき主筆閣下よ、明後日が發行日でありますが、如何が致しませうか、御高説があるならば、私が筆記いたしますが？』と手帳と鉛筆とを兩手に差上げた。

尖塔上のイワン主筆は、

『あるよ、あるよ、「尖塔上の感」つて奴を述べるから、君、筆記してくれたまへ』とどなつた。

近くにゐる者は眞上を見上げてゐるために首が痛くなるので、とき〳〵うなだれて拳で首筋をとん〳〵と叩いた。中には腦貧血を起して倒れた者があつたので、直ぐ村醫師を以て組織した鷲志救護班の醫員である、小男のため婦人用の自轉車でいつもミルの風車のごとくに忙しく廻るドクトルが驅けつけて來て應急手當をなした。警察部長はこれに考ふるところがあつて　觀覽時間を一回三十分に短縮せしめた。おかげで新陳代謝が早くなつたので、村の觀覽料の收益が二倍になつた。群衆の中にゐる村の青年黨は村役員がその收益金を何んに使用するかに就て討論をやつた。朋友第一ニコライが現れて、

『おうい、君、氣分はどうだね』と尖塔上のイワン主筆に問ふた。

『吊り下げられてゐるので、胸と肩が痛くなつて來たよ。脚がぶら〳〵とぶらドつてゐるので、血が下つて脚がだん〳〵重くなるよ』と尖塔上のイワン主筆が愚痴を言ひ始めた。

警察部長と村長とは小さい聲で相談を始めた。

イワン君は空腹を感じねえだらうかね、渴を覺えねえだらうかね』と部長が問ふと、黑眼鏡の村長はそれに應じて、

『生きてゐるからには腹もすかうし、喉もかはがうさ、ひゝゝゝゝ』と笑つた。

『だが、しかし食料と飲料水を給興する方法がねえから仕方がねえ』と部長が言ふと、黑眼鏡の村長はそれに應じて、

『飲料水は雨が降ればロへおのづから入りませうよ、食料はいまに天からマナが降つて來ませうよ、ひゝゝゝゝ』と笑つた。

『さう、うまくは行くめえて……』と部長が言ふと、黑い眼鏡の村長はそれに應じて、

『糞尿は確に垂れ下りませうよ、ひゝゝゝ』と笑つた。

『さうだ、それをすつかり忘却してゐた、どうも公衆衞生上よろしくねえ、警戒線を張つて掲示板を立てゝ告示しねえけりなんねえ』と部長は言つて、急いで立ち去つた。

『おうい、……』と尖塔上のイワン主筆がどなつた。

腐つた水の中の鮒のやうに群衆はみんな天上に向つて口をぱく〳〵開いた。

『……ペトロウイチ君、……』

ペトロイッチといふのは、筆記の用意をして最前から待ち兼ねてゐる第二主筆のことだ。

『……この光景と吾輩の談とはだね、吾が獨創であるから、われ〳〵の新聞だけに掲載して、他新聞の掲載と轉載とを禁ずるやうに、警察部長に言つてくれたまへ。そしてね、明後日のわが新聞は一部十コペックの定價として、二萬部の増し刷りをさせたまへ、いゝかね』

『承知しました、夕刊が出ない内に、部長から命令を發してもらひませう』と第二主筆は紫鉛筆を嘗め〳〵言つた。

人夫數人が杭と針金、その針金は荊のやうに棘のある、先年日本と戰つた時に鐵條網に使つた奴を持つて來て、尖塔を中心として、大きな柵を造つた。一人の巡査が掲示板を立てた。その文句は「糞尿降下の危險あり、この柵内に入るを禁ず、警察部長」としてあつた。

(五)

天上のイワン主筆は地上のペトロウイッチ第二主筆に向つて語り出さうとした。すると村の役員會の委員は直に入場料を二倍に値上することを村長に建議した。黒眼鏡の村長はペトロウィッチ第二主筆の袖を引つ張つて、

『見物人の更代時間が來るまで、天上の聲は待つてくれたまへ、それは新奇の觀覽者から二倍の觀覽料をとらねばならぬのだから……』と申出た。

ペトロウィッチ第二主筆はその更代が完了してから、

『ようし』と天上に向つて合圖をなした。

『いゝかね、言ふよ』と天上のイワンは論述を始めた。

『予がこの樹上に吊されたるは普通の解釋より言へば確に禍なり。しかしながら予の解釋はたゞ「運命」なりと言ふ。然らば他動的に斯の如く天上へ押上げられたるかと言ふに決して然らず、自ら内面の衝動的要求によつて自動的に登りたるものなり。されど予の内部にこの衝動的要求の起りたるは卽ち「運命」の働きにして、予自身はそれを如何ともすることを得ざりしなり。予は只その「運命」に從順に從ひたるのみなり。抑も「運命」その物には善惡、禍福の差別あるに非ず。「運命」を享受する人間がその享受するの仕方や態度によつて善惡、禍福の差別を生ずるものな

り。予は如何なる運命もみな取つて以て善となし、福となすの力あり。故に異常なる運命に遭遇する時は卽ち異常なる善と福とを享受するの時なり。いゝかね、聞えるか？

なるほど予は今や身に苦痛を感ず。空腹を覺え、渴に苦しみ、糞尿の排泄を耐へ居れり。諸君は予を氣の毒に思ひ、吾敵は痛快に感じ居るならん。予をこの境遇より救濟するの道は先づ無しと言ふも失當に非ず。早晩予は餓死か悶死かするならん。しかしながら予はこの苦痛を客觀的に觀じ得るところの力あり。心の底より生命の歡喜の湧き來る。

予は今や多くの人間が經驗し得られざる珍らしく驚嘆すべき境遇に在り。こは金錢を以て購ふことの出來ざる尊き現實なり。予はこの現實を凝視して、其中より稀有の經驗を得たしと考ふるなり。予は今まで孤獨になることを恐れて周圍と妥協したる生活を送り居たりしが、今や「運命」は予をして絕對の孤獨の地位に置かしめたり。親も妻も朋友も予をたゞ見上げたるまゝ、如何ともすること能はず。彼等の同情は予の生命を寸毫も救ふこと能はず。玆に於て予は一切の羈絆、人情、義理、すべての關係より超越せざるを得ざるに到りたることを「運命」に感謝す。

予は孤獨になり得たり、故に最大の强者なり。予は今や眞の自己の意見を吐くことを得るなり。彼等は予の言論を壓迫すること能はず、發賣禁止、講演禁止もなす能はず、予を西比利亞へ送る

ことも能はざるなり。實に予は國家にも法律にも政府にも軍隊にも何者にも恐れ、諂ふの必要なし。予の眞の思想を此處に於てか、初めて發表することを得るなり。警察部長は群衆に對して傍聽を禁止するならん、足下は新聞に揭載することを其筋より差止めらるゝならん。されど何者が予の口を嵌し得るものぞ。禁制の予の言を聞きとる者は新しき生命を得て歡喜の生活を限りなく爲し能ふべし。……いゝかね？

さて諸君よ、わが國は元來、ツアーとその政府との……』

以下數語が聞えるに及んで、警察部長は狼狽して、ペトロウィッチ第二主筆の筆記帳を沒收し、群衆に向つて退散を命じた。けれども天上からは聲が依然として下つて來た。

『……國家は彼等のものに非ず、吾れ〳〵人民の……』

部長は益々あわて出し、巡査に命じて例の船員の用ひる大喇叭を吹かしめて、數百の鷲鳥が一時に締め殺されるやうな音響を發せしめ、以て天からの聲を吹き消さうとしたけれども巡査は器械でないから、時々息がとぎれる。するとその間隙には依然として天上からの聲が聞える。

『……國民はいつまでも眠つてはゐない、今や彼等は眼覺めつゝあり、……』

部長は大に逆上して、消防手、消防義勇團員の手を借りて群衆を解散させようとするけれども、急

にはなか〳〵解散しようたつて出來ない。部長は自分の兩耳を塞いだ。さうすると聞えないので、

『貴樣も聞えまい　と部下に問ふた。

『閣下、よく聞えます』と部下は言つた。

『さうかなあ』と部長は泣き出しさうな顏をした。

黑眼鏡の村長は此時消防頭をして、村役場の傍にある腕用蒸汽ポンプを引出さしめ、その汽笛をびい〳〵と鳴らし始めた。今度は器械であるから、人間の天上の聲には負けない。石炭と水とがありさへすれば永遠に鳴笛する可能性がある。警察部長は手を打つて喫稱し、

『吾輩は知事閣下に上申して、あなたを模範村長に推薦するぜ』と言つた。

『それよりも減稅して頂きませう、ひゝゝゝ』村長は笑つた。

それから部長は次席部長と相談を始めた。

『あれは無政府主義者だぜ』と部長が言つた。

『どうもクロポトキンの思想を有する危險人物として西比利亞へ送る必要があります』と次席部長は西比利亞の方向へ鼻を向けた。

『さうだね、しかし西比利亞へ送るまでの間、彼れに國事探偵の尾行を增員しなけりやならねえ

が、空の上の人物に尾行をつけるてえことは前例がねえからね、どうしようか、知事閣下へお伺ひを立てよう、さうでねえか』と部長は言つた。

尖塔上のイワン主筆は蒸汽ポンプの汽笛が小さくなつて聞えてゐるので、あんな小さな音なら吾輩の聲は負けやしないと、依然として諄々と新思想を鼓吹した。下界の群衆や當局者には鳴笛の音のために聞えないが、空の鳥、附近の樹木は靜にそれを謹聽して、鳥は自由を謠ひ出し、樹木は靑々として生長して、國民の生々發展の生命を示した。それから遙か彼方に滔々と流れる露西亞の母たるヴォルガ河の水はその響を傳へて永遠に流れて行き、そして新生命が舊堤を破つて全土に漲るの機運を醸生しつゝある。

第十九篇　イワン盲詩人の追放

（二）

フヂィは或書店から露國詩人クルイロフの童話を翻譯して出した。それから更に「西比利亞經濟事情」といふ本を出すために、日本が見える海岸へ避暑かたゞ〳〵行つた。山と海とが接近したホテルに彼れは宿つて、著述に取りかゝつたが、ときゞ〳〵頭を安めるために海岸を散歩するのである。

或夕方、金色の大きな太陽が日本と支那との間の海の中に落ちようとして、海の波はぴか〳〵と金色の光を放つてゐる頃のこと、彼れは海の中や砂の上に戯れてゐる男女の群れを岩に腰をかけて眺めてゐた。其時まつ白の肌をした者が沖の方へ向いて水の中に立つてゐるのを認めた。その肌の色からして、最初は女かと思つたが、體格は直にそれが男であることを示した。男にしては珍らしいと思ふたので、それを仔細に觀察すると、頭の周圍にほうと金色の後光のやうなものが發散してゐる。不思議なこともあるものだと、その金色の暈のやうなものを能く見ると、それは歐米人が頂く金髪であつたのだ、それで彼れはその男が西洋人だといふことを漸く悟つた、そこで好奇心がむく〳〵と起きて來たので、側近くよつて見ることにした。横の方へ廻つて顔を斜に見たら、それが盲人であつたので、再び驚いたが、猶ほ能く見るに到つて、更に三度驚いて、その驚きは「不思議」

「奇遇」といふやうな感じがまじつてゐた。

彼れは昨年のアカデミーに於て、最も印象をとゞめてゐたのは、彼れが日本にも無い東洋第一と崇拜してゐる洋畫家の描いた「露國盲人イワンの肖像」であつた。今も猶ほ彼れの眼には、その深刻な容貌がちらついてゐるので、海の中に立つて西日を正面に浴びて、金色の長髪を風に靡かせてゐる盲の外國人が確にそのモデルである露國盲詩人イワンであると確信し得た。彼れは胸を躍らしてつく〴〵と眺めた。漂浪の盲詩人、故國を追はれて世界を家とする哀れ尊き人間よと思へば、涙がにじみ出るのである。彼れはもうだまつてゐることが出來ないで、つか〳〵と盲外人に近寄つた。盲外人は振り返つて靜に陸へ上つて來た。

『もし、失禮ですが、あなたはイワンさんぢやございませんか』と彼れは、まづいながらも露西亞語で言葉をかけた。

盲外人は非常に驚いたらしく、立ち止つて、

『あゝ、あゝ、私の國の言葉、おゝ、私の國の言葉、……あなたは？……』と矢張り露西亞語で言つて、それから土語で、

『私は土語わかります、けれど、どうか私の國の言葉いはせてください』と言つて、それからま

た露西亞語で以て、

『あなたはどなたですか』と問ふた。

『私はあなたの御存じない者ですが、私はあなたをアカデミーの肖像で知つてゐます。それでお言葉をかけて見たのです』と彼れは言つた。

イワンは嬉しさうに笑つて、

『あゝ、さうですか、有りがたう、あの一寸とお伺ひしますが、こつちの方が西比利亞ですか』と太陽の入る方向をさして問ふた。

『さうです、この海の先が西比利亞です、右の方には日本があります』

するとイワンは其方へ向つて、兩手を捧げ、

『おゝ、西比利亞、おゝ、西比利亞』と叫んで、海の深くまで飛び込んで行つた。その飛沫の一滴一滴に夕日が映つた。

彼れは走り寄つてイワンの手を引き、陸に上り、

『お話をいたしませう』と言ふと、

『え、どうぞ、私も話させて頂きます、あゝ、本國のことが語りたい』とイワンは言つて、體を

拭ひもせずに服をつけ、彼れに導かれて岩に腰を下し、二人は並んで物語つた。土人の子供が物珍しがつて彼等の前に澤山寄り集つた。そこで彼れは、

『イワンさん、こゝはうるさいから、私の宿までお出でください、ビールでも呑みながらお話しませう』と言つて、イワンの手を引いて立ち上ると、傍にゐた眼鏡をかけた小さな男が土語で、イワンに向つて、

『ぢや、イワンさん、私は歸ります、お歸りにはそのお方から送つてもらひなさい』と言つた。イワンは其方に向いて、

『はい、ではさよなら』と土語で言つて、頭を下げた。

(二)

彼等はホテルの一室で物語つた。イワンは小さなバスケット、如何なる時でも放さないものと見える其中から、古色を帶びた原稿紙にこまかに書き記した露文を彼れの前に差出して、

『これを讀んでください、私が本國でどんな事をしてゐた者だかつてことがわかります。あゝ、私の國の文字を知つてゐるあなたをこの西比利亞に面した東洋の國で會ふたのは誠に嬉しいこと

です』と言つた。

彼れはその古色を帶びた原稿紙のとぢ合せたのを開いて讀み出した。それは第十七編の「新しい影がつく」と第十八編の「尖塔上の絶叫」とのそれであつた。イワンは彼れが讀み終るのを待つて、

『その前の方のは私が實際經驗したことですし、後の方のは私の夢ですよ』と寂しさうに言つて、ほゝ笑んだ。

『しかしこれによりますと、あなたには母も妻もおありになるやうですが?』

『え、あつたんでございます、あつたんでございますが、私が西比利亞に其後追放された留守の間に母は死にしました、妻はゐなくなつたんです』と盲外人は言つて、見えない目を下へ向けて眼瞼を動かしてゐた。

『それに失禮ですが、あなたのお目は何んともなかつたやうに思はれますのに?』

『え、この目ですか、これは前から良い方ではなかつたんですけれど、見えなくはなかつたのです。しかし遺傳といふものは恐しいものですよ、私の家の血統は惡疾者の血があるのです、ですから他系の健康體のものと結婚すれば潜伏してゐても、病氣が出ることはないんですけれど、私の親は同血統の、つまり從妹を妻にしたんです、そのために私は間隔遺傳といふ奴にやられて、

斯うなつたんです。私の家の血統には精神病者、白痴、聾唖者などがあつたんですもの、……』と盲外人は言つて、暫く何かを回想するやうだつたが、

『……西比利亞へ追放された後、あんまり困苦缺乏のために健康を害した、そのせいで失明をしてしまつたのです。そのかはり盲人といふので、監視が緩かであつたものですから、三百里の海を越えて、この平和な、同情深い東洋の國へ來ることが出來ました』と言つて、彼れはまた寂しさうにほゝ笑んだ。

『どうして西比利亞へ追放されるやうになつたのです』

『それが誠に不思議なことで、全く世の中といふものは恐ろしいものです、實に恐ろしい。いまから七年前になりますが、突然檢察官は私の朋友の書籍販賣人の家に踏み込んで來て家宅捜索をやりまして、一通の書面、それは私が送つた、その書面を沒收しました。その書面といふのは、いよ〳〵日刊に發展しようといふ新聞の方の用件なのです。その書面には……いよ〳〵時機が來た、早速おつ始じめよう、同志にも急報して……とあつたのです、これが或意味に曲解されました。しかしそれよりも如何にも不思議に耐へないのは、私も同時に家宅捜索をやられましたが、トランクの中から爆彈が數個出たのですよ、實に不思議なこともあればあるものです。もう斯う

なつては駄目です、最初から私共を陷れようと計畫してやつた仕事らしいんですから……。全く油斷の出來ない恐ろしい世の中です。……こちらに來てから、本國のあの革命を聞いた時には、あゝ、時機は遂に來たかと、私は、私は二三日嬉し泣きに泣きました』

盲詩人は外の樣子に耳を傾けるやうであつたが、再び語り出した。

『あなたの御覽になつたそれに書いてあるやうに、こちらへ來ても矢張り影がついてゐるのです。斯うしてゐても、此家の外には必ずゐることでせう。私は僞盲だと疑はれてゐます、當地の彼等と露西亞の彼等との連絡者と疑はれてゐます。露西亞のボルシェヴィキーから多額の金をとつて宣傳に從事してゐると疑はれてゐます。しかし私のやうな盲人に何が出來ませう、微力孤獨な者に何が出來ませう。なるほど私は無政府主義の思想は持つてゐます、コスモポリタンです、しかし私は詩人です、音樂家です、そして童話作家です、私の望む世界は全然現實の世界を離れた、美しい未來の詩の國です、ユートピア、フリーランドなのです。當地の官憲が私のやうな無力な盲詩人のために心痛されることをお氣の毒に思ひます。けれども私も惡かつたかも知れません、私はサンライス、ナショナルの講演會に「禍の杯」と題して、こんなことを言ひました。……

……あはれな人類、可哀さうな社會は遠い希臘、羅馬の昔から今日まで、恐しい壓制者の手から自

分自身を解放しようとするために幾度か苦い禍の杯を乾して來ました。希臘、羅馬の奴隷はその恐しい主人から、佛蘭西の百姓はその憎むべき貴族から、また露西亞の勞働者と農奴とはその限りない壓制者から自分自身を救ふために幾度も命がけで苦い一杯を飲み乾しました。そして世界は今やこぞつてこの禍の杯をまた新しく飲み乾さうとしてゐます。しかし哀れな人類、可哀さうな社會のために、今度の杯が飲み乾すべき最後の杯であらしめたいと思ひます、と。……それから又こんなことも言ひました。……人は鼠がゐなくなるとその家に火事があると言ふ、しかし事實は火事があるから鼠がその家を去るのです。また人は蟻が堤を去ると洪水があると言ふ、しかし實は洪水があるから蟻が堤を去るのです。頭の古い人達は社會主義者や勞働者が騷ぐから世の中が惡くなるのだと言ふ、しかし事實は矢張り世の中が惡くなつたから社會主義者や勞働者が騷ぐのですと。あゝ、私のこの詰らぬ講演に當地の人達は喝采を浴せ、拍手を送つて下さいました。中には「今夜はイワンの演說を聞いたゞけで、もう十分だ、後は何もなくつてもいゝ」と言つてくれました。私の周圍にゐる當地の人達は私を憐れみいたはつて下さいます、何處の國へ行つても人民はみんな良い人間ですのに……』

彼れの盲目の目は何物かを天に訴ふるやうに上の方へ向けられた。

(三)

フジィは夜おそくなつてから、盲詩人を盲啞學校の校長の宅まで送り屆けてやつた。なるほど後には闇の中に其筋の影が絶えずついてゐた。彼れは「おれも今日から彼奴の手帖の中に書き込まれたな」と思つた。

それからその翌年の初夏の頃の事だ。フジィは斯ういふ事を耳にした。イワンに對して追放命令が下つた。四人の高等係はイワンの保護者の家に赴いて、命令を執行しようとしたが、

「盲人であり、かつは夜でもあるから、是非明日の朝まで待つて頂きたい」と保護者の懇請によつて、彼等はたゞ屋外をかためたゞけであつた。

すると更に十時過ぎになつて、どや〳〵と强盜でも捕へるやうな勢ひで三四十名の正服私服がやつて來て、

『內務大臣閣下の命令をその日の內に受取らないなんて法はない、盲人のくせに生意氣な』と言つて、一齊にどなり立てながら、門を叩きこはし、戸を踏み破り、土足のまんまイワンのゐる二階の一室に押し上つた。そして怖しさのあまり泣き叫ぶイワンを寄つてたかつて踏んだり蹴ったり毆

つたりした揚句のはてが、亂暴にも手とり足とりして梯子段を引きずり下したばかりではなく、今度は材木の上へ突き倒したり、地面の上へ叩きつけたりしても飽き足らず、

『たすけてくれ、たすけてくれ』と土語で悲鳴を上げて泣き叫ぶのに耳をも貸さず、場末の路に敷かれてある砂利の上を道普請のロールのやうにずる〳〵と引きずつて、犬殺しに殺された犬よりも亂暴の取扱を受けて警察署まで運んだと言ふことである。

フジイはこれを聞いて、何んとも言へぬ悲痛の盛じがして『これがみんな世の中を切迫した場合に到らしめるのだ』と歎息した。彼れは、イワンが當地に來た以來の親友と一しよにイワンが檢束されてゐる警察署へ行つたが、絶對に會ふことを許されなかつた。それで差入れ物をしよっとして願つて見ると、

『飢え死にしないだけのものは喰はせてあるから、餘計な眞似はするな』と叱られた。

その内にイワンの保護者も來て、

『せめて荷物をかたづけるために一すとで好いから、歸らしてくれませんか』と頼んだら、

『荷物なら警察の中でだつて造れる』と警察では言つて、荷馬車で全部の荷物を警察へ持つて來たさうで、イワンは汚い留置場の片隅に蹲りながら『これは露西亞へ持つて歸る』とか『これはこ

ちらの誰れそれにやつてくれ』とか『これはいらないから捨てゝくれ』とか言つては一つ一つ手探りに選み分けて、如何にも遣る瀬なさうに一人しよんぼりと最後の整理をしたといふことを聞かされた彼れは、たゝ密かに泣くのみであつた。

彼れはせめてイワンが當地を去る時に　永遠の別れを告げ、若き東洋の國が近き將來に芽を出すであらうことを言つて、決して君の悲慘な運命は結果の美しき果を結ばずにはこの世界はゐないからとのはなむけの言葉を贈らうと思つたが、既に密かに護送されて、人知れず浦鹽の阜頭に押上げられたと云ふ話であつた。

其後半月ほどたつて、イワンのところから點字で書狀が彼れのところへ來た。彼れは知合の盲人から讀んで貰つたら、『御地の人達の親切は忘れない』として、今は浦鹽にゐる某知名のエスペラントの家に、御地にあつた時よりも安全に保護されて居るが、御地の樣子が露西亞の同志に知れる恐れがあるとて、御地から暗殺者が來て、暗殺するらしいとのことで、警戒を怠らないとも書いてあり、最後に、御地に於て悲しき戀の破綻の思出を捨てかねるので、己れを愛してくれなかつた戀人のため御地に於ての著書の印税の半額を彼女に贈つてくれるやうに、或親友に托したことなどを付け加へてあつた。